A.G.O.

エシナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａ．Ｇ．Ｏ．

【Ｎコード】
Ｎ９７３７Ｗ

【作者名】
エシナ

【あらすじ】
「何者とか言われても……一介の女子高生ですが」

空間を隔てて隣接し、互いに影響を及ぼし合い存在する三つの世界。
ある日、その均衡は崩される。
そうして訪れた三つの世界の危機を回避する為に召喚されたのは、三人の騎士と――三人の、女子高生だった。
彼らに課せられたのは、世界を支える六柱の精霊達の解放。
姿を消した調停者の捜索。

均衡を乱す者達の支配者、その完全なる復活の阻止。
――ついでに、巻き添えを喰らって召喚されたうえに敵に拉致された、友人達の救出。
　精霊の半ば脅しにより、彼らは世界救済の為に全力で奔走する。
しかし、王国最強と謳われる騎士達はともかく、一介の女子高生（自称）に世界を救うことは出来るのか。

拳で語る文化部員、
ノーコンの女王、
笑顔と鈍器の覇者、
不幸体質の具現者などでお送りする、
異世界召喚（夫婦漫才風味）冒険活劇です。

拉致された人々？
彼らだって黙っちゃいません。

Prologue

儀式が成功する筈など無かった。

白地に金色の繊細な刺繍が施されたローブを身に纏った魔法師達は、先程まで目を覆うほどの眩い光を放っていた巨大な魔法陣をただ呆然と見つめていた。

儀式が成功に導かれた原因は幾つか考えられる。

選りすぐられた最高の魔法師達。

完璧なる手順。

魔力増幅のための、古からの法具の使用。

儀式を受ける側の人間達の素質。

だがこれだけの好条件が揃っていても、成功の確率は絶望的に低かった。

何故か。

精霊の生み出す魔力を調整・統括し、均衡を保つ役割を担う人物。

世界にとって無くてはならない、尊き人。

彼が忽然と姿を消し、魔力を殆ど使役出来なくなるという現象が、この世界に起きていたからだ。

均衡を保つ者が居なくなれば、世界中にまんべんなく巡っていた魔力の循環が乱れ、手始めに各地で災厄が起こるなどといった形でその影響は現れる。

しかし現在、魔力は循環が乱れるのではなく、その殆どが消失していってしまっていた。

世界が生きるための生命力生命力でもある、魔力。

それが消失するということは、世界が消失するということを意味している。

何としても回避せねばならない事態であった。

壊乱ではなく、消失。
その理由は不確定で、しかし、明らかだ。
魔力の循環の乱れによる災厄は、過去に幾度か起きている。それは、尊き役割を担う者の選定や引継ぎに支障が生じ、一時的にその役割を負う者が不在であった時……尊き者が頓死したなどの理由でそれらの状況に陥った場合である。
だが、今回は消失。
尊き者が“この世に居ない”のではなく“この世界に居ない”ことを意味していた。
可能な限り有能な人材を投入しても尊き者の行方の片鱗すら掴めずにいることが、良い証拠である。
彼らに残された道は、たったひとつ。
ここではない世界へ。
精霊の住まうという世界へ渡り、原因を探り出し、行方を追う。
……それしか、無かった。

これはその為の儀式であった訳だが、魔法陣を発動させ、精霊の住まう世界へと渡るほどの魔力は、もはや世界には残されておらず……ゆえに、魔法師達が儀式を執り行うことは、命懸けであった。
捧げる代償少なく巨大な力を使役しようとすれば、生命力そのものを魔法陣に吸い取られてしまうからだ。
魔法師達だけではない。
儀式を受けた3人の人間も、決死の覚悟であった。
例え魔法師達全員の命を犠牲にして魔法陣が発動したとしても、少しでも力が不足すれば、己の世界と精霊の住まう世界の間にある“亜空間”と呼ばれる空間に放り出され、醜く朽ち果てるという運命を辿ることとなるのだから。

だが、どういうことだろう。
現在魔法師達の間に犠牲者はひとりも出ておらず、発動時の魔法

陣の輝きから察するに、儀式を受けた3人は精霊の世界へ渡ることに成功している。
このような結果となる可能性は……一縷の望み、という言葉すら当てはまらないほど、低かった筈。
喜ばしい事態であることは確かだが、魔法師達は驚きと疑念を隠し切れなかった。
「……信じて待つしかあるまい」
魔法師のひとり、優しげな目元とたっぷりと蓄えられた銀色の髭が特徴的な老紳士が、誰にともなくそう呟く。
それはとても静かな声であったが、ドーム状の高い天井を持つその空間には酷く響いた。

偶然であったのか、命運であったのか。
それとも何かの意図に操られているのか。

どちらにせよ、どうか彼の者達に幸運を。
精霊の、ご加護を。

1―1　ラーメンと胡椒と魔法陣

「うぃー、お疲れさーん」
「乾杯〜！」

日本某所にあるラーメン屋、“唯我独尊”。
頑固だがひたむきであると名高い親父が営むその店内で何やらオッサンのような声を上げたのは、しかし、若い女性であった。
いや、清涼感溢れる夏用の学生服を身に纏ったその女性は、少女と表現した方が正しいのであろう。
少女5人、少年2人という組み合わせの揃いの学生服を着たその集団は、唯我独尊の店内隅のテーブル席（とは言っても店内にテーブル席は2つしか存在しないが）を陣取り、テンションも高く手に持ったグラスを打ち鳴らして乾杯なんぞをしていた。
ちなみに付近の高校に通う学生である彼女らの持ったグラスの中身は、美味しいとは言い難い水道水である。
それでも何だかやたらと美味しそうに、先ほど一際オッサンくさい台詞を口走った少女はグラスの中身を一気に飲み干した。
「あぁー、このほのかに残る消毒薬の味が身体に染みるねぇ」
「ハルちゃん、おっさんくさいよ」
「華奈先輩は普段からしておっさんくさいですよ」
「ふふん、今日のあたしは何を言われようと動じないのですよ？」
すかさず突っ込みを入れたのが小森深冬（ささもりみふゆ）、毒舌追撃したのが諏訪（すわ）愛花（まなか）だ。
深冬はゆるく波打つ長い髪を耳の後ろ辺りで2つに括った、小柄で可愛らしい少女。
愛花は肩辺りまで伸びた真っすぐな髪と、きりっとした目元が印象的な少女である。
ついでに、オッサンくさいのは青桐華奈（あおぎりはるな）。後ろでひとつに括った

髪を魚の形をした大きなクリップで留めているのが特徴的だった。
「お前今日、Cの主旋律のところ音程ズレてただろ」
「何おぅ！？」
「……ぷっ、動じてやんの」
あぁーしまったぁ！　などと言いながら、華奈は頭を抱えて身悶える。
短い髪をかるく立てさせている少年三鴨弥鷹（みかもやたか）は、簡単に引っ掛かった華奈を見て鼻で笑った。
「ねぇねぇそんなことよりさぁ、東高のファゴットの人格好良かったよねぇ」
コショウ瓶を握り締めつつうっとりとした表情でそう言ったのは、肩より少し短い髪を外跳ねにした少女、春日彩瀬（かすがあやせ）。
彩瀬の言葉を聞いて、愛花はあからさまに眉を寄せた。
「あんなのただの優男じゃないですか」
「えぇー、良いじゃない格好良いんだし！　ねぇハルちゃん！」
「あー、あたし優男には興味無いし」
「そんなぁ、みんな酷いよー」
軽くあしらわれ、彩瀬は相変わらずコショウ瓶を握り締めつつ唇を尖らせる。
その様子に苦笑を漏らした長髪の少年は、青木茅斗（あおきかやと）。
そしてそんな皆の様子を終始穏やかな表情で見ていた猫毛の少女が、蓮野環（はすのたまき）だった。

彼女達の共通点は、同じ高校の吹奏楽部仲間であること。
今日は地域振興の為の音楽祭（地域の合奏・合唱の団体、ゲストにプロの演奏家などを招いて行う）などという　ものに召集されて演奏し、現在はその帰りである。
彼　女達は部の中でも外でも仲が良く、大会や演奏会の後にこうして唯我独尊へ集まり打ち上げをするのが、もはや恒例となっていた。
特別に行事が無くとも、普段から頻繁に通ってはいるのだが。

要するに、ラーメンが好きなのだ。
「オラよ、華奈、ラーメン運んでくれや」
「はいよー」
親父さんに言われ、一番外側の席に座っていた華奈がラーメンを受け取りに席を立つ。
慣れているのか、華奈はてきぱきとカウンター席に置かれていくラーメンを運び始めた。

－＊－＊－＊－＊－＊－

彼女達が唯我独尊を出たのは、それから約1時間後。
夕刻で車通りも人通りも少ない道路に伸びた7人の影は、ラーメンを食べながら今日の出来事などで散々盛り上がったというのに、帰り道でもとりとめのない話に花を咲かせている。
それもまた、いつものことであった。
「タマちゃんと茅斗先輩はこれから受験勉強大変だね」
集団の先頭を歩いていた華奈が言うと、すぐ斜め後ろを歩いていた弥鷹が“受験”という単語に顔をしかめる。
言葉を受けた環は、ふわりと柔らかく微笑んだ。
「もうそろそろ本腰を入れないと後で大変だから、仕方ないね」
季節は、夏から秋への変わり目。
夏の大きな大会も終わり、3年生である環と茅斗は今日の音楽祭をもって引退ということになっているので、それゆえの話題だ。
厳密には冬にもうひとつ少人数参加制の大会があるのだが、彼女達の学校では、その大会は3年生は自由参加となっており、進学組である環と茅斗は参加を控えることになっている。
「受験かー」と言ってため息を吐き出したのは、一番後ろを歩いていた茅斗だ。

その悲痛な様子に環以外の者は苦笑を漏らす。
「たまちゃんも茅斗先輩も大変だよね……ところで、茅斗先輩はどこを受けるか決まりました？」
「んー、まぁ、英文科があるところかな……」
深冬の問いに、茅斗は苦笑交じりで答える。
まだはっきりとは決まっていないようだが、このくらいの時期の受験生にはよくあることであろう。
と、ふと気付いたようにして愛花が環を見る。
「そういえば、環先輩はどこを受けるんですか？」
「あれ？　マナちゃん知らなかったっけ？」
環の代わりに振り返って口を開いたのは華奈だ。
愛花がこくりと頷くと、華奈は何故か誇らしげににんまりと笑う。
「良いですかマナちゃん。タマちゃんはですね、何と、医大を受けるのですよ！」
えぇー！？　と、何人かが驚愕の声を上げる。
華奈・環と幼馴染で、そのことを知っていた深冬だけは、特に驚いた様子は無かった。
「医大って、凄ぇっすね……」
勉強嫌いな弥鷹にとっては考えられないことらしく、酷く感心した様子だ。
「タマちゃんは頭良いからねぇ。両親とも医者だし」
「開業医だけれどね」
やはり何故か誇らしげに言う華奈に、環が補足する。
充分凄いよなぁ、と言ったのは、何故か哀愁を漂わせている茅斗だ。
受験する大学すら決めかねている自分に半ば劣等感のようなものを感じているのかも知れない。
「医者かぁ……素敵」
そんな茅斗を他所に、彼の隣を歩いていた彩瀬が、ぼそりと呟いた。

うっとりとした表情を浮かべていた彼女は、突如覚醒したかのようにはっとして環を見る。
「環先輩っ、大学に格好良い人がいたら紹介してくださいねっ！？」
その言葉に一瞬全員がきょとんとしたが、直後、環は柔らかい笑みを。深冬と茅斗は苦笑を、そしてそれ以外の者は呆れ顔を浮かべた。
「アヤちゃん、あんたそればっかりですな」
半眼で彩瀬を見ながら、華奈が言う。
彩瀬は可愛らしく頬を膨らませた。
「えー、良いでしょこれくらい！　ていうか、格好良い男の子に興味無いハルちゃんの方が変だよ！」
必死で訴えかける彩瀬だが、華奈は「あー、はいはい」などと言って軽くあしらっている。
と、苦笑のままその様子を見ていた茅斗が、彩瀬の手に握られているものに気が付いた。
「春日、それ」
「ん？」
茅斗に言われ、彼が指差す先……自分の手に、彩瀬の視線が移る。
その手に握られていたのは、唯我独尊のコショウ瓶。
「あ……」
彩瀬が呆けたような声を出すと、華奈と弥鷹が同時に吹き出した。
「何、アヤちゃん、コショウ持ってきちゃったの！？」
「そういや今日ずっと握りっぱなしだったもんな！　そんなに気に入ったのかよ！」
「うっ……だ、だって、この瓶握り心地が良いんだもん！」
堪え切れずに爆笑している華奈と弥鷹に、彩瀬は何だか良く判らない言い訳をする。
ひとしきり笑うと、華奈は「全くしょうがないなぁ」と言って彩瀬の隣まで数歩、引き返した。
「さて。では、コショウを返しに行って参りますか？」

「ハルちゃん、一緒に行ってくれるの？」
「まぁ当然でしょう」
華奈がにんまりと笑って言うと、彩瀬は心底嬉しそうな顔をする。
「というか、ここは全員で進軍でしょう」
続けて言った華奈の言葉に異論を唱える者はいなかった。

――しかし。
全員で唯我独尊への道を戻ろうとした、その時だった。

突然華奈と彩瀬の足元から真っ白い光が噴き出し、２人の行く手を阻む。
あまりにも奇怪な現象に２人は声を上げることすら出来ず、目を剥いたまま後ずさりした。
自分達の身長よりも高く噴き出す光。
触れて熱かった訳ではないが、何となく、近付くのは危険な気がする。
そもそも何の変哲もないアスファルトがこのように光を噴き出す筈など無いのだ。
「はっ……ハルちゃん、何これ！」
「あ、あたしに聞かれても……！」
後ろから避難してきた深冬にしがみ付かれ、華奈は振り返る。
すると、自分達が光に取り囲まれているということに気が付いた。
警戒して全員で固まっている場所を中心として、彼女達を取り囲む、半径２メートルくらいの円状の光の柱。
歩道を挟んで右側は空き地、左側は道路である為に、自分達の他に巻き込まれている者は居ない。それだけが幸いだと、このような状況であるにも関わらず何人かが思った。
日常ではありえない現象に、華奈の心臓が煩く脈打ち、夏の暑さのせいではない汗が一筋、首筋を流れていく。
例えば不良やチンピラに取り囲まれたなどというのなら、弥鷹と

２人で撃退してみせる自信が華奈にはある。
だがこんな時は一体どうすれば良い？
こんな非日常への対処法など、華奈には判らない。
もどかしさに奥歯を噛み締めると、あざ笑うかのように光が一層輝きを増した。更には外側から彼女達の方へ、何か複雑な模様や文字のようなものを描きながら細い光が迫ってくる。
彩瀬は気味悪そうに悲鳴を上げるが、こんな時に何だが綺麗だな畜生、などと、華奈は思っていた。
やがて足元の地面全てが光の模様や文字に埋め尽くされる。
魔法陣、などという単語が脳裏をよぎったのは、ＲＰＧゲーマーである茅斗と愛花だけだった。

魔法陣は一際眩く輝きを放つと、地面側からゆったりと掻き消えていく。
その場所に日常が戻った時には、そこに居た筈の７人の姿は無かった。

１―２　黒き騎士達との邂逅

ヒールの音を小気味良く響かせながら、女は石造りの薄暗い通路を歩いていた。
所々に設置されている松明の明かりが、時折彼女の姿をぼんやりと映し出す。
ゆるやかに波打つガーネット色の長い髪と、女性らしい艶やかな身体のラインを誇るその女は、多少気の強そうな雰囲気ではあるが、顔の造形もかなり美しいといえるだろう。
ただ、ひとつだけ。
彼女の耳は長細く尖った形をしているため、人間であるとは言い難かった。
女はその美しい顔を少し歪める。
通路を奥へ奥へと進むにつれて、鉄のような不快な臭いが濃くなってくるからだ。
しかし、通路が終点に差し掛かり、その先にある空間から漏れる光が目に入ると、女は表情を元の気の強そうなものへと戻した。
通路を抜けた先にあったのは、だだっ広い空間である。
半径が５０メートル以上ある巨大な球体を真っ二つにしたような、そんな形状をしていた。
壁はやはり石造りで、天井の一番高い部分から光源の良く判らない光が煌々とその空間を照らしている。
床は磨きぬかれた大理石のようにも見えるが、その素材ははっきりとは判らなかった。
「シュノヴァ」
通路を抜けるなり、女は何者かに呼び掛ける。
広い空間にひとり佇んでいた男は、呼び掛けられてゆったりとした動作で振り返った。
男の造形も、かなり美しかった。

造形を際立たせる、透けるような長い銀色の髪に、切れ長の瞳。
ただ、女と同様、男の耳も長細く尖っており、人間ではないということを誇示している。
だが、それよりも印象的なのは、２人が纏う雰囲気の違いであった。
男は、触れれば凍えそうなほどの絶対的な冷たさを纏っている。
見るもの総てを侮蔑するかのような冷ややかな目が、特にその雰囲気を際立たせた。
「気付いたわよね？　空間越えをした者がいるわ」
そんな雰囲気にも慣れてしまっている女は、さっさと用件を済ませることにする。
この空間に、あまり長く居たくない。
「１０人ほどか。４人、この城の近くへ落ちたな」
彼の返答の口調は淡々としているが、会話は出来た。
「ユリウス王国の調査隊か何かかしら……どうする？」
「今のユリウス王国に空間越えをする程の魔力が残されているとは思えないが。城の近くへ落ちた者は捕らえて地下牢にでも入れておけ」
「結界を張ってあるのはアレを入れてあるところしかないわよ」
「ではアレと一緒に放り込んでおけ」
「判ったわ」
話が済むと女は踵を返し、通路の方へと戻っていく。
そして通路に差し掛かった辺りで、漂ってくる臭いに再び顔を歪めた。
男のいた空間。
その床から漂っていた不快な臭いは。
紛れもなく、血の臭いであった。

－＊－＊－＊－＊－＊－

「おい、さっさと起きろ」
「んぁ……？」
聞き覚えのない声に呼び掛けられて、華奈はぼんやりと覚醒した。
ゆっくりと目蓋を持ち上げながら、まだはっきりしない頭を働かせる。
自分はどうやらうつ伏せに倒れているようだが、光に取り囲まれて、気を失って……それから一体どうなっただろうか。
他の皆は……
「……っ！　皆は！」
両腕に力を込め、華奈はがばりと上半身を起こす。
と、何故か目の前に、見知らぬ男の顔があった。
どうやら華奈は、まるでこの男を押し倒しているかのような格好で倒れていたようである。
黒髪に赤い瞳の、華奈ですら格好良いと思える顔をした、若い男。
もしアヤちゃんだったら絶叫するほど喜ぶだろうなぁ、などと、華奈はどうでも良いことを考える。
しかし一体何故、このような状況に。
「いい加減どいてくれないか」
「……っ、あぁ、こりゃどうも失礼しました」
不機嫌そうな男の声を受け、華奈は慌てて男の上から退いた。
数秒間見つめてしまっていたらしく、何だか気恥ずかしくなって華奈は軽く頭を掻く。
それからようやく、周囲を見渡してみた。
周囲は真っ黒で、何も無い。
しかし自分の姿や身体を起こし立ち上がった男の姿などははっきり見えるという、何とも不思議な空間。
華奈は座り込んだまま男を見上げた。

「あの、他に人は……？」
「俺の連れが2人いる。あと何人かいるようだったが……あぁ、来たな」
華奈の方を見もせずに答えた男の視線の先を、華奈は見る。
すると、男と似たような格好をした別の若い男が2人、それぞれ別々の方向から何かを抱えてこちらへ向かってくるのが見えた。
それぞれひとりずつ、男達に抱えられている者に、華奈は見覚えがあり過ぎる。
長いオリーブグリーンの髪をひとつに束ねた長身の男に抱えられているのが、深冬。猫毛なのか少し跳ねている灰色の髪の、眼鏡を掛けた男に抱えられているのが、環だ。
男達は華奈達の近くまで歩み寄ると、深冬と環を真っ黒な地面へゆっくりと降ろす。
華奈は降ろされた2人の元へ駆け寄り、2人の間にしゃがみ込んだ。
「深冬！　タマちゃん！」
呼び掛けながら揺すると、2人は微かに眉を動かす。
怪我もしていないようであるし、とりあえず無事であることに、華奈は心底安堵した。
「お前は何処から来た？　何者だ？」
ほっと一息ついたところで背後から高圧的に問い掛けられ、華奈はしゃがみ込んだまま振り返る。
視線の先は、先程の黒髪の男であった。
「何者とか言われても……一介の女子高生ですが」
訳の判らない問いだったが、華奈はとりあえず答えてみる。
が、黒髪の男は華奈以上に訳の判らなさそうな顔をした。
「ジョシコウセイって何だ……？」
「まあまあ、パルス。そんな怖い顔してたら答えられるものも答えられないだろう。怯えてるじゃないか」
「地顔だ」

自分の方へ寄ってきた長身の男に、黒髪の男は少し不機嫌そうに返す。
いや別に怯えてはいないけど、と心の中で突っ込んでから、華奈は長身の男に視線を合わせた。
「突然失礼したね。俺達はユリウス王国の者で、俺の名は、フラット＝マーヴェラス。こっちがパルス＝グランドル。で、あっちがカイリ＝ミハエリス」
長身の男はまず己の名を名乗り、黒髪の男、眼鏡の男の順に手で示していく。
ユリウス王国なんていう国あったっけか、などと考えながら、華奈は答えた。
「あ、ご丁寧にどうも。あたしは青桐華奈です」
「アオギリ？」
「ハルナ、が名前」
「そう、ハルナ。少し聞きたいんだけど……俺達は、魔力喪失の原因とある人物の行方を追って、精霊世界へ来た筈なんだ。ここが精霊世界かどうか、判る？」

魔力喪失？
精霊世界？

何のことやら、と、華奈は眉根を寄せて首を傾ける。
パルス、フラット、カイリと名乗った3人の男は、その反応に顔を見合わせた。
「どういうことだ？　こいつ、精霊世界の人間じゃないのか？」
「パルス、女の子にこいつとか言わないように。でも、おかしいな。そもそも儀式は成功したのか？」
「もしここが亜空間だったら僕達は今頃死んでいる筈です。成功したとしか、考えられない」
男達は華奈をそっちのけにして相談を始めてしまう。

知識に無い単語が飛び交っている為に何の相談をしているのかは判らなかったが、彼らが自分達の世界に没頭してしまう前に、華奈には、どうしても聞いておかなければならないことがひとつだけあった。
「あの」
声を掛けると、３人同時に華奈の方を見る。
華奈は表情に少しだけ不安の色を滲ませ、口を開いた。
「あたしとこの子達の他に、人はいなかった……？」
問いを受けて、フラットがカイリに視線を送る。
カイリは目を伏せ、首を横に振った。
「残念だけど、君達だけみたいだ」
「マジですか……」
フラットから返ってきた答えに華奈は愕然とした。

タカは。アヤちゃんは。マナちゃんは。茅斗先輩は。
一体何処へ、消えてしまったというのか。

「あたし達、家に帰る途中に変な光に取り囲まれて、気が付いたらこんな所にいて……でも、その時は7人いたはずで……あと４人、いる筈なのに……」
誰にともなく、華奈は呟く。
先程、彼らの誰かが『死』という言葉を口にした。嫌な予感が身体中を駆け巡り、華奈は震える手で己のスカートを握り締める。
人の心配など、している場合ではないだろうに。
悲痛な表情で華奈が目を伏せると、ぽん、と、頭に何かが乗せられたような感触があった。
ゆるりと目を開けて顔を上げてみると、目の前に、黒髪の男……パルスの顔がある。
頭に乗せられているのは、華奈の前にしゃがみ込んだパルスの手のようであった。

励ましてくれているのだろうか。
無愛想で怖い感じがしたが実は結構優しい奴なのかも知れないと、華奈は思い直す。
と、後ろから微かに声が上がった。
華奈が振り返ってみると、目を覚ました深冬と環が起き上がっている。
「いたた……あれ、ここ何処？」
「ハルちゃん……？　そちらの方達は……？」
「深冬、タマちゃん……」
起き上がった2人を見て、華奈は胸を撫で下ろした。
その、直後。
『ようやく全員が目を覚ましたようだな』
真っ黒な空間に、声が響いた。
何もない筈であるのに、その声は空間内に酷く反響している。
全員が警戒し、周囲を見渡した。
『そう警戒しなくとも良い。私の話を、聞いて貰いたいだけだ』
その声と共に。
ゆらりと、真っ黒な空間に何かが姿を現す。
全員同時にその方向へ視線を向けると、そこには人間の女性に近い姿をした何かがいた。
それは、耳が長細く尖っており、地面から少し離れたところを漂っており、半透明で身体が陽炎のように揺らいでいる為、人間であると表現することは出来ない。
だが何故か威厳のようなものを漂わせるその者は、伏せていた切れ長の瞳をゆるりと開いた。
『良く来てくれた。本当に、良く来てくれた』
目を細め、切なげな笑みを浮かべながら、その者は言う。
たったそれだけで、全員の警戒心が薄らいでいった。
「あの、貴女は……？」
少し遠慮がちに、フラットが問う。

その者は表情を威厳のあるものに戻し、答えた。
『我が名はデルヴィス。魔を司りし者』
フラット達は目を見開く。
『パルス、フラット、カイリ。お前達ならば、私の名を耳にしたことくらいはあるだろう』
何故自分達の名を知っているのかということよりも、その者がデルヴィスと名乗ったことに、彼らは驚愕していた。
華奈達は訳が判らず、首を傾げる。
デルヴィスとパルス達3人は、ついていけていない華奈達を余所に話を進行し始めた。
「まさか、直接精霊に会うことになるなんて……」
「では、デルヴィス。貴女が我々を？」
『そういうことになる。お前達の儀式は成功させるには魔力が不足し過ぎていた。ゆえに私の力とお前達の力、そしてそこにいる3人の力を使って、私がお前達をこの世界へ呼び寄せたのだ』

なんですと。

華奈はあからさまに眉を寄せる。
深冬も環も、各々不振そうな表情を作った。
彼らの話の内容の大半は意味不明だが、ひとつだけ、完璧に理解できたことがある。

“私がお前達をこの世界へ呼び寄せた”

つまりは、目の前にいるこの浮遊物体の所為で、現在自分達はこのような事態に陥っているという訳で。
……それはちょっと、聞き捨てならなかった。
『お前達を呼び寄せたのは、他ならぬ、お前達にやり遂げて欲しいことがあるからだ』

デルヴィスは話を続けようとする。
しかしそれを、華奈が遮った。
「はーい先生。ちょっとお話が高度過ぎてワタクシども付いて行けておりませんので、ワタクシどもにも判るようにきっちり説明して頂きたいんですが」
まるで授業中に質問でもするかのように手を挙げ、おどけた口調ではあるが少し嫌味も込めて。
けれども表情は真剣そのもので、華奈は言う。
その後に、同様に厳しい表情を湛えた深冬と環が続いた。
「そうだよ。私達の力を使ってとか、呼び寄せたとか、一体どういうことなの？」
「それに、あなたがわたし達を呼び寄せたことが本当だとして、わたし達が奇妙な現象に遭遇してこの場所で目を覚ますまでは7人いた筈なんです。一緒にいた筈の他の4人がどうなっているのかも、きっちり説明してください」
そう、環が言ったのが、一番の問題だ。
あの奇妙な光が、自分達が呼び寄せられたゆえに発生した現象だったとするなら。自分達が目を覚ましたこの場所に他の皆がいないのはおかしい。
『お前達と共にいた4人は……敵の手中に、捕らえられている』
「……なにそれ、どういうこと」
華奈達の表情は更に厳しいものに変わった。
その鋭い視線を、デルヴィスは真摯に受け止める。
捕らえられているだなんて穏やかな話でないことは明らかで、そのような現象に突然友人が巻き込まれた彼女達としては、怒りを抱くのは無理のない話だった。
ただ、自分達も訳の判らぬ現象に巻き込まれ、突然見知らぬ場所へと放り出され……混乱していても不思議ではない状況だというのに、自分以外を気に掛けることの出来る彼女達の心を、デルヴィスは嬉しく思う。

彼女達を選んで、良かった。
『この黒い空間は私の創り出したもの。外と内の物質・魔力の行き来を遮断する結界の役目を果たしている。私が先程敵と呼称した者達の目を欺き、お前達を護る為のものだ。
だがお前達の為の結界であったゆえに、それ以外の者は内側へ入ることは許されない。お前達と共にいた４人は結界から弾き出され、このような事態に空間越えを果たした異質なものとして、捕らえられてしまったのだ』
では、お前のせいで皆は捕まったのではないか、と。
咽まで出かかった言葉を、しかし、彼女達は飲み込む。
デルヴィスの表情が心苦しそうなもので、故意ではなかったということが明らかであるゆえだ。
彼女達は、表情から厳しさを拭い取る。
「……敵とか、このような事態とか、空間越えとか、一体何なの」
「わたし達にやり遂げて欲しいこと、というのも説明してくださいね」
『何も、言わないのか』
彼女達がどう答えるか、何となく判るような気がするが。
デルヴィスはあえてそれを口にした。
「まぁ、責めてる暇があるなら知りたいことが山ほどあるなーと思っただけですがね」
「捕らえられてる、ということは、とりあえずは無事ということなんだよね？」
「その事実が判るということは、場所なんかも判っているということでしょうし」
諦め顔の華奈が、苦笑交じりの深冬が、穏やかな笑みを湛えた環が、答える。
デルヴィスは嬉しそうに笑い、パルス達は、彼女達の頭の切替えの速さに感心した。
「それよりほら、その辺も含めて説明、説明！」

デルヴィスとパルス達の暖かい視線を受けて気恥ずかしくなったらしい華奈が先を促すと、デルヴィスはゆるりと首を縦に振り、その表情を威厳のあるものに戻す。
『ハルナ、ミフユ、タマキ。これから私が言うことは、我々精霊の力のあまり影響しない世界で生きてきたお前達にとっては信じ難い話となるだろう。だが私の言葉に一片の偽りも無いということを、先に述べておく』
華奈達は小さく頷いた。

『我々の世界は亜空間と呼ばれる深淵の空間に阻まれてはいるが、隣接し、互いに影響を及ぼし合う間柄にある。
ひとつは現在お前達が居る場所、我々精霊の住まう世界。
ひとつは我々精霊の力の影響を受けそれにより生を紡ぐ場所、パルス、フラット、カイリ……お前達の世界。
そしてもうひとつは、我々精霊の力の影響を殆ど受けない……ハルナ、ミフユ、タマキ、お前達の世界だ。
我々の影響を受けないものを第一世界。受けるものを第二世界。そしてこの世界を第三世界と、我々はそう呼んでいる』

デルヴィスは一旦言葉を切った。
これだけでも信じ難い話であると思うのに、デルヴィスの話を静かに聞いて理解しようとしている辺り、華奈達はだいぶ柔軟な思考の持ち主だと言える。
パルス達は元々精霊の魔力と密接した関係にあり、魔法や精霊世界の存在など当たり前である世界で生きてきた。
ゆえに、隣接する世界は実は3つであると直接精霊の口から聞いてしまった今、それを受け入れることは容易い。
だが華奈達は、魔力や精霊などというものとは無縁の世界で生きてきた。
自分の常識の範疇を超えるものを受け入れるのは、思いのほか難

しいものだ。
「しかし、世界が3つあったとは……俺達は、精霊世界の存在しか知らなかった」
『第一世界の情報を手にする術は、お前達には無いからな。第一世界の者は我々の影響を受けない故に魔法というものにも縁遠く、まして空間を越えて別の世界へ渡るなど、考えも及ばないだろう。それゆえ第二・第三世界の存在も知りえない……そうだろう？』
フラットが感心したように言うと、デルヴィスはそれに応え、続いて華奈に話を振る。
華奈は、うぅん、と考え込みながら答えた。
「そりゃまぁ、世界が3つあるとか魔法とか精霊とかよりは、火星人の存在の方が信じられるもんなぁ」
「えぇーそうかなぁ。火星人もかなり信憑性低いと思うよ？」
「ふたりとも、あんまり緊迫感が無いね」
華奈と深冬もそうだが、会話を聞いて穏やかに微笑んでいる環が一番緊迫感が無いように思える。
微かに苦笑して、デルヴィスは説明を再開した。
『本題はここからだ。第二世界の者は“ヴィレイス”という名を聞いたことがあるだろう』
「あぁ……大昔に精霊世界を手中に収めようとして封印された、魔族の名だ」
デルヴィスの言葉を受けて答えたのは、パルスだ。
その名を聞いて、パルス達3人の表情が緊迫したものに変わる。
華奈達は再び飛び出した聞き慣れない単語に首を傾げた。
『魔族は精霊の力を利用する人間と違い、生まれながらにしてその身に魔力を有する者のことを指す。ヴィレイスという魔族は……精霊に匹敵するほど、強大な力を持って生まれてきた。
それゆえ心に闇が巣食い、やがて世界を自分の手中に収めるなどという浅ましい欲望を持つようになる。
実際第三世界は彼に掌握されかけたが、我々精霊と第二世界のひ

とりの人間の力によって、彼は亜空間へ封印されたのだ』
まさか、と、誰かが口の中で呟く。
それが聞こえていたのかどうか。デルヴィスは表情を苦しげなものに変えた。
『そのヴィレイスの部下であった魔族達の手によって、今、ヴィレイスの封印が解かれようとしている』
私が“敵”と呼称したのはその者達のことだ、と、デルヴィスは補足する。
予想が当たってしまったパルス達は、眉を寄せ、厳しい表情を浮かべた。
華奈達もその言葉には流石に動揺を隠せない。
「それって、この世界まずいんじゃ……」
『ヴィレイスはかつて3つの世界全てを掌握しようとした者だ。万が一封印が解かれれば、お前達の世界もただでは済むまい。
それに、部下達は既に復活の前段階として、封印の鍵を握る者を手中に収め、精霊全てを封印することに成功している。
それゆえ第二世界は滅びの危機に瀕し、その影響は第一世界にも必ず現れる』
まじでか、と。華奈達は自分達の世界に迫っているらしい危機に顔を顰める。
だが第二世界人は、別の部分に喰らい付いた。
「封印の鍵を握る者……デルヴィス、まさかそれは……！」
『お前達の探し人と、同一人物だろうな』
彼らの目の色が変わった。
世界の危機を聞かされた時よりも真摯な表情を、彼らは浮かべる。
華奈は先程フラットが、魔力喪失の原因とある人物の行方を追ってきた、と言っていたことを思い出した。
そんな表情が出来るほど、その人物は彼らにとって大切な人なのだろうか。
「ということは、そちらの皆さんの探し人と同じ場所に、わたし達

の友人も捕まっているということですね？」
そういうことになる、と、環の問いにデルヴィスは答える。
華奈達が一番知りたかったことだ。
しかし先程の言葉の中にもうひとつ、聞いておかなければならないことがある。
「精霊全てが封印された、と、貴女は仰いましたよね？　では、デルヴィス、貴女は……？」
問いを口にしたのはカイリ。
そう、精霊全てが封印されたというのなら、デルヴィスがここにいるのはおかしい。
だがデルヴィスは自嘲の笑みを浮かべ、答えた。
『他の５つの精霊達はあらゆる手段を講じられ、完全に封印されている。私も封印の間際にこうして魔力を切り離し、半端な力しか持たぬ分身を生み出すのが精一杯だった。
この分身も……お前達を呼び寄せることで、どうやら殆どの力を使い切ってしまったようだが』
情けないことだ、と、デルヴィスはひとりごちる。
そういえば、彼女の身体は現れた時よりもだいぶ薄くなり、陽炎のような揺らぎも大きくなっているように思えた。
『それゆえだ。それゆえ私は、お前達６人をこの世界へ呼び寄せた。
我々の封印を解き、ヴィレイスの復活を阻止し……３つの世界の滅びを、回避して貰う為に』
真っすぐな視線を全員へ向け、デルヴィスは告げる。
恐らくそれが本題で、デルヴィスが最も伝えたかったことなのだろう。
つまりは“お前達で世界を救え”という意味合いであるその言葉。
パルス達は、多少動揺しながらもそれを受け止める。
元々彼らは自分達の世界が衰退していく原因を排除する為に、この世界へやって来たのだ。それがどんなにスケールの大きい話になろうと、断る理由は無い。

だが、一介の女子高生である自分達には荷が勝ちすぎるお話に、華奈達は、只々目を見開くばかりだった。

１―３　その旅立ち、不安要素満載につき

華奈はこめかみの辺りをぽりぽりと掻く。
困惑した時や照れた時などに行う、彼女の癖だ。
「えーっと……何だかスケールの大きい話になってきたけど、あたし達みたいなちょっと楽器が吹ける程度の一般人に何が出来るって？」
「いや、ハルちゃんはちょっと一般人とは違うような気がするけど……」
動揺しつつもしっかりと突っ込む深冬に、失礼な、と、華奈は返す。
確かに時々オッサン臭かったり絡んできたチンピラ共を素手でぶちのめした挙句昔の漫画のように積み重ねておいたり学校に遅刻しそうになると自転車のまま校内に突っ込んで自転車で階段を駆け上がったりはするが、華奈は立派な一般人……の筈だ。
デルヴィスは微かに笑み、華奈の言葉に答えた。
『先に私はお前達の力も利用してここへ呼び寄せたと言ったな。その言葉が示す通り、お前達は生まれながらにして我々精霊の高い加護の力を得ている存在だ。それこそ我々精霊そのものの力をその身に宿せる程の、な。
我々の加護を受ける者は多々存在するが、お前達ほどの力を得ている者はそうそういるものではないのだ』
「そんなこと言われても……」
『お前達は精霊の力の殆ど影響しない世界にいた故に気付くことは無かっただろうが、お前達の持つ加護の力は、精霊の影響下にあるこの世界にすれば強大なものだ。世界を歩けば、じきに判るだろう』
強大な力などと言われても、華奈達に実感は湧かない。
だが断れるような状況ではないということは、理解できる。
もう既に陽炎そのもののように揺らぎ始めたデルヴィスは……も

うすぐ、消えるのだ。
『お前達には解放された我々精霊そのものをその身に宿し、敵地へ赴いて貰う必要がある。そうしなければ敵の構える場所に施された結界を解くことは出来ず、またその為にはお前達全員の力が絶対に必要だ。お前達に、拒否権は無いよ』
それに仲間も捕らえられていることだしな、と、デルヴィスは付け足す。
そりゃ殆ど脅迫だと華奈は思った。
華奈達が逡巡している様子を見て、パルス達は真っすぐに彼女達を見る。
「俺達は、どうあっても自分達の世界を守らなければならない。そして何より、捕われている者を……俺達の主を、助け出したいんだ」
「ここへ来ることを望んでいた僕達と違って、貴女達は巻き込まれてしまった形になる。でも……貴女達の力が必要なんです。どうか、力を貸してください」
フラットに次いで、カイリが……そしてパルスまでもが、華奈達に向かって頭を下げた。
「頼む……俺達と一緒に来てくれ」
こんな、ただの女子高生に対して頭を下げられるほど、彼らは真剣なのだ。
その想いを邪険に扱うことなど出来る筈もない。
華奈達は顔を見合わせ……苦笑いをしつつ、諦めたかのように息を吐き出した。
「あたし達、本当に一般人だからね。一緒に行っても、足手まといになるだけかも知れないよ？」
華奈の声でパルス達は頭を上げる。
視界に入った華奈達は……笑みを湛えていた。
「俺達が護る。問題ない」

そう言ってパルスは口元に笑みを作り、目の前にいた華奈に手を差し出す。
しゃがみ込んだままであった華奈はパルスの手を取り、立ち上がった。
続いて立ち上がった深冬が、環が、その上に手を重ねる。
更にフラットとカイリが手を重ね……彼らの意志は、繋がった。
『感謝する』
微笑んで、しかし苦しそうな表情で、デルヴィスは言う。
手を離した彼ら全員が、デルヴィスの方へ向き直った。
「僕達で、どこまで出来るのかは判りませんが」
「俺達の世界の人達の期待も背負っちゃってるからね」
「どちらにしろ俺達に断る理由は無いということだ」
「ま、あたし達も、あいつら捕まってるんじゃ仕方ないしねー」
「異世界がどんなところか実は興味もあるし」
「それに何より、面白そうよね」
最後の環の言葉には流石に全員が目を見張る。
これから協力していくうえで何とも頼もしいことだと、パルス達は思った。

デルヴィスは彼らの様子を、酷く優しげな表情で見守る。
精霊達にとっては3つの世界を護る為の最後の希望である彼ら。
殆ど強制的にその大役を買わされ……特に第一世界の者は訳の判らないことだらけだろうに、こうして結託して前向きに進んでいってくれることを心から嬉しく思う。
だが、彼らに与えられた力が強大であるとはいえ、自分達を封印することに成功している彼の者の部下達の力も、かなり強大なものである。
何も出来ずに消えてゆく自分が、歯がゆかった。

『ハルナ』

「ん？」
唐突に名を呼ばれ、華奈は首を傾げる。
『ハルナ、ここへ』
何かと聞こうとも思ったが、華奈はデルヴィスの言葉に素直に従うことにした。
もう殆ど消えかけているデルヴィスの目の前に、華奈は歩み寄る。
『この分身の身はもう消える。封印を解いて貰わねば、私の力を使役する権限をお前に与えることは出来ない』
デルヴィスは華奈の頬を両手で包み、目を伏せて額を合わせた。
触れられている感触は無い。
しかし確かな温かみを、頬から、額から、華奈は感じていた。
『ハルナ……私の加護を受ける者。どうかお前の進む道に、お前達の進む道に、恩寵があらんことを』
その言葉を最後に、デルヴィスの姿はあっさりと掻き消える。
同時に、周囲の真っ黒な空間も溶けるようにして消えていった。
黒い空間が無くなった時。
彼らが立っていたのは、両端が森林に覆われてはいるものの何となく整備された雰囲気のある道の真ん中。
恐らくここはもう第三世界のどこかなのだろう。
結構あっけなく消えてしまったな、と、華奈は思った。

そして、ふと。
重大なことに気付いて冷や汗を掻く。
それを口にしてしまったら恐らく今の良い感じの別れの余韻をぶち壊すことになるだろう。
いやしかし、誰もそれを口にしない今、自分が言わなければ。
「……あのー……」
ギ、ギ、ギ、と、華奈は緊張気味に振り返る。
各々良い雰囲気の余韻に浸ったり今後の決意をしたりしていた他の者達は、それらを振り払って華奈に注目した。

「精霊さん消えちゃったけど……敵さんのいる場所とか、精霊の封印の解き方とか、そもそもどこに封印されてるのかとか、色々と肝心なことを聞いていないような……気が、するんですが……」
華奈の冷や汗が増えると共に、皆の表情もみるみるうちに変わっていく。
全員が「今気付きました」といった感じだ。

「「「「「……あぁ」」」」」

間の抜けたことに、皆の口から同時に吐き出されたのはその言葉だけだった。
さて、これから一体どうしようか。

－＊－＊－＊－＊－＊－

何となくどんよりした雰囲気を纏いながら、華奈達６人は左右が森林に覆われた道を歩いていた。
肝心なことを聞き忘れて途方にくれていたところ、とりあえず移動してみないかとフラットが提案したからだ。
確かに突っ立っていても仕方がない。
見たところ人の手の加わった道であるようだし、辿っていけば街なり何なりに出るかも知れないのだ。
ちなみに進行方向は、深冬が「何となくこっちかな」と言って指差した方である。
深冬は重度の方向音痴だが、勘は良い方だ。
こういった右も左も判らないという状況の時は、勘に頼るしかない。
……尤も、深冬が方向音痴であることを言ったら更に険悪な雰囲

気になりそうなので、華奈と環はそのことを黙っている訳なのだが。
ふぅ、と、華奈は小さくため息を吐き出す。
すると、少し斜め前を歩いていたパルスがそれに反応した。
「何だ」
そっけない言葉ではあったが、今まで約１０分ほど無言で行進しているゆえ何か会話をしようと思っているのかも知れない。
華奈はその言葉に応えてみることにした。
「いや、何か間抜けな状況だなー……と」
「何故俺を見て言う」
雰囲気が重いゆえ何となく不機嫌そうな口調になってしまった華奈の言い方が気に障ったのか、それともこのような状況になったことを気にしているのか。
顔だけ後ろを振り返ったパルスはじろりと華奈をねめつけた。
普通の女の子であれば萎縮するかもしくは泣き出してしまうかも知れないほどの、鋭い視線。
だが華奈は、そのような繊細な精神を持ち合わせた女の子ではなかった。
むしろ華奈の目には、パルスが喧嘩を売っているようにしか見えない。
そして華奈は売られた喧嘩は買う主義だった。
「何睨んでんの。あぁーそっか、こんな間抜けな状況になったのが自分のせいだっていう自覚がある訳だ」
「この状況になった責任はお前達にも同じくらいあるだろう」
“俺達が護る。問題ない”とか大層なこと言ってた割には言うことがちっさいですねぇ」
「何だと貴様。第一……もがっ」
放っておけば延々と続きそうだった口論を遮ったのは、フラットだ。
フラットは「まぁまぁ」などとパルスを宥めすかしつつ、彼の口を背後から手で塞いでいる。

「全く、雰囲気を更に重苦しくしてどうするんだ。大人気ない」
ため息を吐きながら、フラットはパルスの口を塞いでいた手を離した。
パルスは納得のいかないようなご様子だったが、フラットの言うことにも一理あるので口論続行は諦める。
と、フラットの言葉で何か思うところがあったらしい深冬が口を開いた。
「そういえば皆さん、おいくつなんですか？　私達よりは年上に見えますけど」
「それから、その服装も。お揃いのようですけど、向こうの世界では何をなさっていたんですか？」
深冬が問うと、環も続けて質問する。
確かにそれは華奈も気にはなっていた。
特に服装。
彼らは黒を基調にした軍服というか、騎士服というか、何だかそんな感じの服を身に纏っているのだ。
しかもパルスは腰から剣を下げ、フラットは斧が付いた槍のような武器を持っている。
カイリは武器らしいものは何も持っていないようだが……
「あぁ……俺達はユリウス王国という国の騎士団に所属し、これから助けに行く人物の親衛隊をしていたんだ」
へぇ、と関心を示しつつ、華奈は何かまたアヤちゃんが喜びそうな要素だなぁなどと考える。
親衛隊というからには大層なことを言ってくれただけあって、腕に覚えもあるのだろうとも思った。
「年齢は俺が２４、パルスが１９、カイリが１８」
にこりと微笑みながら答えたフラットにつられるようにして笑い、深冬も自分達のことを話す。
「やっぱり年上だったんですね。私とハルちゃんは１７歳だもんね。あ、でも、カイリさんはたまちゃんと同い年かぁ」

最後尾にて、隣を歩いていた環に微笑みかけられたカイリが、微かに顔を赤くして照れたように頭を掻いた。
その反応に「これはもしや」と思った者、約3名。
生暖かい視線に気付いたのか、カイリははっとして焦り気味に口を開いた。
「そっ……そういえば皆さんも揃いの服を着ていますよね！　何をされていた方なんですか？」
「ジョシコウセイとか言っていたか？」
パルスの言葉を受けた華奈は、あぁ、と、自分の服を見下ろした。
それから少し思案気味に答える。
女子高生を知らないということは、学校やら何やらといったものを彼らが知らない可能性が高いからだ。
何しろ別の世界の人間である訳だし。
「何て言ったら良いのかなー　学校っていう集団で色んな勉強をする場所があって、そこに通っている人達のことを“学生”っていうんだけど。
高校というあたし達くらいの年代の人達が通う学校の主に女性のことを“女子高生”という訳よ」
女子高生はみんなこんな感じの服着てるなぁ、と付け足しながら、華奈は己のスカートの裾をつまんでぴらぴらと振ってみせる。
それを見てパルスはぎょっとし、カイリは顔を真っ赤にして酷く慌てた。
もしかしたら彼らの世界にはこんな膝上丈の短いスカートは無いのかも知れない。
尤も華奈はスカートの中に短パンを穿いている為、中を見られても全く問題ないが。
「じゃあ華奈達は、何かになる為に勉強をしている最中なんだ？」
何故かひとり平然としているフラットが問う。
華奈は手を頭の後ろで組んで、うぅんと唸った。
「まあ、そんなもんかなぁ。ただ漠然と勉強してるっていう奴の方

が多いだろうけどね」
「何かの為にではなくただ勉強するのか？　随分と無駄なことをするんだな」
手厳しいパルスに、華奈は苦笑しながら「まぁね」と返す。
同じように苦笑しながら、深冬は環の方を見た。
「でもたまちゃんは凄いよね。医者になる為に一生懸命勉強してるもん」
「へぇ、医者！　それは凄いですね」
カイリが酷く感心した様子で言う。
どうやら彼らの世界にも医者はいるようである。
畏敬の眼差しを受けた環はふわりと微笑んだ。
「そうかな？　わたしは貴方達の方が凄いと思うけど」
その意見には華奈も賛成だった。
いや環のことも、かなり凄い人だと思ってはいるのだが。
「そうだよなぁ。騎士とか親衛隊とかって、何かこう、凄く強そうな感じがするし」
自分のような、チンピラ相手に勝てる程度のものとは訳が違うのだろうなと華奈は思う。
そしてふと、デルヴィスが言っていたことを思い出した。
「そういえば精霊さんが“強大な力”とか何とか言ってたけど、別に全然力が付いた感じがしないよね。もっとこ　う、何か目に見えるようなモンだと思ってたんだけどなぁ」
華奈は拳を作り、その辺の木にパンチを一発お見舞いしてみる。
それはもう、てりゃぁ、という感じの軽いノリで。
だが、華奈がパンチをお見舞いした木は鋭い音を立て。
バキッ、ドン、バキバキ、メキメキ、バキバキバキ……
……ズシーン
……折れた。

しかも勢い良く倒れた衝撃で背後にあった可哀想な木々を何本か巻き込んで。

あまりにも衝撃的な出来事に、それを見ていた者達どころか当事者の華奈までもが、あんぐりと口を開けたまま固まる。

やがて驚いて飛び立った鳥さん達のぎゃあぎゃあというざわめきが収まる頃、ぽつりと、深冬が言った。

「ハルちゃん、私、森林破壊はいけないと思うよ」

いやそういう問題ではない。

何人かが心の中で突っ込んだが、それを言葉として出せる者はいなかった。

１―４　もうひとつの邂逅

何だここは。
異世界か。

目の前に広がる光景を見て、弥鷹は唖然としたまま固まっていた。
弥鷹の部屋（６畳）の１０倍以上はありそうな広い空間の床一面に敷き詰められた、ふわふわの白い絨毯。
空間の端の方に設置された、３人は寝れそうな天蓋付きのベッド。
天井２箇所からぶら下がっているシャンデリアのようなもの。
その他、高価そうな調度品類。
何というか、王侯貴族か何かの部屋という雰囲気を醸し出し過ぎている空間。
王侯貴族の部屋というのがどのようなものか実際のところ弥鷹には判らないのだが。
というか王侯貴族という単語すらよく意味も判らずにノリで使っているのだが。
変な光に囲まれて気絶して目が覚めたらこんなところにいたのだから、弥鷹の反応も無理のない話だ。
ちなみに未だ目覚めていない彩瀬以外の者、つまり茅斗と愛花も、弥鷹と同じような反応をしている。
愛花に至っては、自らに言い聞かせるかのように何事かをぶつぶつと呟いていた。
「夢、夢、これは夢。夢意外にあり得ない」
そう、これは夢。
言い聞かせる為に、弥鷹は茅斗の頬を思い切り抓ってみた。
「いっ……！　いひゃ、いひゃいって、みはも（三鴨）！！」
「愛花ぁ、茅斗先輩は痛いって言ってるぞー」
「寝言抜かさないでください茅斗先輩！！　痛い筈ありません！！

……じゃあ、これは幻覚。唯我独尊のラーメンに何か変な薬が混入していて、私達は集団で幻覚を見ているんです」
幻覚……にしては、この足元から伝わる何とも気持ち良いふさふさ感に現実感があり過ぎる。
ついでに茅斗の頬の痛みにも現実感があり過ぎる。

「夢でも幻でもありませんよ。全ては現実です」

ついに弥鷹が頭を抱え込むと、ふいに、近くから澄んだ声が聞こえた。
弥鷹達は声の聞こえた方へ視線を向ける。
声の主は、未だ絨毯の上に横たわったままの彩瀬の隣にしゃがみ込んだ、美しすぎる人物だった。
年の頃は弥鷹達と同じくらいか、少し上だろうか。
肩の辺りまで伸ばされたプラチナブロンドの髪はその者が顔を傾ける度にさらさらと流れ、時折瞬かれる瞳は透き通った湖面のように静かな青を湛えている。
顔の造形も弥鷹達が見たこともないほどに美しく……大袈裟ではなく、この世のものとは思えないほどだ。
そういえば、と、弥鷹は思い返す。
目覚めて初めて目にしたのはこの人物の顔だった。
まずその人物の美しさに驚きつつも、周囲の状況に更に驚いた為にそっちのけにしてしまっていたが。
この人物は弥鷹達をひとりひとり揺り起こしてくれていたのだ。

多少は冷えてきた頭で、弥鷹は考える。
この性別不明の人物は、この部屋の持ち主だろうか。
茅斗先輩が本気で痛そうにしているからこれは夢ではないとして、一体自分達に何が起こったのだろう。
ここにいるのは、自分と茅斗先輩と愛花と彩瀬の４人だけか。

華奈は……深冬は、環先輩は、一体どこにいるのだ。
それから。
かなり豪華だが、この部屋にはおかしなところが幾つかある。
どこかへ繋がっているらしい扉は2つほどあるが、窓がひとつも見当たらない。
それに壁が3面しか無く、1面は壁ではなく鉄格子のような黒い柵で出来ているのだ。

美しすぎるその性別不明の人物は、最後に彩瀬を揺り起こした。
「さあ、起きてください」
「ん……？」
彩瀬は少し身じろぎをすると、ゆっくりと目を開いていく。
「ふぇ？　え、えええぇぇぇぇぇぇぇ！？」
目を開ききった時に視界に入ったその人物を見て、彩瀬は勢いよく身体を起こして座り込んだまま猛スピードで後ずさった。
後ずさりの直線上にいた茅斗に思い切りぶつかり、彩瀬はようやく止まる。
「えぇ、何これ？　王子……？」
顔を真っ赤にして口をぱくぱくさせながら彩瀬が言うと、彩瀬曰く“王子”は、それはもう美しい顔でにっこりと微笑んだ。
「よく判りましたね」
何だこいつ頭おかしいのか、と、弥鷹は一瞬考える。
だが“王子”という単語に反応したからには、どうやら性別は男らしい。
その証拠に、彩瀬の顔の赤みが驚きや焦りなどからくるものとは別なものに摩り替わっていく。
弥鷹達は、何となく漂ってきた嫌な予感に顔を引きつらせた。
彩瀬が美形に弱いということはここにいる王子（仮）以外の誰もが知っていることだ。
しかしまさかこんな状況で……

彩瀬はゆっくりと振り向き、一番近くにいた茅斗の、先程弥鷹が抓ったのとは逆側の頬を力の限り抓り上げる。
あまりの痛さに涙目で悲鳴を上げる茅斗にはお構いなしに彩瀬は気が済むまで頬を引っ張り続け、やがて放した。
その頃の彼女の顔には、唯我独尊で東高のファゴットの人の話をしていた時とは比べ物にならないほどの、うっとりとした表情が浮かんでいる。
「夢じゃない……」
うっとりとした表情のまま、彩瀬が呟く。
痛みのあまり文句も言えずに頬を押さえてうずくまっている茅斗を哀れに思いつつ、弥鷹と愛花は「こりゃあもう駄目だな」と思った。
さて、自分の世界に入ってしまった彩瀬は放っておくとして。
半眼でため息を吐き出しながら、弥鷹はぽりぽりと後頭部を掻く。
「えーと……あんたさっき状況が判ってる風な言い方してたけど、この状況について何か知ってるなら教えてくれるか？」
弥鷹が言うと王子は頷いた。
「まずここは、貴方達が暮らしていた世界とは別の世界です。私が暮らしていた世界とも、別の世界ですが」
「え、何、いきなりそんな話なんですか」
未だ動揺しながらも、突っ込み気質な愛花はしっかりと口を挟む。
王子は穏やかな中にも真剣さを含んだ表情を作った。
「恐らく信じ難い話ばかりが、私の口から紡がれるでしょう。しかし、これから私が言うことは、全てを鵜呑みにして頂かなければなりません」
亜空間という深淵の空間を挟んで3つの世界は隣接し、互いに影響を及ぼし合っている。
弥鷹達は第一世界の住人、王子は第二世界の住人。
そして現在自分達がいるのは、第三世界と呼ばれる“精霊”とい

うものの住まう場所。
大昔に3つの世界を掌握しようとして封印された“魔族”ヴィレイスの部下であった者が彼の復活を企んでおり、その為に封印解除の呪文を唯一知り得る自分は不覚にも攫われてこの場所に監禁され、世界が生きていくうえで絶対に必要な存在である精霊も、全てが封印されてしまった。
ゆえに3つの世界は滅びの危機に瀕している。
滅びを回避する為に精霊は最後に残された力を使って、第一・第二の2つの世界から何人かの人間をこの世界へ呼び寄せた。
その時に呼び寄せられた者達の近くにいた弥鷹達は一緒にこの世界へ来てしまったが、精霊の結界の中には入れずにヴィレイスの部下の居城付近へ落ちてしまう。
このような状況で空間越えをした弥鷹達は不振に思われ、ヴィレイスの部下達に捕まって自分と共にこの場所へ放り込まれてしまった。

王子が語ったのは、そんな内容だった。
信じられる訳がない、というのが正直なところだ。
しかし現在の状況を見ると王子の話と一致しているし、何より王子が嘘を言っているようには思えない。
それだけ真剣に、彼は語っていたのだ。
類は友を呼ぶといったところか。
華奈達と同様かなり柔軟な思考を持ち合わせていた弥鷹達は、とりあえず、彼の言葉を信じてみることにした。
信じるしかないような状況でもある訳であるし。
「でもどうしてこんな普通の高校生を、その……精霊は呼び寄せたりしたんだ？」
「貴方達は精霊の力の影響しにくい世界で生きていた為に、恐らく気付かなかったのでしょうね。精霊に呼び寄せられた方々は、精霊の加護をかなり高いレベルで受け入れ得る器であったということで

す。
　そして精霊に施された封印を解く為には、そういう器の方々が必要でした。恐らく精霊の生み出す力の消失した原因か私の行方を追って、私の世界の者達がこの世界へ渡る為の儀式を執り行い……第一世界で儀式が行われた場所と対となり得る場所付近にいたのが、貴方達の仲間の方々だったのでしょう」
　精霊は儀式の力や加護を受ける者の力も利用して空間越えを行った為、位置的に対応する場所にいた貴方達の仲　間が選ばれたのでしょうね、と、王子は付け足す。
　一般人には荷が重過ぎる役目を課せられた華奈達を想い、弥鷹達は俯いて顔を顰めた。
「華奈先輩達、大丈夫でしょうか……」
　ぽつりと、愛花が呟く。
　王子は彼女に、柔らかく微笑みかけた。
「第二世界から呼び寄せられ貴方達の仲間と共にいるのは、私の友人であり親衛隊でもある者達です。彼らの腕は確かですから、きっと何があっても護ってくれますよ」
“親衛隊”と聞いて弥鷹達はぎょっとする。
　そんなものが付いているからにはかなり重要か地位の高い人物であろうと思ったからだ。
　まぁ、世界を滅ぼしかねない魔族とやらの封印を解除する呪文を知っているという辺りからして、重要な人物であるということは間違いなさそうだが。
「あの、あなたは、あなたの世界ではどんな人だったんですか？」
　瞳を輝かせ興味津々といった風に、彩瀬が質問する。
　あぁ、と短く言ってから、王子は答えた。
「そういえば、自己紹介がまだでしたね。私は全ての精霊の加護を受け、第二世界の魔力の循環を管理する者。そしてユリウス王国の第一王位継承者でもある、シャスタ＝ユリウスと申します」

あんぐりとアホのような大口を開け、弥鷹達は驚愕する。
彩瀬が“王子”と称した目の前のお方は……本当に王子だった。
驚愕から覚醒すると、彩瀬の表情が殊更うっとりしたものへと変わっていく。
あぁお前は王子とかそういうフレーズに弱いんだろうよ、と、弥鷹は心の中で突っ込んでみた。
ついでにこいつが一番根性ず太いかも知れないとも思う。
全く、華奈達もそうだが自分達もいわば敵に捕まるなどという洒落にならない状態だというのに。
しかし彩瀬のお陰で幾分か穏やかな気持ちでいられる、というのは事実だ。
それは茅斗も愛花も同じようで、彩瀬を見て穏やかさを含む苦笑を浮かべている。
とりあえず自分達の名も名乗ってから、弥鷹が質問を続けた。
「ところでここは、その、何たらの部下の居城のどこら辺なんだ？」
「この場所は、奴らの居城の地下牢にあたります」
「「「地下牢！？」」」
シャスタの返した答えに、弥鷹、茅斗、愛花の声が重なった。
彩瀬は瞳を輝かせたまま「きっと攫った人達は王子に相応しい牢屋を作らなきゃという使命感に駆られたんだね」などと戯言を抜かしたが、それは華麗に無視される。
「私は居城と聞いててっきり城の中の一室だと思ってましたよ」
「俺もだよ……でも、どうして牢屋をこんな風にしたんだろう」
愛花と茅斗が冷や汗を掻きながらそう言うと、シャスタは苦笑しながら答えた。
「恐らく奴らは私に死なれると困るでしょうから。私が生きやすいように、私が王城で使用していた部屋に近い環境を作ったのでしょうね」
そんなことをしなくても、私が私の世界の民達を差し置いて死ぬ

ことなどあり得ないというのに。と、シャスタは続ける。

その時。

何かの気配を感じたのか、シャスタは鉄格子になっている壁の方に鋭い視線を向けた。

美貌のせいもあってか、結構な迫力だ。

弥鷹達も驚いてシャスタの視線の先を見る。

と、鉄格子を隔てて隣に沿うように作られている通路の奥の方から、2人分の足音が近付いてきた。

緊張した面持ちで通路の様子を伺っていると、やがて、足音の主は皆の見える位置へと姿を現す。

ひとりは、ゆるやかに波打つガーネット色の長い髪と艶やかな身体のラインを誇る女。

もうひとりは、褐色の肌に長めの黒髪、オータムリーフ色の瞳を持つ男だった。

2人ともかなりの美形であるという共通点がある。

それからもうひとつ。耳が長細く尖っているというのも2人の共通点であった。

「あら、もう目が覚めてるのね」

髪と同じガーネットの瞳を牢屋の中へと向けた女が言う。

シャスタは女に鋭い視線を叩き付けた。

彼がこのような態度を取るのだから恐らくこいつらが例の何たらの部下というやつなのだろうと、弥鷹達は思う。

「何をしに来たんですか」

「別に、こんな状況で空間越えをしたっていうそこの奴らの顔を見に来ただけよ。そんな怖い顔をしたら折角の綺麗な顔が台無しよ？」

余裕の笑みを口の端に浮かべながら、女は肩をすくめてみせる。

表情はそのままに、女は豊満な胸の下で腕を組んだ。

「じゃあ、折角だしあんた達に質問でもしようかしら。あんた達、どうやって、何が目的でここへ来たの？　あんた達の他にも何人か

ここへ来たようだけど……そいつらは、一体何処で何をしているのかしら？」
「さあ、知らねーな」
「俺達も気付いたらこんな場所へ放り込まれていたので。訳が判っていないんですよ」
女の言葉に、弥鷹と茅斗が即答した。
しかも、敵だという認識がある所為か女の高圧的な表情と口調が気に入らない所為か、彼女達を睨み付けつつの言葉だ。
なかなか根性が据わっているようで頼もしいと、シャスタは密かにそう思う。
女は2人の態度が気に障ったようで、眉根を寄せた。
「随分と横柄な態度ね。自分達の立場、判ってる？」
女の表情に、残虐な色が滲み出る。
それは弥鷹達の背筋を少々冷やしたが、彼らは怯まなかった。
「もとよりあなたの質問に答える義務なんて私達には無いんですよ、オバサン」
「んなっ！？　オバ……！？」
「えぇー、自覚が無いのかな。だって、大昔の人の部下っていうことはかなり長生きしてるんでしょ？　それに外見からしてあたし達から見れば充分オバサンだよねぇ」
愛花の言葉に過敏に反応する女に、彩瀬が追撃する。
確かに外見は２０代後半に見える女は、１０代である愛花や彩瀬からすればオバサンなのかも知れない。
魔族である彼女が外見は若くとも何百年も生きているというのも事実ではあるし。
だがそれでも女性として“オバサン”というのはかなり癇に障る言葉なのであろう。
女は先程までの余裕はどこへやら、顔を真っ赤にして鉄格子に手を掛け、「きいぃーーー！」などという奇声を上げている。
敵の神経を逆撫でしてどうするとも思ったが、弥鷹は愛花と彩瀬

に拍手を送ってやりたくなった。
「こんの小娘が！　覚悟しなさ……」
激昂した女の言葉が途中で遮られる。
女を諌めたのは、女と共にここへ来た長めの黒髪の男だった。
「この程度で心を乱すな、ライラ。見苦しいぞ」
低めの淡々とした声で、男は言う。
ライラと呼ばれた女は納得がいかず舌打ちするが、目を閉じて何とか怒りを押し込んだ。
「……ふん、まあ良いわ。あんた達の仲間が何をしていようと、私達の邪魔になるようであれば消すだけよ」
吐き捨てるようにして言い、ライラは牢屋の前から去ろうとする。
それを、シャスタが止めた。
「待ってください」
「何よ」
忌々しそうに、ライラは言う。
シャスタは臆することなく要求を口にした。
「この人達にも私と同じように衣食の保障をしてください。保障が出来ないようであれば、私は自ら命を絶ちます」
物騒なことを言うシャスタの方を、弥鷹達は見る。
シャスタは弥鷹達の方は見ずに、ライラに鋭い視線を叩き付け続けた。
それは囚われの身としては、かなり図々しい要求であろう。
だが己の主の復活の鍵である彼は、ライラ達にとっては無くてはならない人物。
……主が復活を遂げる、その時までは。
ライラはその要求を、受け入れるしかなかった。
「……ったく、仕方ないわね。きちんと計らってやるわよ」
舌打ちをして、ライラは去っていく。
彼女の姿が見えなくなると、シャスタは小さく息を吐き出した。
「おい、シャスタ！　あんまり無茶なこと言うなよ」

未だ黒髪の男の方が牢屋の前に残っているゆえ、控えめな声音で、弥鷹が言う。
気遣いを嬉しく思い、シャスタは柔らかく微笑んだ。
「大丈夫ですよ。先程も言いましたが彼らは私に死なれると困るので、私が封印解除の呪文を唱えるその時までは、私が死に結び付くようなことはしません。そうでしょう、ユーグベル？」
最後には視線を鋭くして、シャスタは鉄格子の前に立つ男に言葉を投げ掛ける。
男はふん、と鼻を鳴らし、通路の先へ進んだ。
「不本意ながら貴様の言う事を聞いてやるのもその為だが、それもヴィレイス様復活の魔法陣が完成するまでだ。あまり調子に乗るなよ」
シャスタがユーグベルと呼称した男は、牢屋前の通路、鉄格子扉になっている辺りに設置されていた椅子にどっかりと座り、隣にある小さめの机の上に足を投げ出す。
それから腰に携えていた剣を抜き、手入れなんぞをし始めてしまった。
どうやら彼はここから立ち去る気はないらしい。
弥鷹達はシャスタの周りに集まり、ユーグベルの存在を気にしながら話し始めた。
「なあ、あいつは戻らないのか？」
「ええ。あの男は見張りですから」
うぇ、と、愛花が顔を顰める。
「ということは、四六時中あの人に見張られながらここで生活しなきゃならないんですか」
「そういうことですね。貴方達も奴らに正体がはっきりするまではここから出られないでしょうし。でも着るものや食べるものの保障はすると先程ライラが言っていたので、大丈夫ですよ」
「シャスタ様と生活を共に……」
夢見る乙女の顔をしている彩瀬に、同じ捕らわれの身ですし様付

けなど不要ですよ、などと、シャスタは言う。
ハートが舞い散りそうな勢いの顔で返事をしている彩瀬を、弥鷹はうんざりしたような表情で見た。
そして気持ち的に余裕が出てきた所為なのか。彩瀬の手に未だコショウの瓶が握り締められていることに気付く。
コショウまで一緒に異世界へ来てしまったのかと思うと、何だか可笑しかった。
と、やはり精神的余裕が出てきたのか、ひっそりとユーグベルの様子を伺っていた茅斗がかなり控えめな声音で言う。
「見張りってあいつひとりだけなんだよな？　何とかして脱出とか出来ないかな」
「茅斗先輩にしては随分前向きな発言ですね」
やはりかなり控えめな声音だが、愛花がずばっと切り込む。
茅斗は結構なショックを受けつつも、どうだろう、と皆に視線で語り掛けた。
「なぁ彩瀬、お前美形好きだろ？　ちょっと色目使ってあいつの気を……」
「えぇっ！？　嫌だよ！　今のあたしには心に決めた人がいるんだから！」
「惚れっぽいくせに何を言ってるんですか。ちょっと色目使うくらい我慢してくださいよ。それであの人が油断してる隙に弥鷹先輩が全力で後頭部を殴れば何とかなるかも知れ……」
「無理、でしょうね」
少しノッてきた弥鷹達の相談を、シャスタは静かに切り捨てる。
「あの男はヴィレイスの部下の中でも精鋭にあたります。先程の女もそうですが……実力行使をしようとしても、返り討ちに逢うのがおちでしょう」
シャスタがそう言うと、ユーグベルは弥鷹達の相談が聞こえていたのか牢屋の中へと視線を向けた。
「脱走などという馬鹿なことは考えないことだな。大人しくさえし

ていれば俺はお前達に何もしない。黙って捕まっているのが懸命だと思うが」
口の端に笑みを作りながらそう言うユーグベル。
その余裕の態度に、弥鷹達は完全に脱走を諦めざるを得なくなった。
勝てないと思わせられるような雰囲気を、彼は纏っている。
弥鷹達はがっくりと肩を落とし、ため息を吐き出した。
すると、ユーグベルが牢屋の中の一点で視線を止める。
彼の視界に映るのは、茅斗の姿。
ユーグベルはすうっと目を細め、茅斗を指差した。
「おい、そこのお前、こちらへ来てみろ」
「え……俺？」
己を指差しつつ、何故自分が呼ばれるのか全く判らない茅斗は眉を寄せ、首を傾げる。
脱走の話を最初に持ち掛けたのが原因だろうか。
だがユーグベルに別段怒っているような様子は見受けられないし……
とりあえず行ってみようか、と、茅斗はゆっくりと立ち上がった。
「危害を加えられるようなことは恐らく無いと思いますが……気を付けてください」
シャスタの言葉に茅斗は頷き、警戒しながらもユーグベルの元へ近付いていく。
椅子に座って机の上に足を投げ出した格好のままでユーグベルは鉄格子の間から腕を伸ばすと、茅斗の顎の下に指を添えて茅斗の顔を動かし、様々な角度から彼の顔をまじまじと見た。
「な、何だよ一体……」
不振がり、茅斗は眉を寄せる。
と、突然、茅斗は顎を掴まれ、ユーグベルの方へ引き寄せられた。
弥鷹達は驚き、すぐに動き出せるよう身構える。
鼻先が触れそうなほどの距離で、ユーグベルは茅斗に言った。

「やはりな……お前は随分と、俺の好みの顔をしている」

……

……

……

「……はい？」

ユーグベルの言葉に茅斗が反応するまで、たっぷり１０秒以上の間が空いた。

彼が一体何を仰ったのか、脳みそが理解出来なかったのだ。

ユーグベルはクックッと面白そうに笑い、茅斗の耳元で囁く。

「俺のことは“ユーグ”と、そう呼ぶと良い」

耳の中に息を吹き込まれるように、しかも甘さを含んだ声で言われ、茅斗は総毛立って全力で後ずさった。

途中、すぐ動けるよう身構えたまま固まっている弥鷹達を追い越し、茅斗は壁に激突する。

ユーグベルは普通女性であれば陥落してしまいそうなほどの甘い微笑みを、その美しい顔に浮かべた。

「随分と可愛い反応をするんだな」

茅斗は総毛立つばかりでなく、だらだらと嫌な汗を大量に噴出させる。

弥鷹、彩瀬、愛花は、あんぐりと口を開けて青ざめたまま、顔を見合わせた。

「えっと……あの人、ホモ？」

「彩瀬先輩、せめてオブラートに包んで同性愛者と」

「いやどっちでも同じだろ。てか、何つーか、茅斗先輩……」

……哀れな。

弥鷹達は心の中で合掌する。
シャスタは何だか冷静な顔で「魔族というのは性別というものの認識が薄いと言いますからね」などと解説しているが、それに突っ込めるほど気力の残っている者はいなかった。

あぁ、青桐、小森、蓮野。
頼むから早く助けに来てくれ……

異世界にて敵に捕らわれるという洒落にならない状況なうえに貞操の危機という更に洒落にならない状況に追い込まれ、茅斗は壁に貼り付いたまま静かに涙した。

１―５　旅芸人路線について真剣に考える会

「ジョシコウセイって凄いんだね。うちの騎士団に勧誘したいくらいだよ」
「何だお前、こんな力を持っているなら……」
「いや違う。断じて違う。確かにあたしは人ひとりちょっと殴り倒すことくらいは出来るけど、いくら何でもこんな巨木は無理」
驚きから一変して感心を示し始めたフラットとパルスだが、華奈は首をぶんぶんと横に振りながら力一杯否定する。
何せ目の前の光景に一番驚いているのは華奈自身だ。
自分にこのような……パンチ一発で巨木を計７本も薙ぎ倒せるような力など、ある筈が無いのだから。
混乱した華奈は唸りながら頭を抱え込む。
すると、ぽつりと、環が呟いた。
「もしかして、これが精霊さんの言っていた“強大な力”というものじゃない？」
あぁ、と、全員が納得したような表情を浮かべる。
確かにそうとしか考えられない状況だなと、華奈は思った。
「はるちゃん、深冬ちゃん、心を静かにして目を閉じてみて。何か感じない？」
環に言われるまま、華奈と深冬はゆっくりと目を閉じてみる。
と、確かに自分の内側に何かを感じた。
いや、感じるというよりは……
“判る”のだ。
自分の内側に存在する力が、判る。
まるで初めからその力を持っていたかのように、どのような力なのか、どの程度の力なのか、どのようにして行使するのか、はっきりと判るのだ。
自分の世界にいた時には想像もつかなかった、人間離れした強大

な力。
それが今自分の内側にあり、そのうえその力を自分のものとして抵抗なく受け入れている。
何とも不思議な感覚だった。
「確かに、自分の世界にいた時よりは幾分か身体が動くようだな」
「凄い力ですね、精霊の加護というのは」
パルスが、カイリが呟いたのが聞こえたので、華奈は目蓋を持ち上げる。
どうやら彼らも環に言われたようにして、自分の内側にある力を感じ取っていたようだ。
しかし幾分かということは、普段からあのような……先程華奈が巨木を計7本も薙ぎ倒したような力を、彼らは揮っていたということなのだろうか。
彼らの世界は精霊の影響を受ける世界だと、デルヴィスが言っていた。
それゆえ精霊の加護の力が普段から現れていたのかもしれない。
精霊の影響を受けない世界にいた華奈は、普段からこのような力を揮えるというのも面白いかも知れないと思った。
が、すぐさまそんなことは無いかと思い直す。
このような力を持った人間が自分達の世界にいたら、多分、恐れられるか嫌厭されるのがオチだ。
全ての人間がそうするとは限らないが、受け入れてくれる者は多くはないだろう。
まあ、そのくらい強大な力を、今の華奈達は持っている訳だ。
（てか、そんなことより、こんなのにいち早く気付けるタマちゃんが凄ぇ）
畏敬の眼差しを、華奈は環に向ける。
常々只者でないと思ってはいたのだが、このような状況に陥りつつも冷静さを失わない環は本当に凄いと思うのだ。
ついでにどれだけ順応性高いんだよ、とも思う。

まあ、それは華奈も深冬も人のことは言えないのだが。
「何ていうか、これなら何かあっても少しは役に立てるかも知れないね」
華奈の隣にいた深冬が、微笑み掛けてくる。
確かにそうだな、と、華奈はその言葉に頷いた。

その時。
華奈達が歩いてきた方向から何かの気配を感じ、全員がそちらへと視線を向ける。
別段悪い気配ではない。
そう、それは、人の気配だった。
道の先から、2人組の人間が歩いてくる。
ぱんぱんに膨らんだかなり大きめな布製のリュックを背負って歩いてくるその者達は旅人か、それとも商人だろうか。
とにかく第3世界へ来て初の人間との遭遇に、華奈達は少なからず胸を躍らせる。
その者達……中年の男2人は道端に屯している若者達（しかも近くの巨木が何本も薙ぎ倒されている）を見てぎょっとしたようだが、すぐさま笑顔を作ってすれ違い様に会釈と挨拶をしてくれた。
気の良い人達だったことに安心しつつ、華奈達も同様に会釈と挨拶を返す。
が、ふと、華奈は思い立ち、男2人を呼び止めた。
「あの！　ちょっとお尋ねしたいんですが！」
華奈達の隣を通り過ぎようとしていた男達は足を止め、振り返る。
「何だい？」
「えぇと、この先に街とかそういうのはあるんでしょうかね？」
「？　ああ、少し先に結構大きな街があるよ」
「おぉ、それは良かった。どうもありがとうございますね」
快く答えてくれた男達に、華奈は軽く頭を下げて礼をした。
そう、華奈達は、精霊の封印場所や方法などを探る為にとりあえ

ず歩いていたのだ。
その為に、そして入用であれば旅の準備などをする為にも、まずは人のいる場所に行かなければならない。
何となく進んでいたがきちんと街に近付いているということに、華奈達は安堵した。
「俺達はそこに商売をしに行く途中なんだよ」
「それにしてもお嬢さん達、あれかい？　旅芸人か何かかい？　随分とけったいな格好をしているようだが」
けったいな格好、と言った男の視線は、主に華奈、深冬、環に注がれている。
学生の制服が珍しい……というか、この世界には無いのかも知れない。
パルス達も見たことが無いようであったし。
「まあ、そんなところです」
男達の言葉には、フラットが答えた。
異世界から来ました、などと言っても不審がられるだけであろうし、まあ妥当な答えだろう。
「やっぱりそうかい。どんな芸をやってるんだい？」
興味を持ったらしい男がそう聞いてくるが、フラットは流石に返答に困った。
突っ込んで質問されることまでは想定していなかったのだ。
すると少々慌てながらも深冬が言った。
「う、歌とか、合奏とか、踊りとか……あっ、く、組み手なんかも披露させて頂いてますっ」
咄嗟に出た内容にしては旅芸人っぽいなと、華奈達は思う。
男達も何だか納得したようだった。
「それは面白そうだなぁ。この先の街でも商売するのかい？」
「は、はい、まぁ……」
「へぇ、それは楽しみだ！　俺達もしばらく街に滞在するつもりだから、是非見てみたいもんだね」

「じゃあ、俺達は先を急ぐからもう行くよ」
「あ、はい！　本当に、ありがとうございました～」
軽く頭を下げて道を先に進んでいく男達に、深冬がぺこりと頭を下げる。
男達の姿はやがて道の先へと消えていった。
しばしの沈黙の後。
男達の姿が完全に見えなくなった頃、常に微笑みを湛えている環以外の者は、深い安堵の息を吐き出した。
「や、やってみろとか言われなくて良かったね……」
冷や汗を流しながら、深冬が言う。
全くだと、一同は思った。
何せ不審がられない為のはったりゆえ、やれと言われて出来るものではない。
しかし。
「でも、もしかすると本当にそういうことをしなければならなくなるかも知れないね」
いつもの微笑みを湛えたまま、環が言う。
何故、と、一同が首を傾げると、環は更に柔らかく微笑み、のたまった。
「だって、この先最低でも食費は必要になってくるよね？　でもわたし達、精霊さんからお金らしきものは何も受け取っていないよね？」
全員が、全く同じ動作で。
左の手のひらに右拳を乗せて「あぁ」と呟く。
この世界へ放り出されてからこのパターンは、既に二度目だ。
ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー

「全く、世界を救って欲しいなら旅費くらい経費で落としてくれるのが当然だと思わんかね」
「ハルちゃん、また口調がおっさんくさくなってるよ」
「しかしお前の言うことも一理あるな」
「おっ、気が合いますね旦那」
「誰が旦那だ」
「俺達も流石に金銭的な面までは気が回らなかったからなぁ」
「この世界へ渡るだけで精一杯でしたからね」
「でもそもそも、精霊さんにはお金という概念が存在しないのかも知れないよね」
ずばりと核心を突いたのは環。
はぁ～、と、（環以外の）全員がため息を吐き出した。
ぐちぐちと愚痴りながら歩き続けること十数分。
大問題を抱えたまま、一行は確実に街へと近付いている。
換金所くらいはあるだろうから何か換金してもらうしかない、というフラットの言葉を受けて華奈達はごそごそとポケットの中を漁ってみたが、財布とハンカチくらいしか入っていなかった。
しかも学生である華奈達の財布の中には小銭しか入っていない。
唯我独尊でラーメンを食べてしまった後であるし。
パルス達も、自分達の世界の貨幣を幾らかしか持っていなかった。
「騎士なんて言っても貧乏なもんなんだなー」などと華奈が突っ込んだゆえに再びパルスとの口論が始まりそうになったのは置いておくとして。
ともかく、お金を換金して貰うというのも変な話だが、異世界の貨幣などこの世界で通用するとも思えないし、素材として換金して貰えることを期待して、一行は街へと向かっている訳だ。
換金所があるのかどうかも、まだ判らないのだが。
「何ていうか、本当に何か芸でも披露すること考えておいた方が良

いかもね」
ため息交じりに、華奈が言う。
「組み手……なら、俺達で出来る、かな」
「お前達は何か出来ないのか」
「吹奏楽部だから演奏は出来るけど……肝心の楽器が無いもんね」
「それにあっても低音に偏った金管楽器ばっかりじゃあぱっとしないもんなぁ」
皆そろそろ旅芸人路線を本気で考え出したのか、華奈の振った話題に乗ってきた。
表情も割と真剣だ。
ちなみに彼女達は吹奏楽部で、華奈がユーフォニアム、環がチューバという低音の金管楽器、深冬がトランペットという高音の金管楽器を担当していた。
華やかに演奏したいのなら、やはり木管楽器が必要なのだろう。
クラリネットのアヤちゃんやサックスの茅斗先輩がいればなぁ、と、華奈はひとりごちた。
「歌はどう？」
「深冬とタマちゃんは上手いけど、あたしはイマイチだしな……」
「そうかなぁ？　じゃあ、ハルちゃんは踊るとか」
第一世界女性陣が相談をしている後ろで、カイリが「た、タマキさんは歌がお上手なんですか」などとちょっと感動しているがそれは無視される。

と、その時。
周囲の木々の密集率が低くなってきたな、と、皆が感じ始めた頃。
目の前に、新しい光景が広がった。
まだ遠いのでぼんやりと、薄青くしか見えないが。
地平線の先に見えるそれは、彼女達がこの世界へ来て初めて目にする、街であった。
しかも、商人らしき男達が言っていた通り、結構……いや、かな

り大きそうな街だ。
「うわぁ……」
一瞬文無しという危機的状況も忘れ、華奈達は感動を露にする。
ついでにかなりの勢いで好奇心が膨らみ始め、街へと向かう歩調も自然速まった。

－＊－＊－＊－＊－＊－＊－

街へと近付くにつれて徐々に膨らんできた感動。
街の中へ入り、大通りの中央からその街並を見た瞬間、それは頂点に達していた。
華奈は大通りの中央に立ち尽くしたまま口をあんぐりと開け、呆然と周囲を見渡す。
愛花や茅斗が遊んでいるのを横で見ていたＲＰＧゲームに出てくるような街並と、写真などでしか見たことが無いヨーロッパ地方の中世の雰囲気を残した街並が融合したかのようなその光景は……何と言い表せば良いのか、ともかく圧倒されざるを得なかった。
このような美しい街並を、華奈は見たことがない。
そのうえ大通りは様々な店や出し物、人々で華やかに賑わっているのだから、感動もひとしおだ。
感動しているのは華奈だけではない。
同じくこのような光景を目にしたことの無い深冬と環も、自分達の世界とどこか似た雰囲気の街並ながらもその賑わいように圧倒されているパルス、フラット、カイリも、同様に相当の感動を覚えていた。
「す、凄いねぇ」
呟かれた深冬の言葉に、華奈は口を開けたまま首を縦に振って応えることしか出来ない。

だが大通りの中央に立ち尽くしたままでは道ゆく人々の邪魔になってしまうゆえ、フラットが足を進めるよう促した。

「凄い、凄い！　何か祭やってるみたいだね！」
「あまりきょろきょろするな。田舎者だと思われるぞ」
「田舎者だから良いんですっ！　それより、本当に賑やかだねぇ。血が騒ぐってもんだよ」
周囲をきょろきょろと見渡しながら興奮気味に言う華奈にパルスが突っ込むが、華奈は突っ込みに対する怒りよりも街の状況に対する感動の方が遥かに勝っているようである。
深冬も華奈にひっついて嬉しそうに周囲を見渡しており、環も表情はいつもの穏やかなものだがかなり興味深々なご様子だ。
パルスは小さくため息を吐いたが、フラットとカイリは年相応の女性らしくて可愛いんじゃないかなぁ、などと密かに思った。
「でも、これだけ大きな街なら換金所なんかもあるかも知れないかな」
「そうだね、じゃあちょっとその辺の人に聞いてみようか」
言うが早いか、華奈は近くを通った若い女性に「おぉい、そこの美しいお嬢さん」などと言いながら近付いていく。
その呼び止め方はどうかと思いながらも、一同はその行動力には感心した。
お嬢さんは多少奇怪な華奈の言動と服装に初めは驚いたが、華奈が道を尋ねると快く教えてくれたようだ。
深冬はその様子を見ながら、この世界の人は良い人が多いんだなぁ、と、ぼんやりと考える。
少しして、華奈はお嬢さんにお礼がてら手を振り、皆の方へと戻ってきた。
「換金所、そこの道を左に曲がって少し行ったところにあるって！　ついでにこの街、カヴェリーラっていう名前らしいよ」
換金所があるという事実に一同は胸を撫で下ろす。

まだ換金して貰えるかどうかは判らないが、とりあえず行ってみるしかない。
お嬢さんが教えてくれた通り、少し先にある十字路を左折する。
しばらく進むと、大通りよりは幾分か狭いがそれでも充分な広さがあるその通りに、“換金所”と書かれた看板を発見した。

扉を引いて、中へ入る。
オリーブ色の木製扉に設置された、どこか幻想的で澄んだ音を奏でる呼び鈴の音に気付いて、正面にあるカウンターの内側で何かを鑑定していた店主らしき老紳士が顔を上げた。
「いらっしゃい」
老紳士はぞろぞろと狭い店内に入ってきた若者達に微かに目を剥いたが、人好きのする笑みを向けてくれる。
華奈達はぺこりと頭を下げて挨拶し、代表で、フラットが老紳士に話し掛けた。
「こんにちは。鑑定と換金をお願いしたいのですが……その前に、ひとつお尋ねしたいことが」
「何だね？」
「おかしなことをお尋ねするかも知れませんが、この辺りの貨幣はどのようなものですか？　種類や、形や……もし良ければ、見せては頂けないでしょうか」
「貨幣を見せて欲しい、のかね」
「はい。出来ればで良いのですが」
ふむ、と、老紳士はしばし整えられた顎鬚を撫でながら逡巡する。
お金というものは普段の生活の中で殆ど毎日のように目にし、触れるものであるから、フラットの問いは老紳士にとっては相当不審なものに聞こえた筈だ。
だが老紳士は彼の願いを快諾し、胸ポケットに入れてあった硬貨を数枚取り出すとカウンターの上に並べた。
カウンターに近付き、華奈達もそれを覗き込む。

カウンターの上には金、銀、赤銅、青銅色の４種類の硬貨がそれぞれ１枚ずつ並べられていた。
老紳士は続けてその横に、紙幣を並べていく。
紙幣はユニコーン色の紙に赤紫系の色で文字や模様が描かれたものと、青系の色で描かれたものの２種類だけだった。
形や大きさは、普段華奈達が目にしていた紙幣と同じくらいである。
「貨幣は世界共通で、単位は“ウォウス”。硬貨はこちらから順に、１、１０、１００、１０００ウォウスの価値がある」
青銅、赤銅、銀、金色の硬貨の順に、老紳士は丁寧に説明しながら指差していき、最後に紙幣は赤が１万、青が１０万ウォウスだと説明する。
老紳士が見せてくれたお金は、華奈達は勿論のこと、パルス達が街へ向かいがてら見せてくれた彼らの世界のものとも違うものだった。
ただ、十進法で数えるということだけは共通しているようだが。
「それにしても、世界共通なのに貨幣を見たことが無いのかね？」
「えぇ、まあ、色々と訳ありでして」
「そうかね」
フラットが苦笑交じりに答えると、老紳士はそれ以上追求するようなことはしなかった。
老紳士の、いや、この世界の人々の人柄の良さに、一同は感謝する。
人としての在り方の根本とはこういうものなのかも知れないとも思った。
「それで、鑑定して貰いたいというものは一体何だね？」
カウンターの上に並べたお金を胸ポケットにしまい込みながら、老紳士が尋ねてくる。
華奈達は目配せをし合うと、自分達が持っているお金を全てカウンターの上に並べた。

華奈達は殆どが小銭と、環が辛うじて持っていた千円札が2枚。
パルス達も硬貨が多かったが、皆紙幣を数枚は持っていた。
「どうでしょう、これらに素材としての値打ちはありますか？」
ふむ、と言いながら、老紳士はまずパルス達の硬貨を手に取り、鑑定用のレンズで見る。
彼らの世界の3種類ある硬貨を全て見終えてから、老紳士は言った。
「コインの表面の模様は美しいものだが、これらは普通の貨幣に使われる素材と殆ど同じものだね。工芸品的な価　値を入れるとしても、素材に対応した貨幣に若干上乗せする程度にしかならんね」
紙の方は換金することが出来んね、と、老紳士は付け足す。
紙幣の方が貨幣的価値が高いとはいえ、世界が違ってしまえばただの紙切れということだ。
パルス達は肩を落とすが、老紳士は、華奈達の硬貨を手に取った瞬間片眉を上げた。
「これは……」
まじまじと、彼は手に取った１０円硬貨を観察する。
「お嬢さん方のコインは、合金で出来ているのだね。これは、殆どが銅で出来ているようだが……」
「それは一応、青銅です。銅と、錫と……亜鉛が含まれていますが」
「ほぅ。青銅はね、信仰的価値観から見ると価値の高いものなんだよ。ただ、このコインは銅の割合が高過ぎるからそれほど高値にはならんがね」
老紳士は環の説明を興味深々といった風に聞き、他の硬貨も手に取ってその素材を聞いてくる。
質問に的確に答えていく環。
そのやり取りを見て、タマちゃんの頭の中は実は百科事典なのではなかろうかと華奈と深冬は思った。
普段から使っているものとはいえ、その素材まで的確に答えられる者はそうそういないだろう。

「どれも珍しい合金を使っているね。それほど高額にはならんが、そちらの彼らのコインよりは高額で換金することが出来るよ」
言いながら、老紳士は最後に1円硬貨を手に取る。
そして、それを見て眉根を寄せた。
「このコインは何という素材で出来ているんだね？」
「アルミニウムという素材です」
「アルミニウム……？」
華奈達にとっては至極ありふれた素材だが、老紳士は首を傾げる。
この世界には、アルミニウムが無いのだろうか。
「ご存知ありませんか？」
老紳士はしきりに顎鬚を撫でながら思案するが、どうやら博識な彼の記憶の中にそのような素材は存在しなかったようだ。
その様子を見て、環はアルミニウムが電解精錬によって得られるということを思い出す。
店内にある照明はランプだけ。
街を少し歩いたが、電線のようなものは見当たらない。
ということは、この世界には電気というものが存在しないということではないだろうか。
じっくりと1円硬貨を観察した老紳士は、ふむ、と一言言うと、鑑定用レンズをカウンターの上に置いた。
「何故お嬢さん達がこのようなものを持っているのかは知らないが、これは確かに、未確認の素材だね。研究材料としての価値もさることながら、その稀少性も高い。これならば、高額で換金させて貰うよ」
にっこりと、微笑を浮かべながら老紳士が口にした言葉を受けて、華奈達は顔を見合わせる。
直後、店内には（主に華奈の）歓声が響き渡った。

１―６　ノーコンの女王と鈍器の覇者

第三世界の貨幣が入った布袋を手にした華奈は、満面の笑みを浮かべていた。
「まさか１円玉がこんなお金になるとは思わなかったよね」
「流石、１円作るのに３円は掛かるとか言われるだけのことはあるよね」
こちらも嬉しそうな表情の深冬の言葉に、華奈も笑みのまま答える。
変な豆知識には何故か詳しい華奈であった。
まぁ、しかし、１円が３円になるどころの話ではない。
換金所の老紳士に聞いたところ、現在華奈の手の上にある布袋の中にはどうやら数ヶ月間６人分の食事代には困　らないくらいのお金が入っているらしいのだ。
旅先で宿を取る場合の宿泊費を差し引いても、２ヶ月程度は余裕で旅が出来るらしい。
これでとりあえず、当面の問題は精霊の封印場所探しのみとなった訳だ。
……が。
「でも、食事代とか宿代とかの前に……ハルナ達は服を買った方が良いかも知れないね」
ぽつりと、フラットが言う。
確かに、現在は大通りを歩いている訳だが、華奈達の奇妙な服装に視線を向けてくる者が多い。
それ以外に男性陣へ向けられる視線―（主に女性の）も多分に含まれてはいるのだが。
「それに、これから何が起こるか判らない。武器も買っておいた方が良いだろうな」
それもそうだな、と、華奈達は考える。

世界を手にしようとした程の敵の邪魔をする訳なのだから、出来る限り目立つのは避けた方が良いし、ずっと敵と遭遇せずに事を成し遂げることは無理であろうから（何せ弥鷹達は敵に捕まっているのだ）、最低限自分の身を護る為に武器は必要であろう。
それゆえ、次の目的地は服屋、そして武器屋にしようという意見に異論を唱える者はいなかった。

見知らぬ土地ゆえ当てもなく街を歩くが、服を売っている店はすぐに何件か発見することが出来た。
広い路上で店を開く渡りの商人も相当多いが、元々この街で店を営んでいる者もかなり多い。
途中で再び華奈がその辺のお嬢さんを呼び止めて話を聞いたところ、どうやらここ“カヴェリーラ”は商業の街として発展を遂げてきた場所のようで、近年では年中現在のような賑わいを見せているそうだ。
その事実を聞いて華奈は「年中祭かー」などと言いながら異様に喜び、あっちへふらふらこっちへふらふらしようとする。
その度に額に青筋を浮かべたパルスに頭を鷲掴みにされて止められた華奈は、頭を鷲掴みにされたままとある店の中へと引っ張り込まれていった。
「痛いってば！　何も頭引っ張ることないでしょ！　ヅラ取れたらどうしてくれんの」
「街見物なんぞに現を抜かしている場合ではないだろうが。必要な物を買うのが先だ！　というかお前はヅラなのか！」
「そういうノリ突っ込みを期待しての虚実に決まってるでしょ。ぷっ、引っ掛かっちゃって。くす」
「この野郎……」
華奈の小馬鹿にしたような言い方が気に食わなかったパルスは額の青筋の数を増やす。
だが流石に怒りに震える拳を華奈に向ける訳にもいかないので、

パルスは再び言葉を返し、それは傍から見ればどうでも良い口論へと発展した。
外見から受ける冷淡そうな雰囲気とは裏腹に、パルスは割合熱くなり易い性格のようだ。
主に華奈に対してそれは発揮されているようだが……というのは、環の見解である。
環と同意見なのか、フラットは口論を続ける2人を見て端整な顔に微苦笑を浮かべた。
「2人とも、あんまり騒いでると店員さんと他のお客さんに迷惑が掛かるから。早く服を選ぶようにね」
フラットに制されて2人ははっとして店内を見渡す。
何件かあるうちの中から選んで入った服屋の店内にいる人々の視線は、店員のものから客のものまで全てが華奈とパルスに注がれていた。
正気に戻って気恥ずかしくなった華奈は、多少引きつった笑いを浮かべて誤魔化し、こちらも微苦笑している深冬と環の元へと駆け寄る。
パルスは納得のいかないような表情をしながらも、渋々とフラットとカイリの方へ向かっていった。
「全く、花の乙女の頭を鷲掴みは酷いよね」
綺麗に並べられた服を漁りながら、華奈が文句を言う。
環は普段の柔らかな笑みに戻っているが、深冬は未だ微苦笑を浮かべていた。
「まぁそうだけど、ハルちゃんもちょっと飛ばし過ぎじゃないかな？　私も街見物はもの凄くしたいけど」
そう、深冬だって、環だって、祭のような賑わいを見せる街を見物したくてうずうずしているのは一緒である。
だが華奈のはしゃぎ様は普段を上回っているというか、空元気のような気がしてならないのだ。
ふんわりとした、しかし全てを見抜くような環の微笑を受けて、

今度は華奈が微苦笑を浮かべる番だった。
「何ていうか、やっぱり不安でね」
「タカ君達のこと？」
「うん」
手元の服を無造作に弄りながら、華奈は頷く。

そう、自分達は今は良い。
何だかもの凄く強い力を手に入れて、世界を自由に動き回れるのだから。
しかし精霊の加護も受けずに敵の只中へと落ちてしまった弥鷹達は。
パルス達の主とやらと一緒に捕まっていると聞いたゆえ、少しは安全なのかも知れないが。その主とやらに言うことを聞かせる為に、はたまた敵の邪魔をしようとする自分達の行動を遮る為に、人質として使われることだって考えられるのだ。
人質としての価値すら無いと判断されれば、殺されることだって……

そう思うと、気が気でない。
精霊解放の方法すら判っていない状況ゆえ、余計に。
深冬だって、環だって、自分と同じような不安を抱えているのが華奈には判っていた。
彼女達に不安を感じさせないようにしようとして、でも少し空回っているのかも知れないということも判っていた。
――だから、いちいち突っ掛かってきてくれるパルスが、実は少しありがたかった。
彼が突っ掛かってきてくれていたから、華奈はまだ“普段の自分”という枠組みの中から外れずにいられるのだ。
空回りし過ぎて逆に不安を与えることをせずにいられるのだ。
「頑張ろうね」

可愛らしい顔に花が咲いたような愛らしい笑みを浮かべて、深冬が静かに囁く。
華奈も環も決意を新たに、静かに頷いた。
「おーっし、頑張るぞー！」
テンション一変。
鷲掴みにした服ごと腕を振り上げ、華奈は声を上げる。
そのでかい声に反応した店内の人々の視線が一斉に向けられたことに気付き、華奈は再び気恥ずかしそうに引きつり笑いを浮かべた。

数メートル離れた位置で男性物の服を物色していたパルスは、雄叫びのようなものを上げて店中の注目を集めてしまった華奈を見て半眼でため息を吐き出す。
「いちいちうるさい奴だな」
「そのいちいちうるさいハルナにいちいち突っ掛かってるのは何処の誰だっけ？」
なまあたたかい笑みを浮かべるフラットに一瞥をくれ、パルスは「知るか」と吐き捨てた。
それからちらりと華奈達の方へと視線を移して、すぐに手元の服へと戻し。
不安そうな顔をしているあいつが悪い、と。
誰にも聞こえないような声音で呟いた筈のパルスの言葉は、フラットとカイリにはばっちり聞こえていた。

衣類を数着と、荷物を詰め込むバッグなどなど。
とりあえず服屋にて最低限必要なものを揃えた一行は、今度は武器屋へと向かっていた。
服は、初めは華奈達の分だけ買えば良いと思われていたが、パルス達の騎士服も黒づくめでやたら目立つ為、全員分購入することと

なった。
この世界の衣類は華奈達が普段目にしていたものと似たような雰囲気のものも多いが、複雑な紋様が刺繍してあるものが殆どで、どことなくファンタジックな雰囲気を醸し出している。
どちらかというと、パルス達の世界の衣類に酷似しているらしかった。
ただ彼らの世界と違うのは、女性の衣類の、スカートの丈が短いところらしい。
丈の長いスカートも多いのだが、華奈達の元着ていた制服ばりに丈の短いスカートもかなりある。
華奈は動き易さ重視で短パンを、環は膝下丈のスカート（但しスリット入り）を着ているが、深冬は膝上１０センチ程度の丈の短いプリーツスカートを選んでいた。
ちなみにひとりひとつ購入したバッグは、風と地の精霊の加護を受ける植物で編んだものらしく、バッグの容積の十何倍もの物を詰め込めるという優れものだ。
旅人にはお薦めだとかで、若干値は張ったが全員が購入することとなった。
何せ元着ていたものもある為、衣類だけでかなりの荷物になる。
だがミニショルダーバッグ程度の大きさのそれには、元着ていた衣類と購入した衣類、全てが納まりきってしまった。
風の精霊の加護のお陰で重量もそれほど感じないし、本当に優れものだ。
ともかく、これで何とか彼らはこの世界に順応する外見を手に入れた。
……筈なのだが。
何だかやはり、やたらと周囲からの視線を感じる。
不振に思った華奈が分析すると、視線は主に女性のもので、視線の先はパルス達であるということに気が付いた。
確かに３人……特にフラットはかなり整った顔をしているので、

こんなのが並んで歩いていたら思わず視線が行ってしまう乙女の気持ちも判るような気がする。
あまり目立たない方が良いのだがまさか整形しろと言う訳にもいかないので、ある程度目立ってしまうのは仕方のないことだと華奈は割り切ることにした。
ちなみに笑顔が素敵で美人な環も、小柄で可愛らしい深冬も、割合整った顔をしている華奈も、目立つことにだいぶ加担しているのだが……そのことに、本人達は気付いていない。

次に6人が訪れたのは、街の某所にあるさほど大きくはない武器屋だった。
先程の服屋の店員に薦められた店で、カヴェリーラに昔からある老舗らしい。
本当は流れの商人の方が良い武器を売っているところがあるかも知れない、と言われたのだが、なにぶん流れの商人の開く露店は街中に……数にして千以上もあり、商人も入れ代わり立ち代わりしているので街人ですら系統や数を把握していない状況。
それゆえこの街に来たばかりの華奈達が露店から良い武器を探そうとしたら一体何日掛かるか判ったものではないので、元から街にある武器屋で一番良いと思われる店を紹介して貰ったのだ。

店内へ足を踏み入れると、奥のカウンターの上に足を投げ出しつつ煙草をふかしていた中年の男が一同へと視線を向ける。
「よぉ、いらっしゃい」
刀鍛冶を連想させる格好と体つきで若干強面のその男は、カウンターに足を投げ出すという格好のまま6人を店内奥へと招き入れる動作をした。
「見ねぇ顔だな。何探してんだ？」

「えぇ、今日この街へ来たばかりで。彼女達に合う武器を探しています。少し店内を見させて頂いても？」
男の言葉にはフラットが応える。
男はにんまりと笑みを浮かべ、「おぉ、好きなだけ見ろ」と返してきた。
お言葉に甘えて、６人はじっくりと店内に所狭しと並べられた武器達を見る。
なるほど、商業の街で生き残ってきた老舗だけあって良質な武器を置いているようだ、と。パルス、フラット、カイリは、陳列された武器を指でなぞったり手に取ったりしながら感心する。
だが武器の良し悪しなど全く判らない華奈達は、単にその種類や数の多さに関心していた。
「どんな武器が良いの？」
刀身が三日月状に反り返った刀……曲刀の一種を手に取って見ていた華奈に、フラットが問い掛ける。
華奈は曲刀を元の位置に戻し、腕を組んで唸った。
「武器とか言われてもなぁ……凶器なんてカッターかハサミか包丁くらいしか使ったことないし、あんまりピンとこないかな」
「でも、ほら。精霊の加護の力を感じた時と一緒でさ。何となく自分のスタイルに合ってるんじゃないかな、ていうイメージくらいはあるよね？」
華奈は目を閉じて考え込む。
数秒間真剣に考えた華奈は、やがて結論に至ったのか目を開いて顔を上げ、うむ、とひとり納得したかのように頷いた。
それから、しゅっとフラットに向かって拳を突き出す。
「やっぱり男なら拳で勝負でしょ」
自信あり気な表情でそう言った華奈に、フラットは苦笑した。
パルスからも「男ではないだろうが」という基本的な突っ込みが入るが、彼らは彼女が突き一発で巨木を薙ぎ倒し　たことを思い出し、妙に納得する。

それに彼らは知る由もないが、格闘技マニュアル本を買い漁って実践するのが趣味でチンピラ共との戦闘経験も何度もある華奈にとっては、下手な武器を使うよりも拳で戦った方が性に合っているのかも知れなかった。
「まあそれならそれで良いが。ならばせめて、ナックルかグローブを買っておけ」
「何で？　お金がもったいな……」
「拳を痛めるだろうが」
一応今後の経費のことを考えてみた華奈だが、パルスの有無を言わせぬ物言いに渋々納得する。
武器についての知識の無い華奈は、カイリに自分に見合うものを選んで貰うことになった。
丸腰に見えたカイリは実は格闘術の使い手らしく、愛用のセスタスという武器を持っているのだそうだ。
ちなみにパルスは長剣、フラットは斧の付いた槍のような……ハルバートという武器を自分の世界から持参している為、購入する必要は無いらしい。
華奈はカイリの進言もあって、手の甲にあたる部分にプレートの付いた黒い革のグローブを選ぶ。
その時、ひとりで一生懸命選んでいた深冬が声を上げた。
「私、これにしようかな」
どうやら武器を決めたらしい深冬に、どれどれと華奈が近付いていき……硬直する。
深冬が手にしていたのが、小さめの、クナイのような武器だったからだ。
だらだらと、嫌な汗が華奈の身体を流れていく。
「深冬……本当に、それにするつもりなの……？」
「うん！　やっぱり私に合う武器といえばこういう飛び道具系だよね！」
満面の可愛らしい笑みを湛えて言う深冬を見て、華奈はがっくり

と肩を落とした。
　こうなったらもう、諦めるしかない。
「何だ、ミフユに飛び道具を持たせて何か不都合でもあるのか」
　華奈の反応が気になったらしいパルスがこっそりと耳打ちしてくる。
　どんよりと重苦しい空気を纏った華奈は、深刻そうな表情をパルスへ向けた。
「君達は知らんだろうがネ。深冬はもんの凄く重度なノーコンなのですヨ」
「の、のーこん……？」
「そう、ノーコン。主に野球の投手に対して使われる、ノー・コントロールの略語ネ。何かを投げる時、投げた者が意図した方向へと物が飛んでいってくれないという、深刻な症状のことダネ」
　何故かエセ中国人風に言う華奈だが、事の深刻さはパルスにも伝わったようだ。
　美術の授業で彫刻刀を使った時。深冬が手を滑らせてその手に握られていた彫刻刀は華奈の顔を掠めて飛んでいった。
　深冬がペン回しをしていた時。これまた手を滑らせてペンはあらぬ方向へ飛び、やはり華奈の顔を掠めて背後の壁に突き刺さった。
　ダーツをして遊んでいた時。深冬は的を狙っていた筈であるのに何故か人の方へばかり向かって飛び、一緒に遊んでいた華奈と弥鷹と彩瀬は死ぬ気で逃げ回ることとなった。
　とどのつまり、深冬に飛び道具を持たせてはいけないということである。
　だがノーコンの自覚が無い彼女の中ではもう２０本セットのクナイのような武器を購入することは決定事項らしく、武器を手にやたらうきうきしている彼女に買うななどと言える雰囲気ではないのは明白だった。
「……み、ミフユ。それは良いとしても飛び道具だけでは心許ない。重い武器が苦手なら、短剣の一本も買っておいた方が良いな」

「ん？　そっか。じゃあそうしようかな」
多少顔を引きつらせたパルスの進言により、深冬はダガーを一本、購入することに決めたようだ。
か細いが崖っぷちで命綱を得たような気分になり、華奈とパルスは胸を撫で下ろす。
と、その頃。
どうやらめぼしいものが見付かったらしい環が店内の一点を見つめていることに彼らは気付いた。
しかし、環の視線の先を追った一同は揃ってぎょっとする。
一同の様子に気付いて視線の先を追った店員の男も、驚いて椅子からずり落ちそうになった。
「おいおい、お嬢ちゃんにそりゃあ無理じゃねぇかい？　ある程度軽量な金属は使ってるが、女の細腕で振り回すには荷が重い武器だぞ」
冷や汗を掻きながら、男は言う。
だが環はにっこりと微笑みを濃くし、壁に掛けられていた一対のその武器を手に取った。
環が手に取ったそれは、トンファーと呼ばれるものの形状に酷似している。
だが長さが環の腰より上まであり（通常は人間の腕より短い）、武器の先に鉄球が取り付けられているというおまけまで付いていた。
明らかに重量級に分類されるであろうその武器。
それを環はいつもの微笑みのまま軽く持ち上げ、いともたやすく振り回してしまった。
店内の空気が、目にも留まらぬ高速で振り回されるふたつの鉄球の軌道に沿って唸りを上げる。
やがて環が満足して武器を下ろす頃、一同は店の隅の方に固まって青ざめ、店員の男に至っては驚愕のあまり椅子から転げ落ちていた。

「うん、やっぱり、武器といえば鈍器だね」

可憐な微笑みを湛えたまま、環はさらりと言ってのける。

かくしてメンバー内の逆らってはいけない人ナンバー1である最凶人物は、ここに誕生した。

１―７　その意味を、彼女は知らない

もう重量級鉄球付きトンファー（言わずもがな二刀流）を可憐な美少女が購入することに異論を唱える気は無くなったらしい刀鍛冶風の中年の男（店主らしい）に代金を支払い、６人は店を出る。

店主が混乱しているのを良いことにしっかりと値切ることも忘れずに。

ちなみに値切ったのは深冬とフラットの仕業だ。

全く良い根性をしていると、華奈は思う。

その華奈は、というと。

「どうした？　気に入らないかい？」

「えっ！？　い、いや、凄く綺麗なのばっかりでどうしようかと！」

目の前の人物からそう声を掛けられ、先程の武器屋での出来事を思い返して遠い目をしていた華奈は正気に返って顔を上げた。

現在彼女は街の大通りにある露店のひとつの前にしゃがみ込んでいる。

もう夕方ゆえ宿を取らねばならないということになった一行は、宿予約組と情報収集組の二手に分かれ、行動力を買われた華奈は情報収集組として行動しているのだった。

宿の予約にはフラットとカイリが向かってくれたが、予約のし方を覚えたいという理由で深冬と環も一緒に向かってしまい、情報収集組は華奈とパルスのふたりだけである。

フラット達と一時別れてから、ふたりは懸命に情報収集に当たっていた。

街人に聞くよりは、ということで、大通りで露店を出している渡りの商人を中心に。

最初の商人には率直に「精霊の封印されている場所を知らないか」と尋ねてみたのだが、「精霊様が封印？　そんなことが起こったらこの世は終わりだ。何を世迷言を」などと返されたので、率直な質問は避けながら、だ。

流石は精霊の住まう世界だけあって精霊の存在は認識されており、精霊が封印されるということが一大事だということも認識されているようだが。

封印されて間もない所為なのかヴィレイスの部下とやらが大っぴらに動いていない所為なのか、未だ精霊が封印されたという事実は一般人に知られ渡るレベルではないようである。

率直な質問を避けるのは、そんな一般人達を下手に混乱させない為だ。

それゆえ質問は「精霊の住んでいる場所を知らないか」「最近何かおかしな事件などは起こっていないか」などという内容になる。

封印の影響で何かしら異変が起きている可能性が高いので、異変が起きた場所へ行けば何か判るかも知れないし、精霊が住んでいた場所へ行けば封印解除の手掛かりが得られるかも知れないからだ。

まず精霊の住まいについては、精霊の姿を直接見たという事例が殆ど無いらしく、はっきりとは判らなかった。

精霊はそうそう人前に姿を現すものではないらしい。

ただ、精霊の信仰が特に盛んな場所に関しては幾つかの地名を聞くことが出来たので、場所を調べて行ってみるのもひとつの手ではあると考える。

次に事件などについてだが、これに関しては、漠然とだが画一的な返答が得られた。

最近になって今までになく凶悪な事件が起きたり、人に害を及ぼす魔物達の数が増えたりしているらしい。

今まで質問を投げ掛けた商人達は皆、口を揃えて「物騒になった」とそう言うのだ。

多分……というか十中八九、精霊が封印されたことが原因なので

あろう。

目の前にいる商人、エスニックな格好をした宝石商のお姉さんも、華奈が質問すると似たような答えを返してきた。

これ以上の情報は得られそうもないので立ち去っても良いのだが……

このお姉さんが何とも商売上手で、質問に答えたのだから何か買うのが筋でしょうという視線をびしびしと華奈に投げ掛けてくるのである。

今まで質問してきた商人からはそういう雰囲気になる前にそそくさと逃げてきたのだが、超笑顔で圧力を掛けてくるお姉さんから逃げるのは無理そうだ。

仕方が無いので華奈は買うものを選んでいるが、陳列されている商品が宝石やらアクセサリーやらと高価なものばかりなので決めかねているのだった。

どれも綺麗で迷う、というのも事実ではあるのだが。

「そうだね、これなんてどうだい？」

悩みまくっている華奈を見かねたお姉さんが、しゃらんと澄んだ音のする首飾りを手に取る。

青い宝石で形作られた蝶や木の葉、小さな宝珠などが散りばめられ、3本の銀のチェーンが連なるようなデザインのそれは、確かに目を見張る程に美しいのだが、値札に書かれていた数字を見て華奈は思わず目を逸らした。

購入したら、折角手に入れた路銀が殆ど無くなってしまう。

「いやあの、自分にはちょっとお高いかなぁと……」

「品質の割には安くしてあるんだけどね。何なら後ろの彼氏にでも買って貰ったらどうだい」

「あれは彼氏などではありませんので」

「そうなの？　仲良さそうにしてたからてっきり」

「冗談抜かさないでください。買いませんよ？」
「そりゃ困るね」
そう言ってお姉さんは肩をすくめてみせる。
ちなみにお姉さんが“彼氏”と称したのは、華奈から１０メートルほど離れた位置に腕を組んで立っているパルスのことだ。
お姉さんに話し掛ける直前までちょっとした口論をしていたのでそれが仲良さげに写ったのかも知れないが、冗談ではないと華奈は思った。
華奈の背中へ向けて「早くしろ」という殺気にも似た気配を叩き付けてくる存在が彼氏などである筈が無い。
ふぅ、と、華奈はため息を吐き出し、その時ふと目に留まった商品を手に取る。
シンプルで好きな感じのデザインだし値段もそれほど高くないし、華奈はそれを購入することに決めた。
手に取ったものを「じゃあこれね」と言いながらお姉さんに渡すと、お姉さんは笑顔でそれを受け取り小さなケースに入れてくれる。
手馴れた感じで動くお姉さんの手元を見ていた華奈は、購入ついでにもうひとつ質問をしてみることにした。
「ねぇお姉さん、この街で商売をする時って、ショバ代とかそういうのは必要？」
「ショバ代？」
「んーと……場所代というか、街に対して契約料みたいなのを払わなきゃならないとか、そういうやつですよ」
意味を理解したらしいお姉さんは、ふるふると首を横に振る。
「必要ないよ。この街ではルールさえ守られていれば、誰もが自由に商売して良いんだ」
「へぇ、良い街ですね」
「あぁ、商売もし易いし、ここは本当に良いよ。何か始めるのかい？」
「いや……自分達、た、旅芸人なもんで。ここで商売を始めるのに

どうしたもんかと思ってたんです」
へえぇ、と、お姉さんは興味津々なご様子だ。
本当に芸をする羽目になるかも知れないゆえの質問であるとはいえ、まだ決まってもいない芸の内容にあまり興味を持たれても困る。
突っ込んで質問されたらどうしようとひやひやしていた華奈だったが、お姉さんは手際良く包装を終え、ケースを華奈へ差し出してきた。
それを受け取って代金を払い、礼を述べながら、華奈は露店を後にする。
お姉さんはにこやかな表情で手を振りながら華奈を見送ってくれた。

華奈の手の中にあるケースを見たパルスの眉間に、微かに皺が寄る。
「何を買わされているんだ」
だいぶ待たされた為か多少不機嫌そうな口調になったパルスだが、華奈はそれを気にする風もなく自分の手元に視線を落とした。
「まぁ情報料というか何というか……はい、どうぞ」
苦笑を浮かべながら、華奈はパルスに手の中のものを渡す。
怪訝な表情でそれを受け取ったパルスは、ケースの蓋をゆっくりと開いてみた。
ケースの中身はピアスだった。
シルバーの台に小さな紅い珠というシンプルなデザインだが、見る角度を変えると珠の中でオレンジ色の光が微かに明滅する様子は思わずため息が零れるほど美しい。
だがそれを渡される理由が判らないパルスは、更に怪訝な表情を華奈へと向けた。
「プレゼント。買わされたは良いんだけど、あたし、ピアスの穴開いてないしさ。パルスは開いてるみたいだし、目の色とお揃いだから丁度良いかと思って」

「だが……」
「あー、返却不可ね。あたし達の中でピアス穴開いてる人いないから。もし要らなかったら誰かにあげてもいいしさ……あ、来た」
ふと、華奈が何かに気付いたところで、会話は半ば強引に終了される。
華奈の視線の先には、宿屋予約組４人の姿があった。
華奈とパルスの姿を確認した深冬がこちらへ向かって手を振りながら駆け寄ってくると、華奈も深冬の方へと駆けていってしまう。
パルスは手の中にあるピアスを複雑な表情で見下ろした。
そして、どうしたものか、と、ため息を吐き出す。
彼女が自分達の世界の風習を知る筈もないということは、判ってはいるのだが……

「何か有力な情報はあった？」
「いーや、精霊が信仰されてる地名がいくつか判ったくらいかな。どの辺にあるのかは判らないけど」
「そうだね……後で地図を購入しよう」
「僕達もハルナさんとパルスを捜しがてら少し情報収集をしてみたのですが、大したことは判りませんでした。ただ……」
「何かと物騒になってるって」
カイリの言葉に続けるようにして、環が言う。
華奈とパルスは神妙な面持ちで頷いた。
「あたし達が質問してみた人達も、口を揃えてそう言ってたよ。それってやっぱり」
「精霊が封印されたことによる影響、だろうね」
精霊が封印されたという事実を知る一般人はいない。
だが商人達がこぞってそう言う程であるから、“物騒になった”

のレベルは相当のものなのだろう。
精霊が封印されたことが知れ渡り世が混乱するのも時間の問題かも知れなかった。
急がなければならない。

全員が心中でそう確認した頃、華奈達は予約した宿屋の前へと辿り着いた。
大通りを少し逸れた所にある、２階建てのそれほど大きくはない宿屋だ。
しかし、ＲＰＧのゲームなどに出てきそうな外観のそれは、大きくはないながらも外装が多少豪華で、値段が高そうな印象を受ける。
案の定街中そこここに点在する宿屋の中でも現在目の前にある宿は若干高いらしいのだが、近辺の安い宿は商人やら旅人やらで満杯になってしまっていたようだった。
もう陽も落ちかけているし、安い宿を探しているうちに予約が取れなくなっても困るので、目の前にある宿で手を打ったらしい。
土地勘も全く無いのであまり歩き回れないゆえ仕方のないことだと、情報収集組であった華奈もパルスも納得することにした。

建物の中へ入り、カウンターにて予約をしたフラットの名を告げると、カウンター内に立っていた青年に鍵を２つ渡される。
予約した部屋は２階。
華奈達用とパルス達用に、２部屋取っていた。
カウンターにて青年に案内された通りに、一行は進んでいく。
「結構お金使っちゃったね」
階段に差し掛かった辺りで、深冬がぽつりと呟いた。
全員分の服とバッグを購入して、華奈と深冬と環の武器を購入して、宿を取って、宝石商のお姉さんにピアスを買わされて……
それにこれから宿内にて夕食を食べることになったし、明日になれば地図や、食料や……旅に必要な様々な物を買わなければならな

い。
２ヶ月は余裕で旅が出来る程度のお金を手に入れた筈だったのに、と、深冬は心中で呟くが、旅始めの準備にだいぶお金が掛かってしまうのは、まあ仕方の無いことだった。
「やっぱり旅芸人になるしかない……んでしょうか」
控えめな声音で言われたカイリの言葉に、半分は苦笑を漏らし、半分はため息を吐き出す。
そのどれにも、諦めの意が込められていた。
「まぁ商売料とかいらないみたいだし、今後お金も必要だろうし、仕方ないか」
「じゃあ、夕食食べながらゆっくり考えようか。ひとりひとつは案を出して貰うから、そのつもりで」
フラットがそう締めくくると、全員がそれぞれの返事を返す。
丁度その時予約した部屋の前へと辿り着き、男女３人ずつに分かれて隣り合った室内へと入っていった。

１―８　些細な事件

「おー、壮ー観ー！」
額の辺りに手を翳し、華奈は眼下に広がるカヴェリーラの美しく賑やかな街並を見下ろした。
少し離れた位置にはパルスが立っており、呆れた様子で華奈を見ている。
「あまり身を乗り出すな。落ちるぞ」
「……はいはい」
お前じゃあるまいし落ちるか、と言いかけたが、華奈は思い留まって大人しく数歩後退した。
パルスの言うことも一理ある。
現在華奈とパルスが立っている場所から誤って転落などしたら、ひとたまりもないからだ。

２人が立っているのは、とある建物の屋上。
集合住宅の役割を果たすその建物は、７階建てだった。
何故２人がそのような場所にいるのかというと、昨夜、夕食の席にてどのような芸でお金を稼ぐかを検討した結果である。
２人が立つ建物の下、大通りから少し外れている為か多少人通りの少ないその場所には、深冬、環、フラット、カイリの４人が待機していた。
それほど目立たない場所ゆえ誰も商売をしたがらない場所だが、ちょっとした広場程度の広さがあり、パフォーマンスを行うには充分である。
まあこの場所を選んだのには、大通りの良い場所は商人で埋め尽くされていて場所が取れなかった、という理由もあるのだが。
だが目立たない場所であるという欠点を補う為の策は立ててあった。

作戦その１。
深冬は手にしたトランペットを多少緊張した面持ちで構えた。
隣では普段通りの穏やかな笑みを湛えた環が、リードオルガンに手を添えながら立っている。
そう、まずは彼女達が演奏し、“音”によって人々の目をこちらへ向けるのだ。
深冬は吹奏楽部でトランペットを長年演奏してきたし、環はチューバ奏者だが、幼い頃からピアノをやってきたので鍵盤楽器の演奏にも長けている。
その特性を利用しない手は無かった。
ちなみに彼女達が構える楽器は、買う余裕など無かった為に無論のことながらレンタルである。
夕食時に華奈が可愛いウェイトレスさんを捕まえて聞いてみたところ、楽器のレンタル業者は無いとのことだったが、楽器店で交渉してみたところ、中古品を安値で貸し出して貰えることになったのだ。
何でも言ってみるものである……と、それはともかく。
街を歩く人々が自分達の存在に興味を示しちらほらと足を止め始めた頃合いを見計らって、深冬は楽器の吹き口に唇を宛がった。
次の瞬間、周囲に響き渡る軽快なファンファーレ。
トランペットの音は良く響く。
それゆえ、人々の視線は一気に深冬の方へと向けられた。
一体何が始まるのかと人々が周囲に集まってくると、今度は環がオルガンの演奏を始める。
こちらも軽快なワルツだ。
環のワルツに乗って、深冬が楽しげに身体を揺らしながら副旋律を奏でる。
すると、ちょっとした人だかりが出来始めたその場所の上空から、ざわめきと演奏の中でもよく通る声が響いた。

「さあさあ皆さんお立ち会い！　当方旅芸人一座のパフォーマンスをご覧あれ！　本日限りですのでどうぞお見逃しのないよう！」
声の主は華奈だ。
華奈が言い終える頃にはだいぶ大きくなった人だかりの視線が、上空へと向けられる。
視線の先、7階建ての建物の屋上に立つ華奈とパルスの姿を認めた人々は、期待に胸を躍らせて楽しげに声を上げ始めた。
商業の街ゆえ商人達の出す様々な店は数知れずあるカヴェリーラだが、こういった芸人というものはそれほど多くいる訳ではない。
ゆえに街人達の注目度もかなり高いのだった。
環と深冬の演奏が止むと、辺りが一瞬、静寂に包まれる。

そこで作戦その2の決行だ。
音で人々の視線を集めたら、今度はインパクトのあるパフォーマンスで人々の心を掴まなければならない。
華奈とパルスは一瞬視線を合わせて浅く頷くと、2人同時に7階建ての屋上から……
……飛び降りた。
人だかりから悲鳴が幾つも上がり、思わず目を覆う者すら現れる。
しかし華奈とパルスは空中で捻りや回転などの動作を入れ、美しく地面に着地してみせた。
辺りは再び静寂に包まれる。
が、2人が立ち上がって流れるような動作で礼をすると、人だかりから一気に歓声やら拍手やらが沸き起こった。
目の前で起こった出来事が信じられず、呆然としている者もいる。
この世界の一般人の身体能力は華奈達やパルス達の世界の一般人とそう変わらない為、7階建ての屋上から飛び降りて軽々と着地してみせるなど、幾ら鍛え上げられた人間でもそうそう出来る芸当ではなく。
また、そうそう目にすることの出来る光景でもなかったのだ。

華奈は礼をしつつ、人々の拍手喝采っぷりに思わず笑みを浮かべた。
昨日の夜何度も飛び降りる練習をした甲斐があって、人々の心をがっちりと掴むのに成功したようである。
全く、精霊の加護様々だ。
幾ら華奈でも、自分の世界であればせいぜい2階程度から飛び降りて着地するのがやっとなのだから。
ともかくこれで目立たない場所であるという弱点を克服し、パフォーマンスが出来る状況へ持っていくことが出来た。
華奈とパルスが脇へ避けると、メインの出し物、組み手の担当であるフラットとカイリが中心へと進み出る。
フラットがハルバートを構えているのに対してカイリは素手という状況に人々が息を呑んで見守る中、ある程度の距離を取った2人は向かい合って微かに腰を落とし。
環が弾いたコインが地に落ちるのと同時に、凄まじい勢いで互いの方へ向かって飛び出した。
水平に薙がれた斧状の刃を殆ど地に伏すような体勢でかわしたカイリが、体勢はそのままにフラットへ肘打ちを繰り出す。
肘打ちを跳躍でかわしたフラットが空中から突きを見舞うと、カイリは迫り来る刃を振り払いながら瞬時に間合いを詰める。
フラットは即座に柄の部分でカイリを振り払い、間合いを取る。
目で追うのがやっとの速さで繰り広げられるその攻防に、人々は瞬きをすることも忘れて見入っていた。
見入っていたのは、何も客側の人々だけではなかったが。
「す、凄いねぇ、ハルちゃん……」
2人の攻防からは視線は外さぬまま、深冬は隣に立つ華奈に小声で囁く。
だが華奈からの返答は返ってこない。
不思議に思った深冬がちらりと横目で華奈を見ると、華奈は2人の攻防を見ることに集中するあまり、深冬の声が聞こえていないよ

うだった。
微かな動きすら逃さぬように、射抜くような視線で2人を見る華奈の真剣な横顔が、深冬の背筋にえも言われぬ戦慄を与える。
自分の世界では想像も付かなかった洗練された動きで攻防を繰り広げる2人と同等か……もしくはそれ以上の“力”を、隣に立つ華奈から、攻防を繰り広げる2人を挟んで正面に立つパルスから、凄まじいほどに感じるのだ。
それは彼らが元々持っており、精霊によって引き出された“身体能力”の面での力だということに、深冬は瞬時に気付く。
同時に、自分と環に宿るものとは違う形の力であるということにも気が付いた。
環に指摘されて心を静かにしてみた時は自分の内側にある力の存在を感じることが出来たが、こうして仲間達の力を肌で感じたのはこれが初めてだ。
恐らく、パフォーマンスであるゆえ人々にも動きが見えるよう力を制御しながらも、真剣に、神経を張り詰めながら交戦しているというこの状況が、そうさせるのであろう。
（何ていうか……人間離れしてる、な）
それは、自分も含めての話だ。
深冬はフラットとカイリに視線を戻して微かに唇を噛むが、すぐさま表情を元に戻す。
持ってしまった力は計り知れない程に大きいし、不安だ。
だが自分達ならば大丈夫だと、何処からか根拠の無い自信が湧いてくるのだった。

フラットとカイリの攻防が止むと、拍手喝采の嵐が巻き起こった。
それと共に、地面に置かれていた帽子の中にお金が投げ入れられる。
投げ入れられたお金は帽子ひとつで受け止めることがかなわずに地面へ溢れ、収穫としては充分過ぎるほどだった。

礼をしながら、女性陣でお金を回収する。
と、回収し終える頃、人々の間からアンコールの声が上がり始めた。
次第に膨れ上がるその要望に華奈達は困り果て、顔を見合わせる。
一回限りのことの予定だったので、無論のことながらアンコール用のパフォーマンスなど用意していないのだ。
人々が喝采を送る中、華奈達は顔を寄せ合い小声で相談を始める。
「どっ、どうする？　アンコールなんて言われても……」
「何も考えてなかったね」
「でも民衆の期待には応えないと」
「えぇと……じゃあ、タマキさんが武器を華麗に振り回してみせるなんていうのは」
「恐ろしいから却下」
「そう？　わたしはやってみても良いけ「却下」」
「そうだね、あとは相手を変えて組み手を披露するくらいしか……」
「その線が妥当だろうな。誰がやる？」
パルスが言うのと同時に、彼と華奈の目が合った。
にんまりと、華奈は笑う。
「どうだね、そろそろ決着でも着けてみるかね？」
知り合ってまだ2日なのに何の決着を着けるのかパルスには良く判らなかったが、彼女がどの程度動けるのかを知るうえで、組み手をしてみるのは悪い話ではない。
パルスは華奈の誘いを了承することにした。
「手加減はしないが？」
「望むところ」
不敵な笑みを向け合い、華奈とパルスは人々の前に歩み出る。
拍手喝采の嵐は一際大きなものへと変わり、2人が向かい合って戦いの構えを取ると、一斉に静まり返った。
じわり、じわりと。
華奈は拳を、パルスは長剣を構えながら、互いに距離を詰めてい

く。
互いの間合いへとつま先が触れ、２人が微かに腰を落とした、その瞬間。
「きゃあああぁあああああぁぁぁ！！」
「うわあああぁぁぁ！！」
大通りの方向から複数人の悲鳴が同時に上がり、華奈達の視線は一斉にそちらへと向けられた。
悲鳴と同時に聞こえてくる、凄むような大声と破壊音。
突然の異常事態に華奈達の周囲に集まっていた人々は顔を見合わせ合い、ざわめき始める。

すると、突然。
スパァン、というしならせた鞭を地面に叩き付けるような音が響いたかと思うと、人々の上をふたつの影が通り過ぎていった。
３メートル程度はあった人垣を軽々と飛び越え華麗に着地してみせたのは、他ならぬ、華奈とパルス。
その人間離れした跳躍力に人々が驚く間も無く、２人は悲鳴の聞こえた方へと疾走する。
次いでフラットとカイリも同様に軽々と人垣を飛び越えて２人の後を追い、深冬と環も跳躍はせぬものの人垣の隙間をすり抜け、か弱そうな少女らしからぬスピードで駆けていった。

手入れの行き届いていない煤けた剣を振り回しながら大通りの商人達を襲っていたのは、商人達がこぞって「物騒になった」という原因のひとつ。
巷では有名な、盗賊の集団だった。

最近になって急激に規模を増した彼らは物騒になったと言われ始めるだいぶ以前からカヴェリーラ周辺に存在していた盗賊団で、普段は彼らの根城付近を通り掛かる旅人や商人を襲うことを生業としている。

無論、彼らを街の保安官が放っておく筈はないのだが、街の周辺に彼らの根城は点在しており、場所を嗅ぎ付けられそうになる度に移動を繰り返していた為、今まで捕まえることが出来ずにいたのだ。

そのうえ腕の立つ者も多く、保安官からもだいぶ犠牲者が出てしまっており、手を焼かされている。

そんな彼らに急襲され、立ち向かう術を持たぬ人々は逃げ惑い略奪されることしか出来なかった。

下卑た笑いを浮かべ、商人達が懸命に集めた商品を奪っていく盗賊達。

通報を受けて到着した保安官も、彼らに太刀打ちすることが出来ない。

彼らの略奪は、いとも容易く成功を収める――

――筈だった。

もはや彼らは、タイミングが悪かったとしか言いようがない。

１―９　示された道筋

盗賊のひとりが、美しい宝飾品を鷲掴みにして薄く笑う。
それから、逃げ遅れたゆえ自分に捕まり目の前に座り込んでいる女性に、ねっとりと絡み付くような視線を向けた。
「あ、あぁ……」
エスニックな格好をした宝石商のその女性、サーシャは、煤けた剣を喉元に突きつけられても為す術無く震えている。
見目の美しい彼女は、盗賊に略奪の対象と見なされてしまったのだ。
盗賊に略奪された女性の末路は総じて、彼らに好きなように蹂躙され、飽きられれば打ち捨てられるという悲惨なものでしかない。
目の前にある盗賊の下卑た顔。
逃げられないという現実。
ゆえに自分の末路を予想したサーシャの心中は、恐怖と絶望という色に染め上げられていった。
しかし。
彼女と盗賊の間に何かが滑り込んできたかと思うと、パァン、という小気味の良い音が響き、同時に盗賊が数メートルも上空に吹っ飛んだ。
弧を描くようにして吹っ飛んだ盗賊は彼女からだいぶ離れた位置に落ち、ぴくりとも動かなくなる。
白目を剥いてはいるが痙攣しているため、辛うじて死んではいないようだった。
「あーあー、こりゃあだいぶ手加減しないと息の根止まっちゃうなぁ……流石に殺人はまずいよなぁ」
彼女と盗賊の間に滑り込んできたものが……滑り込んできた人物が、ぽりぽりと後頭部を掻きながらひとりごちる。
目を見開いたまま盗賊の軌道を追っていたサーシャは、次に、目

の前に立つその人物へと視線を向けた。
殊更驚愕し、彼女は限界まで目を見開く。
「あ、あんた、昨日の……！」
「あれ？　宝石商のお姉さん？」
サーシャの声で振り返ったその人物に、彼女は見覚えがあった。
昨日言葉を交わし、自分の商品を買って貰ったばかりの少女であったのだ。
華奈というその名までは、サーシャには判らなかったが。
盗賊が吹っ飛んだ原因は、一瞬にして盗賊と自分との間に滑り込んできた華奈が繰り出した掌底による一撃だったようだ。
サーシャにとって、俄かには信じ難い話である。
見た目はか弱そうな自分よりも幼い少女が、筋骨隆々とした大の男を掌底一発で吹き飛ばしてしまっただなど……
「おい、ハルナ！　何をしている！」
突如聞こえてきた怒声で、サーシャは我に返る。
華奈はあからさまに不機嫌そうに眉を寄せ、怒声のした方向を睨み付けた。
「人助けに決まってんでしょ！　今戻るってば！」
華奈が怒声を返した先にいる人物にも、サーシャは見覚えがある。
昨日この目の前の少女と一緒にいた、彼氏らしき男性だ。
尤も、少女は思い切り否定していたが……と、そんなことはどうでも良く。
視線の先のその男性は、盗賊が複数人で襲い掛かってきているというのに、まるで相手にならないといった風にあしらっている。
目にも留まらぬ速さで、しかも的確に一撃で盗賊を気絶させているのにも関わらず、こちらの様子を気にする余裕まであるということがサーシャには信じられなかった。
「ところでお姉さん、あいつら何なの？」
サーシャが呆然としていると、自らがぶっ飛ばした盗賊を指差しながら華奈が尋ねてくる。

「あ……あいつらは、街の周辺に根を張ってる盗賊集団だよ。腕が立つ奴らだとかで、保安官も手を焼いてる……」
「ふぅん。じゃああたしは行ってくるから、お姉さんは避難してね」
「なっ！　ちょっと、行くって何しに行くんだい！」
ちょっとそこまでお出掛けしてくる、といった風の軽い口調で言いながら立ち去ろうとする華奈を、サーシャは思わず引き止めた。
華奈は振り返り、にんまりと笑う。
「ちょっくら盗賊さん達を退治しに、ね」
少女らしい、可愛らしい笑顔を残して立ち去ってしまった華奈を、サーシャは今度こそ引き止めることが出来なかった。

突如として現れ、目で追いきれぬような身のこなしで盗賊仲間を次々と倒してゆく若者達。
そのひとりと対峙した盗賊は、半ばやけくそのように剣を振りかざした。
が、次の瞬間に盗賊の意識は闇に落ちる。
鳩尾への一撃を喰らって昏倒したなどということは、知る由もなく。
盗賊をまたひとり昏倒させたカイリは、無様に地面へ転がっている盗賊を見下ろして小さく息を吐き出した。
「勝敗は見えたでしょう。逃げた方が賢明だと思いますよ」
呆れ笑いを浮かべながらそう言ったカイリの周囲には、１０名ほどの盗賊が得物を構えてにじり寄ってきている。
散々目の前の青年の実力を見せ付けられても彼らをそうさせるのは、人々を恐れ慄かせる自分達がこんな若者に馬鹿にされてなどいられないという、もはや意地でしかない。
腕が立つとはいえ他者と自分の実力の差を測れるほどの強者は、盗賊達の中にはいないようだった。

聞き苦しい雄叫びや怒声を発しながら一斉にカイリへと向かっていく盗賊達。
カイリは再び小さく息を吐き出し、体勢を低く構える。
盗賊達の振り下ろした得物はカイリを捕らえたかのように見えたが、ばたばたと次々に倒れていったのは、カイリではなく盗賊達の方だった。
先程の盗賊同様、自分が何をされたのかも判らぬままに。
「凄いね」
一息ついたカイリに、声が掛かる。
声の主は誰もが見惚れてしまいそうな程の柔らかい笑みを湛えつつ、鉄球付き巨大トンファーを構えた環だった。
彼女の構える得物はもはや気にしないようにしたらしいカイリの頬に、瞬時に朱が走る。
「いや、タマキさんの方が凄いですよ」
「本当にね……」
カイリの言葉に、周囲の盗賊をあらかた倒し終えて合流してきた華奈が同意した。
華奈の遠くを見るような視線は、石畳の地面に出来上がったクレーターのような陥没跡に向けられている。
言わずもがなそれは環が得物を地面に叩き付けた時に出来上がったもので、陥没跡の周囲にはその時の衝撃で吹っ飛ばされて昏倒した盗賊達が転がっていた。
しかも環は微笑を崩さぬまま得物を振り回していたのだから、恐ろしいことこの上ない。
「だが、殆ど片付いたようだな」
言いながら、華奈と同様視界に入った盗賊を倒し終えたパルスが合流してきた。
華奈は頷こうとするが、遠くの方からまだ剣を交えるような金属音が聞こえてくる。
面倒臭そうに、華奈はため息を吐き出した。

「全く、何処から湧いて出てくるやら」
「数だけは達者なようだな」
渋々といった風に、華奈とパルスはそう言って音の聞こえてきた方向へと駆け出すが、微妙に楽しそうな雰囲気は隠しきれていない。
「全く、気が合うのか合わないのか」
「本当だね」
そんな2人にカイリと環は苦笑を漏らし、同じ方向へと駆けていった。

怒声にも似た掛け声を上げながら、剣による猛攻を繰り出す盗賊のひとり。
長剣によるその猛攻を刃渡りが長剣の3分の1程度のダガーで軽々といなしているのは、深冬である。
仲間をことごとく倒された盗賊は、一矢報いてやろうと主に街人の避難誘導をしていた深冬に襲い掛かった訳なのだが、一撃で地に伏す筈だったか細いその少女が思いの他強く、盗賊の焦りと苛立ちは頂点に達していた。
そのうえ深冬が何やら難しい顔で盗賊の猛攻をいなすだけで反撃をしてこない為、余計に苛立つ。
遊ばれているとしか思えないゆえだ。
「こんの女アァァァァ！！」
ついに逆上した盗賊は、目の前の憎らしい女へ向けて渾身の力を込めた一撃を見舞おうと、己の得物を振り上げる。
だがその刃は深冬へと届くことは無く、得物を振り上げたままの格好で白目を剥いた盗賊は、深冬の脇をすり抜けて地へ伏した。
「フラットさん」
ぽつりと、深冬が呟く。
盗賊の代わりに深冬の目の前に立っていたのは……先程の盗賊を

沈めたのは、先程まで近くで別の盗賊の相手をしていた筈のフラットだったのだ。
「ありがとう。助かったかも」
「気にしなくて良いよ。ただ、1人で相手をするのが厳しいと思ったらすぐに助けを呼んだ方が良い」
ぽんぽんと、深冬の頭を軽く叩きながら、彼は言う。
深冬はきょとんとしてしばし彼を見上げていたが、傍目からでは苦戦しているように見えた自分を心配してくれていたのだということに気付いて、嬉しそうに微笑んだ。
「ん、判った。ありがとう。でも今のは、私の力でどうやったら一発で気絶させられるか考えてただけだから、大丈夫だよ」
「そうか。なら良いんだ」
深冬の笑みを受けて、フラットも微笑み返す。
すると、大通りの先の方から聞き覚えのある声が近付いてきた。
「深冬ー！　フラットー！　もしかしてもう片付いたー？」
声を上げ、片手をぶんぶんと振りながら2人の方へと走り寄ってくるのは華奈で、すぐ後ろにパルス、環、カイリも続いているのが見える。
深冬は華奈へ手を振り返し、続いて周囲へと視線を巡らせてみた。
どうやらフラットが先程沈めた男を最後に盗賊は片付いていたようで、周囲に動いている盗賊らしき者の姿は見当たらない。
代わりに、恐る恐るといった風に、避難していた商人や街人達が大通りへと顔を出し始めていた。
ばたばたとその辺りに倒れている盗賊達の姿を認めた彼らの表情からは恐怖の色が消え去り、代わりに歓喜と興奮という色に染め上げられていく。
何せ殆どが成人にも満たない若者達が、たったの6人で、しかも腕が立つと評判で保安官ですら手を焼いていた　盗賊達を軽々と倒してしまったのだから、人々が興奮するのも無理のない話だ。
華奈達の周囲から、喜びの声によるざわめきが沸き起こり始めた。

しかし。

「ひいいいいいぃ！！」

突如、悲鳴が上がったことで、人々の歓喜と興奮は一瞬にして再び恐怖へと塗り替えられていく。

人々が視線を向ける先、悲鳴の上がった場所には、2人の人間がいた。

ひとりは悲鳴を上げた主、街人であろう、ひ弱そうな老人。

そしてもうひとりは、震え怯えるその老人の喉元へ鈍い光を放つ曲刀を突き付けた、盗賊の男だった。

老人を人質とした盗賊は、華奈達を威嚇するかのように睨み付ける。

「テメェら、こいつを殺されたくなかったら動くんじゃねぇぞ……」

そう言いながら、盗賊の男はじりじりと少しずつ後退していく。

どうやら華奈達には敵わないと踏んだ彼は、老人を人質にして逃走するという策を選んだようだ。

だが街人を人質に取られるという現状を目の前にしても、華奈達は僅かばかりも動じない。

そのうえ……

「あらあら」

「まだ残ってるなんて、何ていうか生命力はゴキブリ並だね」

「状況というものも、理解出来ていないようですし」

「まあ冷静な判断が出来ないような状況だというのは、判らなくもないけど」

「そもそも、人質をか弱くて可愛い女性にしない辺りが根本的に間違ってるよね」

「いやそれはあまり関係ないと思うが」

……逆に盗賊を煽る始末である。

無論それは、盗賊がどう動こうとも何とか出来るという自信が彼らにはあるゆえだ。

尤も、盗賊にしてみれば腹が立つことこの上無いであろうが。
案の定怒りが頂点に達した盗賊は、老人の喉元に突き付けた得物を握る手に力を込める。
察した前線組４人は、すぐさま飛び出せるようにすぅっと腰を落とした。

……が、最も素早く行動を起こしたのは、深冬だった。
彼女は上着の内側へ隠していたクナイのような飛び道具を取り出し、射抜くような鋭い視線をぶつけると共にそれを盗賊へ向かって投げ付ける。
空気を切り裂く音を発しながらもの凄まじい勢いで盗賊の方へと向かっていったクナイは、華奈の頬をかすめ、盗賊の頬をかすめ、すぐ後ろの建物の壁へと突き刺さった。
瞬間、壁に幾つもの亀裂が走り、壁の一部が損壊してばらばらと地に落ちる。
突如として我が身を襲った恐怖により顔面を蒼白にした盗賊は、老人に突き付けた得物を取り落として気を失い、その場に倒れた。
ついでによほど驚いたらしい人質の老人もご一緒に。
盗賊が気を失ったことを確認した深冬は、先程までの鋭い視線はどこへやら、ぱぁっと可愛らしく表情を輝かせる。
「そっかぁ、こうすれば一発で気絶させられるんだね！」
心底嬉しそうに、彼女はのたまった。

「はるちゃん、生きてる？」
すぐに飛び出せるようにと構えた格好のまま動けずにいる華奈に、環が問い掛ける。
だらだらと冷や汗を流した華奈は、渇いた笑いを発するのが精一杯だった。

－＊－＊－＊－＊－＊－

「これで最後、かな」
浅く息を吐き出しながら、フラットは縄を掛け終えた盗賊のひとりを地面へ放り投げる。
華奈達がものの十数分で片付けてしまったおよそ５０人の盗賊達は、街人や保安官の協力もあって一箇所に集められ、身動きが取れぬよう全員が縄で縛り上げられていた。
ちらり、と、フラットは冷や汗を掻きながら斜め前方を見る。
視界の先では、何とか持ち直したらしき華奈と、深冬と環の３人が、盗賊のひとりをやたら楽しそうに取り囲んでいるところだった。
気絶したうえに縛り上げられて全く身動きの取れない盗賊は、哀れにも華奈達の遊び心の標的となっている。
「“私は愚かです”とかどうよ？」
「まあ、妥当だね」
華奈の意見に環が同意すると、深冬が盗賊の頭にペンを走らせた。
都合良く円形に肌が露出した……いや、華奈達の手によって円形に毛を剃られた盗賊（華奈達は“落ち武者”などと言って爆笑していたが、フラット達には意味が判らなかった）の頭頂部には、深冬の可愛らしい文字でしっかりと“私は愚かです”と書かれている。
フラットとカイリは「幾ら何でもそれはあんまりなのでは……」と一応止めてみたのだが、華奈曰く、「人様に迷惑を掛けまくった盗賊共には当然の報い」なのだという。
ついでに「毛根が無事な奴なら１ヶ月程度で落書きも見えなくなるって！」などと押し切られ、フラットは微弱に心を痛めつつも彼女達の行動を黙認することにしてみたのだった。
毛根が無事でない奴は一体どうすれば良いのだろう、などとカイリは思ったのだが、それは口には出さずにおく。
ついでにパルスはどうでも良いのか無視を決め込んでいる。

ちなみにこの時に深冬が書いた落書きを見て、環とフラットは何故か自分達が見たことも聞いたこともない筈の第三世界の言語の読み書きをあまりにも自然に出来ているということに気付いたが、さしたる問題でも無いと決め込んで、それも口には出さなかった。
恐らくは、精霊の恩寵を多大に得た影響の一端なのであろう。
別々の世界で生きてきた彼らが当然のように会話をすることが出来ていることも、然りだ。

「あの……」
華奈達があまりにも落書きに夢中になっていたゆえか、控えめに声が掛けられる。
6人共が声のした方へと視線を向けると、視線の先にいた声の主は、穏やかな雰囲気を纏った壮年の保安官であった。
成る程、これならば盗賊に手が出なかったというのも頷けると、失礼ながらも華奈はそう思う。
「いやでも人は見掛けによらないとか言うしなー」
「何の話だ」
ぼそりと呟かれた華奈の言葉にパルスが突っ込むが、2人の掛け合いはそれ以上は続かなかった。
「ありがとうございました。この盗賊達には前々から手を焼いておりまして……あぁ、本当に、何と言えば良いのか……」
壮年の保安官は、華奈達へ向かって深々と頭を下げる。
同時に、周囲に集まっていた街人や商人達からも、感謝の言葉が投げ掛けられた。
それは徐々に、華奈達を褒め称える言葉と、拍手喝采の洪水になる。
あまりの感謝のされっぷりと称えられっぷりに、深冬とカイリは照れまくって恐縮してしまった。
華奈は照れながらこめかみをぽりぽりと掻きつつも控えめに手を振って応え、騎士ゆえこういった状況には慣れているのか、パルス

とフラットは軽く頭を下げることで応える。
環は「あらあら」などと呟きつつ口元に手を添え、穏やかに微笑んだ。
やがて、周囲に出来上がった人垣の間から、2人の人間が華奈達の方へと進み出てくる。
ひとりは保安官の制服を纏った青年で、もうひとりは街人らしき中年の男性だ。
2人とも、手には何やら布袋と……中年の男性の方は、見覚えのある帽子を手にしている。
「これはせめてもの感謝の証です。どうか受け取ってください」
壮年の保安官がそう言うと、保安官の青年の方が、目の前に立つフラットへと布袋を差し出してきた。
受け取った際の感触で中身がお金だと……しかも相当な額のお金だと判ったフラットは、申し訳なさそうに壮年の保安官を見やる。
「私達は、これほどの謝礼を受け取れる程の行いをした訳ではありません。ですから……」
「いいや。盗賊達が街の周辺に巣食うようになって数年、我々では何とも出来ずにいたものを片付けてくださったのですから、これくらいは当然のことです。むしろ言葉などで謝意を表しきれはしません。どうか、受け取ってください」
フラットが布袋を返そうとするのを片手で制しながら、壮年の保安官は再度深く頭を垂れた。
そこまで言われては、返す理由も無い。
今後の路銀にも困っていたゆえ、フラットはありがたく謝礼を受け取ることにした。
フラットが保安官の布袋を受け取ると、今度は中年の街人の男が、彼の隣に立つパルスへと帽子を差し出す。
その中にも、小銭を中心にお金が詰め込まれていた。
「こりゃあお前さん達が忘れて飛び出してった、お前さん達の見世物に対する稼ぎだ。だがそれ以上に、良いものを見させて貰った。

ありがとうよ」
「こちらこそ、感謝する」
豪快に笑う男に、パルスは軽く頭を下げて謝意を表す。
そのやり取りを、華奈は不思議そうに首を傾げて見ていた。
「何だ」
華奈の様子に気付いたパルスが、小声で囁く。
中年の男とパルスが持った帽子を見比べながら、華奈は答えた。
「いや、慌てて飛び出してきたから稼ぎを放置してきたことなんて今思い出したんだけどさ。普通は路上にお金を放置なんてしてきたら、盗られても仕方ないでしょ？　でも、さも当然のように持ってきてくれたから。ちょっと感動していた訳よ」
「まあ、それはそうかも知れないが……これが普通だろう」
当然のように返ってきた言葉に、華奈は微かに目を見開く。
それから、心底嬉しそうに。
少女らしい可愛らしい微笑みを、その顔に浮かべた。
「そっか、普通か……そうだよね」
微笑みは一瞬だったがゆえに。
綺麗だなどと思ってしまったのは恐らく気のせいだと、パルスは思う。
その証拠に、一瞬後には「何か儲けた気分〜」などと言いながらはしゃいでいるし。
「やはり気のせいだな」
「？　何が？」
パルスの小さな呟きにフラットが反応するが、パルスはため息を吐きながら「何でもない」と答えた。

ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー

盗賊達の後始末は保安官と街人達に任せ、華奈達は喧騒を後にする。
現在彼女達がいるのは、大通りから外れた細い路地だ。
感謝されるのは嬉しいことだが、半時も揉まれていれば流石に疲れるというもの。
宴を催すから是非参加して欲しい、などと言われたが、旅に出なければならないという理由を付けて丁重にお断りしてきた。
「でも、旅に出るとか言っても、どこに行けばいいのかさっぱりですな」
「地図も買い損ねちゃったし……」
「路銀は確保出来たんだけどね」
6人全員が頭を悩ませる。
情報収集で一応は異変らしきものが起きているという地名が挙がっているが、行ってみてハズレであったら相当な時間を無駄にしてしまうのだから安易に決めることは出来ないし、そもそも地図が無いゆえ地名だけ判っても場所が判らない。
かと言って今から情報を集める為に大通りなどへ出てみようものなら、慌ただしく宴の準備をしている街人達に再度揉まれることは確定。
街人達のテンションも更に上昇しているし、出て行くのなら決死の覚悟が必要だ。
カイリに生贄になって貰うか、深冬の勘を頼りに進むか。
そのような物騒な考えに何人かが行き着いた時。
大通りから彼女達の方へ向かって何者かが走り寄ってくるのが見えた。
人影は3人。
その誰もに、華奈は見覚えがある。
うち2人はカヴェリーラへ入る前にすれ違った中年の男性商人達で、残りの1人は、エキゾチックな格好をした宝石商のお姉さんだ。
「おぉ、お姉さん達どうした……」

華奈が言い終える前に、走り寄ってきたお姉さん……サーシャは、正面から華奈を思い切り抱き締める。
うおおぉぉ凄い感触だーなどと華奈が戸惑いつつもエロオヤジくさい思考を展開していると、サーシャは少しだけ身体を離して華奈の目元に軽いキスを落とした。
「さっきはありがとうね。本当に、もうお終いだと思ってたんだよ」
「い、いやいや、当然のことをしたまでですよお姉さん？」
突然のことに華奈は驚くが、お姉さんなりの感謝の気持ちなのだろうと思うことにする。
流石に顔が紅くなってしまうことは禁じ得なかったが。
「ハルちゃん、その人は？」
華奈が顔を紅くするなどという珍しい光景を面白そうに見ていた深冬が、面白そうな笑みを湛えたまま首を傾げ、尋ねる。
そういえば自分とパルス意外はお姉さんが何者か知らなかったという事実に、華奈は初めて気が付いた。
「いやらしい盗賊に狙われる美しいお姉さん。それを颯爽と助けるワタクシ」
「情報収集をしていた時に会った宝石商だ」
「サーシャだよ」
無駄にきりっとした表情で言う華奈の補足として、パルスとサーシャ自身が言葉を続ける。
むしろそちらの方がメインの説明であるような気がするが。
「どうしてもお礼が言いたくてさ。探したよ」
「それに、何か異変についての情報を聞きたがっていたんだろう？足しになればという情報があるんだ」
サーシャの後に、商人の男のひとりがそう続ける。
6人全員が反応し、男の方を見た。
「……それは、どのような？」
フラットが先を促す。
「ヴァレンティーネという街がある。水の都と呼ばれ、潤っていた

街だったんだが……最近あれだけ湧き出ていた水が沸かなくなって、周囲の大地が干からびてきてしまっているらしい」
それは今まで聞いてきた情報の中で最も内容が明確なものだった。
しかも“水”や“大地”といえば世界を統括する６大精霊の属性にあたるゆえ、信憑性も高い。

「ヴァレン、ティーネ……？」
ぽつりと、深冬が呟く。
神妙な面持ちゆえ環が声を掛けようとした、その瞬間。
深冬は突然、頭を抱えてしゃがみ込んだ。
「ちょっ……深冬！」
「深冬ちゃん、どうしたの！？」
サーシャの腕をやんわりと解いて、華奈は深冬の元へと駆け寄る。
深冬は何かに耐えるようにしてしっかりと目を瞑り唇を引き結んでいたが、程なくして目を開くと、助け起こそうと差し出されたフラットの手に掴まりながら、ゆっくりと立ち上がった。
「ミフユ……？」
助け起こしながら、フラットは心配そうに深冬の顔を覗き込む。
深冬は申し訳なさそうに、苦笑を浮かべていた。
「突然ごめんね。でも……」
「でも？」
「そこに、行かなくちゃいけないような気がする。ううん、行かなくちゃいけないの。誰かが、私を呼んでる」
確信めいた口調で、深冬はきっぱりとそう告げる。
華奈達は神妙な面持ちで顔を見合わせ、小さく頷いた。
深冬が何かの声を聞いたというのなら。
それは深冬に加護を与える、精霊の誰かの声なのかも知れない。
行き先、決定だ。
「あんた達、何なんだい？　身のこなしといい……ただの旅芸人じ

ゃあないんだろう？」
華奈達の様子を半ば呆然と見ていたサーシャが、ようやく我に返って口を開く。
興味深々といった様子で答えを待つ彼女達に向かって、華奈達は言った。
「んー、強いて言うならちょっと腕が立つ一般人？」
「お前意外は一般人だな」
「何だとこの野郎」
「まあまあ、２人とも。痴話喧嘩は後にして」
「「痴話喧嘩なものか」」
「あれー？　旅芸人路線はどうするの？」
「……ま、まあ、そんな感じですので」
「あんまり気にしない方が良いと思いますよ」
最後に環が締めると、サーシャ達は思わず苦笑を漏らす。
彼女達の正体は気になるところだが、どうやら深く追求しない方が良いらしい。
「じゃあ、自称一般人さん。これはアタシからの感謝の印。どうぞ受け取っておくれ」
苦笑もそのままに、サーシャは手に持っていた何かを華奈の首に掛ける。
しゃらん、と澄んだ音を立てるそれは、３本の銀のチェーンが連なり、青い宝石達が散りばめられたデザインの、大層なお値段だった筈の首飾りだった。
華奈は思わず焦る。
「んなっ、お姉さん、こんな高いの貰えませんって！　似合わないし！」
「そんなことはないさ。それに、感謝の気持ちは素直に受け取るもんだよ」
首飾りを外そうとする華奈だが、サーシャは笑顔でそれを制した。
貰っておくしか無さそうな雰囲気なので、華奈は素直に礼を述べ

ておく。
　すると、その光景を笑顔で見ていた商人の男2人が、背負っていた大きな荷物を地面へ降ろした。
「さて、じゃあ俺達も……」
「えぇ！？　このうえまた何かくれるとか言ったら流石に困りますよ！？」
「まさか。そんな訳はないだろう」
　もの凄く明るい口調で返され、華奈達は首を傾げる。
　男達はにんまりと、商売人の顔を浮かべた。
「あんた達、旅してるんだろう？」
「情報提供したお礼に、何か買うのは当然だよな？」

　少しの間の後、華奈達は総じて苦笑を浮かべる。
　第三世界の商人達は、なかなかに強者揃いのようだ。

2―1　水の都

「野宿って疲れるなー」
「何言ってるのハルちゃん。熟睡して寝言まで言ってたくせに」
「えぇっ！？　何て言ってたあたし！？」
「“ラーメン”って言っていたよね？」
「“らーめん”とは何ですか？」
「ラーメン。それはあたし達の世界の、至高の食べ物を指す単語である」
「至高って……ラーメンを買いかぶりすぎだよハルちゃん」
「いいや、ラーメンを侮るな」
「……所詮は食い気か」
「何か言ったかそこの黒いの」
地図を手にしたフラットを先頭にして、華奈達は他愛の無い言葉を交わしながら美しく整備された道を行く。
ちなみにこの地図、カヴェリーラの街を出る際に2人組の中年男性商人にしっかりと買わされた品である。
商人達はなかなかの商売上手で、他にも出発の前日に買い揃えることの出来なかった寝具類や旅の必需品など、様々なものを買わされた。
ストッパーの深冬が居なかったら、危なく更に色々と買わされていたところである。
商人の口車に乗せられそうになる一同（主に華奈）に対し「それは、本当に、必要なの？」という半ば殺気の込められた彼女の言葉が、一体何度飛び出したことか。
……と、それはどうでも良い話であるが。
「そろそろ見えてくる頃でしょうか」
地図を覗き込みながら、カイリが呟く。

カヴェリーラを発って2日。
歩いた距離を考えると、目標としているヴァレンティーネへ到着する頃合である。
「きっともうすぐだよ」
何気ない口調で、深冬が言った。
だがその言葉は強い確信の意を含んでいる。
深冬曰く、ヴァレンティーネへと近付くにつれて、時折感じる彼女を呼ぶ気配が徐々に強くなってきているのだという。
深冬へと加護を与える精霊がその近くへ封印されていて、助けを求めているのかも知れない。
というのはフラットの言だが、言葉には出さずとも、全員が自然と同じ考えを抱いていた。
「見えてきたね」
遠くに見え始めた街並に、環が目を細める。
遠くゆえまだ霞んで見えるが、その街並は商人達から聞いたヴァレンティーネの特徴によく似ていた。

白い石畳に、白と青を基調とした美しい建物の数々。
美観を損ねないようにと整備された街並。
街の至るところに設置された噴水からは常に澄んだ水が溢れ、街に隣接する湖セオフィラスは、神聖ささえ漂わせながら存在している。
それが、聞いていたヴァレンティーネの特徴である……筈であった。
街の入り口付近で、華奈達は思わず立ち尽くす。
「水の都……か」
誰にも聞き取れぬような声音で、パルスがぽつりと呟いた。

いや、パルス以外の者も、思わずそう口に出してしまいそうな心境であったに違いない。
目の当たりにしたヴァレンティーネの、白と青の街並は確かに美しい。
だが誇らしげに点在する噴水からは水など一滴も溢れておらず。
更には、聞いた話によるとヴァレンティーネは観光の名所として常に静かな賑わいを見せている筈なのだが、街中からは活気というものが全く感じられなかった。
ちらほらと見受けられる人影は街人か。その表情も、どことなく沈んでいるように見える。
どうしたものか、と。
誰もが思案していると、ふと、深冬が何処かへ向かって歩き出した。
「深冬？」
華奈が呼び掛けるが、返事は無い。
仕方なしに走って追い掛けてみると、深冬は珍しく厳しい表情を浮かべて何処か一点を見つめていた。
視線の先が、彼女が目指している場所なのだろうか。
尚も無言で足を進める深冬に、華奈達は続いた。

「何か夏の日照りで干上がりそうなあたしん家の近くの池みたいだ……」
深冬が足を止めた先に広がっていた光景に、華奈は思わず呟いた。
目の前にあるのはヴァレンティーネの観光名所のひとつである、街に隣接して存在する湖セオフィラス。
……の、筈なのだが。
視界を埋め尽くすほどに広大なセオフィラスは、全くもって華奈の言葉通りの状況に陥っていた。

全く水が無い、という訳ではないのだが、美しく神聖な湖面を湛えている筈のセオフィラスが枯渇寸前であるという事実は一見しただけで明らかである。
これが、精霊が封印されることによってもたらされた影響なのだろうか。
話に聞いた神聖な湖面を湛えていれば、さぞ美しい湖だったであろうに。
枯れかけた湖を眺めながら、華奈達は眉根を寄せる。
「ミフユ、湖から何か感じる？」
ここまで終始無言だった深冬は、フラットの言葉を受けて首を横に振った。
湖からは、悲痛な気配しか感じない。
この場所へと足を運んだのは、ただ、何となくここへ来なければならないような気がしたからだった。

だが、ふと考える。
精霊が封印された影響は第一世界にも必ず現れる、と、デルヴィスは言っていた。
そうなった時に起こり得る状況を、精霊は自分達に見せたかったのではないだろうか。
……そして恐らくこれは、状況としてはまだ軽度な方だ。
確信めいたその思いに、知らず、深冬は唇を引き結んでいた。

「ここに何もないとなると……どこへ行けば良いでしょうか」
「うーん……多分こっち、かな」
悲痛な表情を湖へと向けたまま呟かれたカイリの言葉に応え、深冬は再び歩き出す。
彼女の感覚は、未だ途切れた訳ではないようだ。
その感覚を頼りに進むしか今は方法が無いゆえ、華奈達は再び深冬の後へ続いた。

街の中でも一際大きく、そして美しい建物の前で、深冬はようやく足を止める。
位置的には街のおよそ中心であろうその場所に鎮座する、円形の浅い堀に囲まれた建物。
それを呆然と見上げる華奈達の脳裏には“教会”やら“神殿”やらといった単語が浮上していた。
街の基調色である白の石壁に青の屋根という造りは清涼感を漂わせ、正面入口であろう観音開きの扉は青銅で造られ、程好く重厚さをも醸し出しているが、威圧感は無い。
扉の上の方には、円形のステンドグラス。
モチーフが何なのかは判らなかったが、描かれているのは女性だ。
やはり青を中心に彩られ、美しく陽の光を反射するそれは、妙に華奈達の心を惹き付ける。
だが。
街の雰囲気と同様、やはりこの場所もどこか寂然としていた。
「ここに何かあるのか」
全員が無言で建物を見上げるだけという状況を見かねてか、パルスが口を開く。
深冬は口元に手を宛がい、首を傾げた。
「何かある……ような気はするんだけど、自信は無いかなぁ」
「んー、じゃあ、とりあえず入ってみる?」
言いながら華奈は前へと歩み出て、閉ざされていた扉を軽く押し開いてみる。
……が。
その瞬間目に入ったモノから視線を逸らし、再び扉を閉めた。

中が見えなかったゆえ華奈の行動の意味が判らない他の者達は、不思議そうに首を傾げる。
「ハルナさん、どうしたんですか？」
「入るんじゃなかったのか」
「いや、駄目だ。ここに入っちゃ駄目だ」
嫌な汗をだらだらと流した華奈は、ぶんぶんと首を横に振りながら後退してきた。
「な、何かあったのハルちゃん？」
「何かっていうか青白い物体っていうかあれに捕まったら呪われるっていうかえぇいもうとにかくここを離れ……」

ギイイィ。

と、華奈の言葉を遮るようにして内側から扉が開かれる。
その、あまりにもホラーな音を立てたため思わず全員が注目してしまった、ようやく人が通れるか通れないか程度に開かれた扉の奥の暗闇からは。

……やたらと痙攣した青白い手が這い出てきた。

「「「！！！？？」」」
突如として襲い掛かってきた恐怖映像に声にならない声を上げ、華奈と深冬は凄まじい勢いで他の者の背後に避難する。
盾にされたパルス・フラット・カイリも、思わず己の得物に手を掛けて身構えた。
人間には為し得ないような動きで華奈達の方へ迫ってくる青白い手。
軋んだ音を立て、ゆっくりと開かれていく扉。
広がっていく暗闇の中に浮かび上がる、伸ばされた手よりも更に青白い死霊の顔。

あぁーもう駄目だ呪われる、と、何人かがあまりの恐怖に諦めの境地へ立たされる。
しかし。
「みんなどうしたの？　この人、普通の人間だよ？」
ふんわりといつもの微笑を湛えながら、環が言った。
「……はい？」
思わず聞き返し、涙目になっていた華奈は恐る恐る盾にしていたパルスの後ろから顔を出してみる。
……が、扉の隙間から半分ほど出ているモノを見てやはり視線を逸らした。
具合が悪いとかそういうレベルではない青白い肌。
死んだ魚よりも淀んだ虚ろな眼差し。
何だかやたらと痩せ細っている身体。
一応人間の形をしているようには見えるが、アレのどの辺りが普通の人間なのかを激しく問い詰めたいと華奈は思う。
「こんにちは。お邪魔しています」
「……こんにちは。ようこそ」
だが環は、ソレに対して平然と挨拶をしている。
ソレも、（環を含め）初対面で相当失礼な態度を取られたというのに何だか普通に挨拶を返しているし。
もしかしたら本当に普通の人間なのかも知れない。
そう思い直して、華奈と深冬は逸らしていた視線を戻してみた。
「……参拝の方でしょうか」
ずるずると半端に開いた扉の隙間から這い出ながら、その男性（？）は尋ねてくる。
出来ることならば極力しゃきっと出てきて欲しかったが、自分達の態度も流石にアレだったので、華奈達はなるべく気にしないよう努めることにした。
視界にさえ入れなければ、きっと怖くない。きっと。
「えぇと……私達はこの辺りに来るのは初めての旅の者です。ここ

は参拝をする場所なのですか？」
「ええ。ここは水の精霊を祀る神殿ですから」
ようやく普段の冷静さを取り戻したフラットの質問に、男性は淡々と答える。
“精霊”という単語の出現に、華奈達の目の色が変わった。
よくよく見れば、男性は（外見はホラーだが）涼やかな水色と白のローブに身を包んでいる。
ここが精霊を祀る神殿だというのならば、この男性は神殿へ仕える神官なのかも知れなかった。
「現在は、まあ……街もこのような状態ですので神殿も閉鎖してしまっておりますが。
ですが、遠くからいらっしゃったのでしょう。宜しければ中をご覧になって行かれますか？」
物悲しげにそう言ってから。
意外にも片手で力強く扉を押し開け、男性は華奈達を神殿の中へと招き入れる動作をする。
華奈達は顔を見合わせて。
「良ければ、是非」
そう答えると、男性の後に続いて神殿の中へと足を踏み入れた。

神殿の中は広く、寂然としたその空間に足を踏み入れた者達の靴音を酷く反響させた。
「ふわ～……」
ぽかんと口を開けて、華奈は高い高い天井を見上げる。
外観と同様に神殿内部も白を基調とした造りで、天井は所々がステンドグラスになっていた。射し込む青い陽の光に、目を奪われずにはいられない。
薄暗い神殿内を照らす唯一の照明であるその光は、どのような仕組みになっているのか、時折揺らめく。
青い光の揺らめきは神殿内の白い壁に如実に描き出され、まるで、

澄み渡った海の中にでもいるような気分にさせてくれた。
「綺麗」
華奈と同様に天井を見上げた深冬が呟く。
環も、パルス達も、声には出さずともその美しさに感心していることは明白だった。

やがて、空間に反響していた靴音が止まる。
先頭を歩いていた者が足を止めたのだ。
「どうです、美しいでしょう。この神殿は精霊の棲むと言われる湖セオフィラスを模して造られているのですよ」
華奈達を神殿内へと招き入れてくれた男性神官は振り返り、微笑みながら解説してくれる。
が、華奈と深冬はその微笑を直視できず、思わず目を逸らしてしまった。
男性神官の顔がホラーゆえ微笑まれても恐怖しか感じない。
更に異常に青白い顔が揺らめく青い光に照らし出されているものだから、2人にとっては殊更恐怖映像と化しているのだ。
折角感動していた気分が台無しである。
「本当に、美しいですね」
応えたのは、唯一平然としている環だ。
こんなことで痛感するのも何だがタマちゃんは偉大だ、と、華奈は思う。
「そうでしょう。普段であれば毎日のように参拝の方々がいらっしゃって、賑わっているのですよ。しかし、先程も言いましたが現在は街がこのような状況ですし……
神官長のシュゼット様も行方不明となってしまわれたので、閉鎖となってしまいました」
「行方不明？」
男性神官の言葉に、フラットが喰らい付いた。
パルスとカイリの目の色も変わる。急に険しくなった雰囲気に、

華奈達は首を傾げた。
「ええ……街が枯れ始めた頃……10日ほど前からでしょうか。ヴァレンティーネで、行方不明者が続出するようになったのですよ。
被害者はシュゼット様を始め、老若男女を問わず様々です。聞くところによると、ヴァレンティーネだけではなく世界規模で謎の行方不明者が続出しているとか。
あなた方がどちらからいらっしゃったのかは判りませんが、そういった噂は？」
「いや」
「そうですか……」
再び、神殿内に一人分の靴音が響く。
華奈達が視線だけで男性神官の姿を追うと、彼は神殿の最奥、祭壇のある場所へと向かっているようだった。
数段しかない階段を彼は上り、祭壇の中心にある水晶のような美しい球体に手を翳す。
水晶は一瞬煌き、次の瞬間、己の上空の空間に何かを映し出した。
「うおぉ」
華奈が思わず声を漏らす。
映し出されたのは神殿の雰囲気に相応しい、絶世の、と言っても過言ではないほどに美しい女性であった。
ゆるやかに波打つ長いプラチナブロンドの髪に、白磁の肌、神殿内を照らす青と同じ色の、伏し目がちだが大きな瞳。
男性神官と似通った水色と白のローブも、彼女が纏っていると一層涼やかで、神々しくすら見える。
「……神官長の、シュゼット様です。念のためお聞きしますが、ここへいらっしゃる途中、このような方を見掛けたりなどは……」
「悪いが、見覚えはないな」
「こんな美人さん見掛けてたら、絶対に忘れないもんねぇ」
一抹の望みを含んだ男性神官の問いを、パルス達は切り捨てた。
事実見覚えが無いのだから、そう答えるほか仕方が無かった訳で

あるが。
「……そう、ですか……」
男性神官の表情が、みるみるうちに沈んでいく。
元が元なので、それはもう目を合わせたら呪い殺されんばかりの表情だ。
だが、顔の恐ろしさは置いておくとして、主が突然姿を消してしまった不安と悲しみは相当のものであろうことは理解できる。
気落ちする男性神官へどう声を掛けたものか、と。
華奈達が思案していると、ぽつりと、彼が呟いた。
「あぁ、私のシュゼット……一体何処へ消えてしまったというんだ」
全員が首を傾げる。
今“私の”とか聞こえたような気がするが、幻聴であろうか、と。
「私の？」
可愛らしく首を傾げたまま、環が問う。
男性神官は水晶が映し出す映像を見上げたまま、のたまった。
「シュゼット様は……いえ、シュゼットは……
私の、婚約者なのです」

「え、えええぇぇぇぇ！！？」

華奈達は、それはもう目玉が飛び出さんばかりの勢いで驚いた。
最も、環に限り“あらあらそれはとても素敵なことねぇ”といったごく普通の驚き方だったが。
「う、嘘だぁ」
天上人のようなそれはもう美しい女性と冥界の住人のような男がどこをどう間違って婚約者なのか、と。
俄かには信じ難かった華奈は、思わずそう漏らす。
その言葉に激しく反応した男性神官はぐるりと首を廻らせて華奈を見た。
「嘘なものですか、失敬な！　私とシュゼットは神殿内公認の仲な

のですよ！
“ホリスのそのいたたまれなさが好きよ”とはにかんだ笑顔で言ってくれた彼女の可愛らしさといったらそれはもう妖精か天上人かといったところです！
えぇ、確かにいち神官と神官長とでは立場が違うということなど重々承知していますよ！　けれど！！　それでも良いのだと彼女は月夜の美しい晩に私の部屋のテラスで……」
カクカクと訳の判らん動きをしながら、男性神官は祭壇上にて声高らかに演説を始める。
ガンを飛ばされた（ように見えた）華奈は、環の後ろに避難して恐怖に打ち震えた。
「あらあら。はるちゃん、何か変なスイッチでも押しちゃったみたいだね」
「こ、怖い……あの人ひたすら怖いよ……」
「と、とりあえず、神官さんの名前はホリスさんっていうみたい」
「どうでも良い情報だな」
「あの様子だと婚約者というのも本当のようですね」
「それも割とどうでも良いかな……」
演説が止まりそうもないゆえ、一同はひそひそとそんな会話をしながら数歩後退して避難する。
「てか、いたたまれなさが好きってどうなのよ……」
「シュゼットさんも結構アレな人なのかな」
「あら、身分違いの恋で結ばれたなんて、素敵じゃない？」
「身分どうこうという話ではなかったと思うが」
「人間って不思議な生きものですね」
「まあ、趣味嗜好は人それぞれだからね」
好き勝手言いながら後退を続け、一同は神殿の出口付近へと辿り着いた。
もういっそのこと放っておいてここを出てしまおうか、と、全員の心境が一致する。

だが、ふと。
先程のことが気になっていた華奈が、パルス達に向けて問い掛けた。
「そういえば。行方不明について、何か知ってるよね？」
ぴくりと、彼らの表情が微かに強張ったのが判る。
「そう、だね……」
答えはするものの、言い辛そうに濁される言葉。
「……パルス。フラット」
「ああ。今後協力してもらううえで、知っておいて貰った方が良いだろう。そもそも、その点で一番危険なのは俺達だ。だが……」
ちらりと、パルスが祭壇上で未だ奇妙な動きと演説を続けるホリスへと視線を送ると、フラットとカイリが微かに頷く。
釈然としない彼らの反応に華奈達は首を傾げるも、どうやら話して貰えない内容ではないらしいことは理解出来た。
ただ、場所が悪いということか。
「じゃあ、とりあえずここを出ましょう」
環の進言に全員が同意し、パルスが扉へと手を掛ける。
その時。

「……っ！」
深冬が頭を抱え込み、その場へとうずくまった。
全員が深冬の元へと駆け寄る。
「ミフユ……」
フラットの手を借りながら、深冬はふらふらと立ち上がった。
「来たんだね、電波が」
「うん。電波ではないけど、来たよ」
片手で頭を押さえたまま、深冬はこくりと頷く。
そして、今までで一番明確に伝わってきたイメージを反芻する為に、目を閉じた。

「セオフィラスを挟んで、少し向こう側。切り立った崖がある場所に、人の目に付かない洞窟があるの。
その一番奥に……精霊が、封印されてる」
精錬された装飾品のような美しさで。
けれども今にも崩れ落ちそうなほどの儚さをも含んで。
洞穴の最奥、水晶の中で眠りに付く美しい精霊の姿が、深冬の脳裏にははっきりと見えている。
悲痛なまでに助けを求め続ける様も、はっきりと伝わってくる。
ゆっくりと、瞳を開いて。
「行こう」
力強い口調で深冬は言った。
「……お待ちください」
青銅の扉を押し開き進もうとする華奈達を、正気に戻ったらしいホリスが呼び止める。
振り返ると、彼は神妙な面持ちでこちらを見据えていた。
「精霊、と。今、仰いましたね。あなた方は一体何を……」
懐疑の眼差しを向けてくるホリスに、深冬は柔らかい笑みで返す。
そして、一言だけ、彼に対して言葉を掛けた。
「大丈夫。街はきっと元に戻りますよ」

2―2　魔法陣のつくりかた

部屋の片隅にうずくまり、やたらと疲弊し切った表情を浮かべる者がひとりいた。
彼はここ3日間、理不尽に己へと向けられる視線にひたすら耐え続けている。
視線は彼にとって、いつ終えるとも知れぬ拷問に近かった。
だがそれに負けてしまえば、恐らく元の世界へは戻れない。
ゆえに彼は強靭でもない心を必死で奮い立たせ、ひとりで戦い続けているのだったが。
現在、理不尽な視線の主は不在。
彼にとって数少ない休息の時間である。
「……戦士の休息ってやつかな……」
「茅斗先輩は戦士向きの肉体ではないと思いますが」
口から魂の抜けかけている茅斗の呟きに、びしりと突っ込みが入った。
容赦なく突っ込んだのは無論のことながら愛花である。

突然の別の世界での目覚めから3日が経つが、ここ、敵の居城の地下牢では、特に変化もなくただ時間だけが経過していた。
変わったことといえば、元々細い茅斗が更に幾らか痩せた気がすることと、暇だから娯楽をよこせーと弥鷹達が騒ぎまくった結果として本棚ひとつ分の書籍を獲得したことくらいである。
見張りは相変わらず茅斗の心労の元であるユーグベルだ。
しかし彼は常に弥鷹達を見張っているという訳ではなく、時折誰かに呼び出されてはしばしの間席を外し、その間は代わりに彼らの従属である魔物が見張りに立つ。
想像上の生きものでしかなかった異形の魔物を目の当たりにして弥鷹達は戦慄したが、流石に3日目ともなると慣れるものだ。

現在も鳥の身体に人間に似た顔を持つハーピィという魔物が数体見張りに立っているが、やたらと目付き悪いなー、などという感想くらいしか出てこない。
と言うより、茅斗としてはもはやユーグベルに見張られてさえいなければもうどうでも良くなっていた。
「それにしても茅斗先輩、あの視線によく耐えてますよね」
「あぁ、まあね……」
「でも大丈夫。見られたくらいじゃ死にませんから」
「いや、充分死にそうなんだけどな……」
人間はストレスで死ねる。
そう心の中で呟きながら、茅斗は励ましているのか何なのかよく判らない愛花の言葉に何とか応える。
愛花はそんな茅斗に哀れみを含んだ視線を向け、優しく優しく言葉を紡いだ。
「先輩、可哀想に……せめて奴がいない時くらいは、本でも読んで気晴らししてみたらどうですか？」
「本……なんてあったか？」
本という単語に、茅斗は興味を示して顔を上げる。
活字でも漫画でも本を読むことは好きな茅斗にとって、非常に魅力的な言葉だ。
「はい。先輩は奴と目を合わせないことに必死で気付いていなかったみたいですけど。娯楽をよこせー！　と皆で騒いでみたら、件のユーグさんが本棚ひとつ分の書籍を支給してくれたんですよ」
ほら、と、愛花は牢屋の隅に鎮座する立派な本棚を指す。
見れば、弥鷹達も本棚の近くに座り込んで本を開いているようだし、愛花も一冊の本を抱えているようだった。
確かに本に集中していれば少しは気が晴れるかも知れないと、茅斗は思う。
むしろ本の世界にでもトリップしていないと今後この環境の中で正気を保っていられる自信が無い。

「そうか……諏訪は一体何読んでるんだ？」
茅斗がふと尋ねると、愛花は満面の笑みで抱えていた書籍を差し出した。
“淡光花の園の男と男　～陵辱編～”
本の表紙には、第三世界の言葉でそのように書かれている。
「……」
嫌な予感というかむしろ確信をして、茅斗はそっと書籍から目を逸らして沈黙した。
「……内容、聞きたいですか？」
「……いや、いい」
「主人公の男性は、それは見目麗しいものの普通の村人なんです。でもある日、大罪人と間違われて牢屋に入れられてしまいます」
「諏訪……」
茅斗の拒否を爽やかに無視し、愛花は本を開いてやたら生き生きとあらすじを語り始める。
「でもそれは、主人公に心奪われた保安官である牢番……あ、勿論男性ですよ？　が、主人公に近付くために仕組んだことだったんです。傷心の主人公に優しい言葉を掛け必死に彼の心を掴み取ろうとする牢番。牢番の優しい言葉によって心癒されていく主人公。そうして惹かれ合ってしまった2人は、やがて淡光花の咲く場所で……」
「……」
物語も佳境に差し掛かる頃になると、茅斗はもはや言葉を成す気力すら無くしているようであった。
というより、明らかに本の世界ではない何処かへトリップしかけている。
「おーい、愛花。それぐらいにしてやらんと茅斗先輩本当にくたばるぞー」

遠目で茅斗がいじられる様を見ていた弥鷹だが、同じ男としてちょっと気の毒に思えてきたのでちらりと助け舟を出してみる。
どうやら茅斗の反応に満足したらしい愛花はぱたりと本を閉じ、魂の9割が口からはみ出ている茅斗をひきずりながら弥鷹達の方へ戻ってきた。
「どうも済みません。茅斗先輩があまりにもいじり甲斐があるもので」
弥鷹達の元まで来た愛花は茅斗をそこら辺に放り投げ、彩瀬の隣へと腰を下ろす。
彩瀬を挟んで愛花の反対側へ腰を下ろしていたシャスタは、魂がはみ出ている茅斗を見て「仲が良いのですね」などとのたまい非常に微笑ましそうな笑みを湛えていた。
王子は王子で強者かも知れない、ということを、弥鷹はぼちぼち理解しつつある。
アク強いのばっかりかよ、と、自分のことは棚に上げて弥鷹は心の中で突っ込んだ。

「そういえば」
弥鷹がどこか遠くを見るような目付きをしていると、ぽつりと、彩瀬が呟く。
彼女はシャスタの方を見て、続きを口にした。
「今更かもしれないですけど……あのオバサン達、どうして未だにシャスタ様を牢屋に入れたままにしておくんですか？
魔法陣とか言っていたような気がしますけど、それって完成までにそんなに時間の掛かるものなの？」
確かに3日も共に過ごしておいて今更な問いではあるが、ようやく環境にも慣れ、そうした質問が出来るほどの精神的余裕が出てきたということでもあるのだろう。
環境に慣れる、とは言っても、風呂もトイレもあれば着替えも食事も出てくるという、牢屋であることと見張りがいることを除けば

全くもって快適な環境ではあるのだが。
ひくり、と、微かにシャスタの眉が動き、彼はゆっくりとした動作で開いていた書籍を閉じる。
しばし逡巡してから、彼は弥鷹達に視線を巡らせた。
「結論から言うと、復活の魔法陣を描ききるのには相当の時間が掛かるでしょう。魔法陣は複雑かつ巨大なものです。描くこと自体にも時間を要しますし……
描く為の道具を集めるのにもかなりの時間が必要でしょうね」
「道具？」
「ええ。強力な効力を持つ魔法陣を描こうとする場合、膨大な魔力を持つ魔術具で描かなければなりません。本来であれば何百年も掛けて魔力を練り込んだインクなどを使って描くのです」
「何百年！？」
愛花が思わず声を上げる。
気の遠くなるような話だ。
「でも、本来ならってことは、あいつらは別な方法で描こうとしてるってことなんだろ？」
なかなか鋭い弥鷹の言葉に、シャスタは頷いた。
「ヴィレイスと共に封じられた筈のあの者達が封印の綻びから復活を果たしたのが、ほんの二百日ほど前です。あ　の者達は主の早期復活を望んでいる。
ならば、取れる手段は二つです。ひとつは、全ての精霊の協力を得て、必要な魔術具を精製して貰うこと」
「でもそんなこと、精霊さんが許す筈ないですよね？」
こくりと、彩瀬の言葉に頷いてから、シャスタは続きを口にする。
「三つの世界を己のものにせんとする者の復活など、精霊が許す筈がありません。あの者達も期待はしていなかったでしょうが、協力が得られないことを知ると精霊を封じ、最後の手段を取ることにしたようです。
或いは……初めから、そのつもりでいたのかも知れませんが」

「その最後の手段ってのは？」
「既存するもので一番確実な魔術具を、あの者達は集めているのです。
……精霊の加護を受ける者達の、血を」
弥鷹達は一瞬、言葉を失った。
血を集める、とは、一体。
「……血って」
「言葉通りの意味です。あの者達は第三世界で、精霊の加護を高く受ける者達を攫い、その血を使って、魔法陣を描いているのです」
ざわり、と。
嫌悪感がせり上がってくる。
「ですが、幾ら高い加護を受けるとはいえども、一人分の血で描ける量などたかが知れています。その所為で完成までには相当の時間が……」
「待って。血を使うって……まさか、殺されちゃうの！？」
青ざめた顔を歪め、彩瀬が言葉を荒げた。
シャスタは頷きはしないものの、辛そうに眉根を寄せ、俯いてしまう。
「……いいえ。攫われた者達は殺されることはありません。魔法陣を描くのに使用した血の持ち主の生命が絶えれば、折角描いた魔法陣の効力が失われてしまうからです」
「じゃあ……」
「ですが」
今度はシャスタが、彩瀬の言葉を遮った。
その表情は、先程よりも殊更辛そうなものになっている。
「魔法陣の発動というのは、発動させる為の代価として相応の魔力を捧げるということ。魔法陣に捧げられた血の持ち主の命は、魔法陣の発動と同時に失われるでしょう。
発動の最後の鍵である、私の命と、共に」
ざわり、ざわり。

嫌悪感を通り越して、弥鷹達の中に怒りが湧き上がってきた。
比較的平和な世界で暮らしてきたゆえ、話を聞いただけでは現実のものとして受け止めきることが出来ていないのかも知れないが。
現実になったとすれば、それがどの世界でも許され得ることでは無いということは、理解出来る。
「って、ちょっと待て。ナントカが復活したらお前も死ぬのか」
ようやく顔を上げたシャスタは、こくりと首を縦に振った。
そんな、と、彩瀬は泣き出しそうな顔をする。
「……ですが、私の命などどうでも良いのです。それより」
「どうでも良くはないでしょう」
シャスタの言葉に、愛花がぴしゃりと突っ込んだ。
少しだけ目を見開いて、シャスタは愛花を見る。
「あなたの命をどうでも良いなんて言ったら、あなたを助けようとしている人達に失礼です」
話を聞いたことによる怒りの所為もあるのだろうが、愛花は厳しい表情でシャスタを見据えていた。
それでもシャスタは少し嬉しくて、目元を綻ばせる。
「そうですね、済みませんでした。ですが、まず私のことより、私と貴方がたの友人達の心配をしなくては」
「あ……」
「その者が持つ加護の力の大小により、魔法陣を描くことの出来る量が左右される。そして、彼らの持つ加護の力は強力なものです。第三世界の者達など、比べものにならない程に」
つまりは、もしヴィレイスの部下達にその存在が割れれば、最も狙われるのは。
「特に、魔の精霊の加護を強く受ける存在は数少ないと聞きます。あの者達にとって、何としても手に入れたい存在でしょうね」
急激に、不安が増した。
シャスタが話してくれた友人達の持つ加護は、火、風、地、であったと記憶している。

ならば魔の加護を持つ者は、第一世界の3人の中にいるということではないのか。
「私の友人達が付いているので、そのようなことにはならないと信じていますが。それより……」
言いながら、シャスタは友人の安否を懸念している弥鷹を見る。
だがそれは一瞬で、直後、通路の方から聞こえてきた足音の方をシャスタは睨み付けた。
ハーピィ達も一斉にそちらを見たことから、恐らくユーグベルが帰ってきたのであろうことが判る。
弥鷹達は特に慌てる様子もなく話を打ち切り、手にしていた書籍を読む態勢に入った。
ユーグベルが姿を現すと、ハーピィ達は彼の指示により彼の来た方向へと消えていく。
彼はそのまま通路の最奥に設置された椅子に座り、牢屋の中に一瞥のみをくれていつものように剣の手入れをし始めた。

ユーグベルを睨み付けていた視線を外し、シャスタはもう一度弥鷹を見る。
それから手元の書籍に視線を落として、心の中で、強く願った。
どうかあの者が、この場所へ足を踏み入れぬようにと。

2―3　汝、彼女に逆らうことなかれ

「うぇ」
水の殆どを失ったとはいえ根源的な美しさは決して損なわぬセオフィラスのほとりで、嫌悪感を露にした短い声が上がる。
声の主は、思いきり顔を顰めている華奈だ。
原因は神殿にて返答を得られなかった話の内容……頻発しているという行方不明者達の辿っているであろう行く末を聞かされた所為である。
華奈だけではなく、深冬も環も彼女と同じ感情を抱いていることが明らかである表情をしていた。

現在彼らは、ヴァレンティーネの街を出てセオフィラスの湖畔を歩いている。
先導するのは深冬。
普段は方向感覚というものには全くもって縁の無い彼女だが、現在は何かに導かれるまま、迷いなく足を進めていた。
そんな深冬の胸中にひとすじの不快感が走り、彼女はきゅっと上着の裾を握りしめる。
己のものでもあるのだろうが、その感情は、彼女を導く精霊の抱いたものだったのかも知れなかった。

「最悪なのは、魔法陣に血を使われてしまった人達は、魔法陣の発動と共に命を失うということだね。……俺達の主と、一緒に」
華奈達にその事実を説明していたフラットが、微かに眉を顰め、言葉を続ける。
かっさらわれて血を抜かれるだけでも最悪であるというのに、更にその仕打ちか、と。
嫌悪感に加え、華奈達の心中に怒りがふつふつと湧いてくる。

……急がなければ、と。
強く思った。

「急ぐ必要はあるが、だからと言って焦る必要はない」
少し逸った気持ちを見透かすかのように、パルスが呟く。
華奈達が彼の方を見ると、フラットが苦笑しながら言葉を付け足した。
「まあ、こう言うのも何だけど、魔法陣を描ききるのには相当の人数の血が必要になるからね。加護を受ける者達を探すだけでも一苦労だと思うよ」
「街の人が言っていた行方不明者の出るペースを考えると、少なくともあとひと月以上は猶予があると見て良いと思います」
カイリの言葉で、華奈達は街を出る時に彼らが数人の街人達に行方不明者について聞いていたことを思い出す。
街人達の話によると、ヴァレンティーネの近隣だけでも2・3日にひとり程度の行方不明者が出ているのだそうだ。
それでひと月以上の猶予とは……相当というが、魔法陣の完成までに一体どれほどの人間の血が必要になるというのか。
発動と同時に、どれほどの人間の命が失われるというのか。
ひと月と聞いて安堵しかけた心を、華奈達は慌てて引き締める。
決して余裕があるという訳ではないのだ。
「ともかく、魔法陣を発動させる条件を満たす為に、攫われた人達が殺されるようなことだけは無いというのは救いだね」
険しい顔を崩さぬ華奈達を安心させる為にと、極力明るい口調でフラットが言う。
それを聞いて、彼女達は多少安心したようであった。
だが。
（血を抜かれた後にどのような扱いを受けるのかは、ともかくとして）
心の中で、音としては紡がなかった言葉を彼は呟く。

己の主は、恐らく破格の扱いを受けているであろうことは想像がつくのだ。
かつて、精霊達とひとりの第二世界人の手によってヴィレイスを封じた時の膨大な知識、魔力、精霊達の加護。
封印の呪文と、開放の呪文。
それはかつてより第二世界のたったひとりの人間に受け継がれてゆき、そして、現在その全てを受け継ぐ者は主しか存在せず。
更に発動させる際に術者に掛かる負荷が大きいゆえ、術者は万全の状態で臨まなければならず、ヴィレイスの復活を強く渇望するという魔族達がその為に不利になるような行いをする筈が無い。
……更に付け加えるなら、主ならば己の命を盾に魔族達に脅しのひとつふたつ掛けているに違いないという確信もある。
だが、血を抜いてしまえば用済みとなる者達は。
魔族達にとって、魔法陣発動まで生命さえ維持されていれば問題のない存在だ。
抵抗出来ぬよう自由を奪って。
必要最低限の養分を送るだけでも、生命を維持することは出来る。
命を奪われるのと、果たしてどちらが楽だろうか。
不祥な考えが脳裏を過ぎり、しかし、フラットは微かに首を振ることでそれを払拭した。
行方不明者達のことも常に心に留めておかなければならないが、今、最も留意しなければならないことは他にある。

「それよりも、何があっても俺達が魔族に捕まるような事態にだけはならないよう注意することだな」
それについては、パルスが切り出した。
ふと、華奈が怪訝な表情をしたが、環が語意に気付いて「あぁ」と呟き、細い指で己の唇に触れる。
そうして、ぽつりと呟いた。

「魔法陣の完成が、早まってしまうから」
パルスは微かに頷く。
ああそうか、と、華奈も深冬も納得したようであった。
何せ、精霊自身から“精霊そのものの力をその身に宿せるほどの加護を持つ者”と称されてしまっているのだから。
「ハルちゃん、転んで流血とかしないようにね」
「何でピンポイントであたしだよ」
神妙な面持ちでのたまう深冬に、華奈は真顔で切り返す。
そこへ環の援護射撃が加わった。
「だってはるちゃんは血の気が多いしね」
「そんなことは……」
「不良学生とかチンピラとかと喧嘩したとかで三日に一回は流血しているのはどこの誰？」
「う……」
「まなちゃんがちゃんと統計取ってるんだから。言い逃れは出来ないね」
「……」
環の怒涛の追い討ちにより華奈は言葉を詰まらせる。
弥鷹と組んでしょっちゅう喧嘩をしていた華奈に、どうやら言い返す資格など無かったようだ。
華奈はがっくりと肩を落とし、あれはあたしじゃなくてタカとチンピラの血の気が多いんだ……などとぶつぶつと自己弁護をし始める。
当然、誰にも聞き入れて貰える筈は無かった訳であるが。

セオフィラスの湖畔を通り過ぎてしばらく足を進めた頃。
唐突に、深冬が足を止めた。
彼女は目の前にそびえるものを見上げ、ゆっくりと、己の目線の

高さまで視線を降ろしていく。
振り返り、彼女は告げた。
「ここ……かな」
語尾に不安の色が混じる。
全員が微かに首を傾げ、華奈に至っては思わず真顔で周囲を見渡した。
「ここ……って」
深冬が言葉で示した場所。
そこは確かに、神殿内で彼女が口にしていた“切り立った崖”には該当する。
しかし。
「崖……というか、壁？」
華奈がぽつりと言った言葉の通り、その場所は、進行方向の視界に収まる範囲全てに岩の壁が立ちはだかっていた。
いや、仰げば空が見えることから確かに崖というものの下にはいるのであろうが、崖の頂上は見えない。
大きな断層の下にいるみたいだね、と、空を仰ぎ眩しそうに目を眇めながら、環が呟いた。
「洞窟、と言っていましたね。この辺りに？」
環と同様見えない崖の頂上を眺めながら、カイリが問う。
深冬はこくりと頷くと、崖に向き直って己の正面を指差した。
「ここに」
深冬の指差した先は、崖でしかない。
全員が疑問符を頭上に浮かべるが、よく目を懲らしてみると、そこにはせいぜい指一本突っ込める程度の亀裂が入っているのが判った。
「深冬。いくらミニマムな深冬でもこの亀裂を通過するのは無理……」
思わず亀裂に指を突っ込んでみた華奈の髪を何かが掠め、ズガン、と、すぐ後ろの崖にその何かがえらい勢いで突き刺さる。

可愛らしい眼差しに殺意を宿す深冬が腰に帯びていた、ダガーだった。
彼女の素敵なコントロールで万が一顔面にでも刺さったら、無論、痛いなどというお話では済まされない。
殺意の気配が消えぬままに、深冬はにっこりと華奈に向かって微笑んだ。
華奈は言葉を失って青ざめたままゆっくりと亀裂から指を抜くと、じわじわと後ずさりして彼女の視界から外れようと無駄な努力を試みる。
抜け出すこと叶わぬ無言の圧力による地獄絵図を目にした野郎共の心の中に、深冬に「小さい」関連の単語は絶対言わないという固い意志が芽生えた。

蛇に睨まれた蛙状態の華奈は放置することにして、パルス達は亀裂の周辺の調査を始める。
触れてみても何の変哲もない岩壁でしかない。が、軽く叩いてみると、反響する音で亀裂の周辺のみ内部が空洞であるということが判った。
そして、亀裂の内部……
奥の方から微かに漏れてくる不穏な気配にも、気付く。
彼らの表情の変化に気付いた環がその視線を追うと、閉ざされた洞窟の奥の奥を見据えているようだった。
そっと、彼女は亀裂の近くの壁に触れる。
そうして、彼らが見据えるモノに気付くと共に、もうひとつの事実にも辿り着いた。
この場所は元々このような壁ではなく、奥へと続く洞窟の入り口として存在していたのだという事実に。
だが、そう……つい最近。
入り口は、誰かの手によって塞がれた。
触れた冷たい岩壁に、微かに残された魔力が伝えてくる。

塞いだのは……中に封印されているであろう、精霊自身だと。
封印される間際、残された全ての魔力を投じて。
己の力による抑制を失い暴走してしまった、不穏な気配を発するモノ達を、洞窟の中に閉じこめる為に。
ふと、彼女が隣へ視線を向けると、深冬と、多少やつれた華奈が己と同じように岩壁に触れ、同じ答えに辿り着いているようだった。
こくりと彼女達は頷き合い、岩壁から手を離す。
「さって。じゃあ、一丁ぶっ壊して潜入してみましょうかね」
ぶんぶんと、右腕を振り回しながら華奈は岩壁に拳の照準を定めるが、それはパルスに制された。
「いくらお前でも手を痛めるから止めておけ」
「僕がやりますから」
ぶっ壊す気満々だった華奈だったが、大の男2人に制されては諦めるしかない。
渋々と華奈は引き下がろうとする、が。
「みんな、下がっていてね」
穏やかだが有無を言わせぬその声で、壁を壊す為に武器を装着しているところだったカイリもその他の一同もぴたりと動きを止めた。
段々と激しくなる、大気の唸る音。
嫌な予感がして全員がゆっくりと振り返ってみると、そこには。
いつもの素敵な笑みを湛えたまま、巨大鈍器を凄まじい勢いでぶん回している環様が立っていた。
何だろう、この恐怖映像は。
一同の背中を、嫌な汗が流れていく。
ごくりと唾を飲み込んでじりじりと数歩後退し、一同が申し合わせたようにずばっとその場を離れた、その瞬間。
環様の一撃は大気を切り裂くほどの勢いで目標の壁に向かって振り下ろされていた。

ぱらぱらと降り注ぐ石片の雨と砂埃が収まると。
塞がれた部分どころかその周辺の壁にまで巨大なクレーター跡が穿たれたその場所に立っていた環は、振り返って穏やかな笑みを濃くした。
「さ、みんな、行きましょう」

「あれは暗殺者の目だった」「隕石が降った瞬間だった」などと、その時の様子を後に正気を取り戻したH．AさんやF．Mさん等が語っている。

２―４　守りたいもののために

全員が正気を取り戻すまでに多少時間を要したものの、一同はようやく開かれた洞窟の中へと足を踏み入れた。
入り口は環様のお陰もあり、全員が横に並んでも歩ける程に広かったが、内部もそれなりに広いようである。
中には照明となるようなものは存在せず、歩を進めるごとに入り口からの光が届かなくなり、薄暗くなっていった。
光が完全に届かなくなる前に、フラットが荷物からランプを取り出して火を灯す。
明滅する光に照らし出された壁や地面は入り口付近とは違って多少ぬめりを帯びてていた。
湖の近くにある所為であろうか。
「足元、気を付けて」
先頭を歩くフラットが振り返りながら注意を促す。
が、遅かったようで、既にすっ転びかけた華奈がパルスの外套を掴んで何とか難を逃れているのを目撃してしまった。
「ハルちゃん……」
あれほど注意してって言ったのに、という視線を深冬に向けられ、華奈は言い逃れようもなくもはや目を逸らすことしか出来ない。
そこへ更に、不機嫌そうなパルスの視線がじろりと向けられた。
「おい、さっさと離せ。苦しいだろう」
「うっさい。男ならマント捕まれて首締まるのくらい我慢してみせたまえ。レディがすっ転ぶよりはマシでしょ」
「普通に考えて首締まったら死ぬだろう。離せ」
「お前なら窒息したって生きていけるさ……」
「その台詞、そっくりそのまま貴様に返す」
何だとこの野郎、と、華奈がパルスを睨み付けるが無論それで臆するような彼ではなく、２人の間にばちばちと火花が散り始める。

周囲の人々はまた痴話喧嘩が始まったよと思ったが、突っ込むと余計に面倒なので口には出さなかった。
どうでも良い口論を聞き流しながら、奥へ奥へと進んでいく。
洞窟内は幾つか道が分かれている部分もあったが、深冬の感覚を頼りに進んだ為、進行方向で迷うということはなかった。
「うわぁ」
小さく、深冬が感嘆の声を上げる。
洞窟の壁面に、変化が現れ始めたのだ。
入り口付近の壁面は地面の土色がそのまま壁になったような質素な色だったが、奥に進むにつれてランプに照らし出される壁面は徐々に青みを帯びてゆき、そして、明滅するランプの炎に従って美しく煌めき始める。
壁面の所々に、宝石のような薄青い石が散りばめられている所為だった。
どういう原理になっているのか。
大小様々なその石は自ら光を放っているようで、歩を進めるにつれて散りばめられている数が多くなると、ランプの炎が無くとも辺りの様子がはっきりと判る程の光源になり得ていた。
これひっぺがして売ったら幾らになるだろ、などという華奈の多少感性のずれているような気がする感動のし方に苦笑しつつ、フラットは役割を果たさなくなってしまったランプの炎を吹き消し、バッグへとしまい込む。

その瞬間、唐突に周囲の空気が冷えた。
全員が緊張した面持ちで足を止める。
炎が消えた所為だけでは決して無い。
洞窟へ足を踏み入れる前から感じていた不穏な気配が、急激にその存在感を増したのだ。
誰かが唾を飲み込む音や冷や汗の地に落ちる音。それすら鮮明に聞こえそうな程に神経を研ぎ澄ませ、互いの背中を守り合うような

形で、身構える。
黒い影のようなものが視界を掠めたと。
華奈が脳で認識したその時には既に、目の前に広がっていた筈の美しい景色は一変していた。

ぎょろりとした赤い目を持つ、人間の子供程度の大きさの、毛むくじゃらのイキモノ。
首と胴体が切り離されたそれは聞いたことも無いような甲高く奇妙な声を上げ、赤紫色の体液を撒き散らしながら地へ崩れ落ちる。
切り離された首の方は勢いで数メートルも吹っ飛び、ぐじゃりと嫌な音を立てて地面へ落下し、尚も転がって先の壁にぶつかったところでようやく止まった。
びくり、びくりと痙攣する胴体の切断部分から溢れる赤紫。
首が吹っ飛んだ軌道と転がった軌道の、先程までは美しい青であった地面を汚す同じ色の液体。
華奈が思わずその色を目で追うと、色の終点には落ちた衝撃で醜くひしゃげたイキモノの首が転がっていた。
巨大な鼠のような、土竜のような、そんなイキモノ。
片方潰れている不気味なほどに大きな赤い目が、徐々に生の色を失い、昏く濁っていく。
目の前で確かな殺戮を見ることなど、華奈達は初めてだった。
深冬はその様子を最後まで見ることに耐えきれず、口元を手で覆い目を逸らす。
華奈が視線を少し右にずらすと、彼女を庇うようにして立つパルスは、彼が切断した、未だ僅かに痙攣を続けているイキモノを、警戒を解かぬ表情で見据えていた。

何で、と。
華奈は問おうとして……出来なかった。
洞窟に入る前から感じていた、冷え冷えとする意思。

殺意。
息絶える寸前のこのイキモノは、確かにそれを持っていた。
甘い考えを持ったその瞬間に、己の命が失われるのだ。
法による守りの通用しないものから己を、守るべきものを守る為には、向けられる感情や行為と同等のものを、返さなければならないこともある。
……例えばそれが、殺意であろうとも。
そうやって今、パルスは華奈達を守ってくれたのだ。
彼らは、彼らの世界にある王国の騎士だと言っていたのを思い出す。
迷いなくイキモノの首と胴体を切り離した剣閃。
王国を守る為に、彼らはこうした行為を辞さない日々を送っていたのだろうと想像できる。
守りたいものが、守るべきものがあったから。
華奈達はただ平和な日々を送るだけの学生というちっぽけな存在だったし、そのような大層なものは無かった。
だが今は。
救い出したい友人達がいて、目の前に、自分達を守ろうとしてくれている存在もいる。
同じ気持ちを、行為を、自分達も返したかった。

淡い光の粒となって、遂に息絶えたイキモノは消えてゆく。
魔力によりその生を維持する魔物と呼ばれる生きものは、死ぬと空中に漂う魔力へ還り、溶け合い、消えゆくのだと。
誰に問われるでもなく、フラットが告げる。
空気へ溶けるようにして消えゆく粒子を己の長剣から立ち昇らせたパルスは、少しだけ振り返り、華奈達をゆるりと一瞥した。
彼女達は、意識的に命を奪うという行為をしたことが無い。
それは数日間接して何となく判っていたし、彼らは彼女らにそれを強要するつもりも無かった。

先日の盗賊討伐や、華奈のいうチンピラとの喧嘩などとは、訳が違う。
奪ったものの重圧が、全身に襲い掛かる行為。
だから例え重荷になろうとも、主を救い出すまでは彼女達を守ろうと。
決意していた……訳なのだが。
彼女達は静かに、己の得物を構えて前を見ていた。
少し、震えているのが判る。
だが、淀みない声で、華奈が言った。
「ちゃんと前見たほうがいいんじゃない？」
見ずとも、取り囲まれていることは気配で判る。
それよりも、彼女達の表情から、パルス達は目が離せなかった。
彼女達は、肌が焼ける程の殺意を放つその魔物達をしっかりと見据え、真の意味で相対しようとしている。
状況が考えることを許さないだけなのか。
それとも彼女達の心からの決意なのかは判らないが、精霊の力を得た彼女達が真の意味で共に戦ってくれるというのなら、これ以上無い、心強い仲間となってくれるに違いなかった。

「どんどん増えているね」
環の言葉通り、彼らを取り囲む魔物の数は視界内の床を埋め尽くすほどに増殖している。
何処にこんなに隠れてたんだ変態どもめ、と、華奈は多少げんなりした表情で吐いた。
「全てを捌いていたらきりがないですね」
「ミフユ、この先の道がどうなっているか判る？」
「えと……多分、ここから先は殆ど一本道だと思う。どのくらい距離があるかはわからないけど、そんなに遠くない感じ、かなぁ」
「移動しながら襲いくる奴のみを捌く」
改めて得物を構え直し、彼らは全力で駆ける為に少し腰を落とす。

「遅れを取るなよ黒いの」
「こっちの台詞だ」
いつものやり取りを合図に、彼らは一斉に地を蹴った。

小さいものから、大きいものから。
前後左右あらゆる方向から次々と襲い来る魔物達を切り伏せ、叩き伏せながら、華奈達は全力で薄青い通路を駆け抜けた。
先頭を走るフラットがハルバートの刃を薙いで前方を塞ぐ群を数メートル先まで吹き飛ばし、上空から飛び掛かってくる数体をダガーで切り裂きながら、先導の為に深冬が前へ出る。
深冬の両サイドは華奈とカイリが守り、後方から来るものはパルスの剣閃と環の鈍器の風圧で消し飛ばされた。
迷いの無くなった華奈達の動きは、パルス達のそれに及ばずとも引けを取らないものとなっている。
しかも、
「何処から湧いてくるんでしょうね、本当に」
「しかも何だか、深冬ちゃんが割と狙われている感じだね」
「あー、お肉が美味しそうだから」
「そっ、そんなことないよ！　きっとたまちゃんのお肉のほうが美味しいよ！」
「あら、そう？　はるちゃんのお肉の方が健康そうだけれど」
「ハルちゃんは……筋肉でかたそう」
「大概失礼な台詞だな」
「……ふ」
「予想はつくけど誰だ今鼻で笑ったの」
「魔物が獲物を定める基準というのは魔力の濃度だからね。ここにいる人達はみんな狙われ易いし、今はミフユが精霊と呼び合っているから、より狙われても仕方がない状況なのかな」
「深冬、頑張れ」
「そんなあぁ」

魔物を捌きながらこのような会話をする余裕までであった。
五百メートル程度、そのような感じで駆け抜けた頃だろうか。
視界の先に、明るく開けた空間の存在を認める。
魔物の弾幕を纏いながら、華奈達は、勢いを殺さぬままその空間へと飛び込んだ。

一層明るく広い青の空間へと足を踏み入れた華奈達の視界が、一気に開ける。
そこは、突然別の世界へ来たのではないかと錯覚するほど、今まで駆けていた通路とは雰囲気の違う場所だった。
華奈達の通う高校の体育館など三棟も入ってしまいそうなほど広く、天井も高く、明るい。
薄青い壁面には通路と同様に宝石のような石が散りばめられているが、天井に向かうにつれてその密度は濃くなり、天井の方はもはや研磨する前の水晶のような形の石が、びっしりと突出していた。
石は自らも光を放っているが、他にも何かを反射して煌めいている。
視線を下ろしていくと、石が反射しているのは微かにたゆたう水面であることが判った。
広い空間の床面三分の一ほどが、美しい水面を湛える泉なのだ。
まるで枯渇する前のセオフィラスの縮小図を見ているかのようだと、何人かが思う。
そうしてふと、首を傾げる。
何故、空間をじっくりと観察し、そのような考えを持つ余裕が出来たのか。
華奈達は、自分達が駆け抜けてきた通路の方を見た。
通路と空間が何か見えないもので遮断されているかのように、通

路側に、今まで交戦していた魔物達がひしめいている。
美味しい餌が目の前にあるというのに、空間の中に入りたくとも入れないといった様子だった。
だが、いつ雪崩れ込んでくるか判らないゆえ、華奈達は得物を構え直し、警戒を強める。
すると。
空間へ入ってからずっと何処か一点だけを見ていた深冬が、ゆらりと歩き出した。
深冬が向かう方向へと、ひとり、またひとりと視線を合わせ、そして。
全員が、そこから視線を外せなくなる。

泉の丁度中心にあたるその場所には。
水面から突出する鋭く巨大な水晶の中に封印された……
……美しい精霊が、存在していた。

人間の女性に似た姿。
白磁の肌、背丈より遥かに長い青の髪、悲しげに伏せられた瞳。
儚く、しかし、絶対的な存在感。
デルヴィスから切り離された魔力の一部と邂逅した時も、その存在の大きさに威圧感を感じさせられたが。
今目の前にしているものは片鱗などではなく、封印されているとはいえ“世界の力”そのものだった。
ぞくりと、全身に鳥肌が立つ。
ああ、この存在の所為で、魔物達はこの空間へ踏み入ることが出来ないのだと。
全員が瞬時に理解する。
遂に辿り着いた一柱の精霊に、パルス達第二世界人は、ごく自然に騎士の最敬礼をしていた。

だが。
一瞬後、彼らの全身を別の鳥肌が駆け抜け、深冬以外の全員が勢いよく背後を振り返って得物を構える。
「なんだ、これ……」
振り返った先にあったものを見て冷や汗を流し、華奈が思わず呟いた。
百獣の王の頭と体、その頭の両脇から生える蛇の頭と鹿の頭に、蛇の尻尾。
象などより遥かに巨大で、見覚えのある動物達の面影はあれども凶悪さは比較になりようもない生きもの。それが、目を血走らせ、空間全体が震えるほどの咆哮を上げ、華奈達に殺意を叩き付けている。
「キマイラ、か……？」
「こんな魔物、書物でしか見たことが無い」
パルスとフラットが呟いた。
こんなもの、この空間に入った時は存在しなかった筈だと。
全員が考え、そして気付く。
「仕掛けられて、いたんでしょうね」
暗黒の煙が立ち昇るキマイラの足元に、役目を終えて光を失いかけた魔方陣が見えていた。
精霊を封印した者が、万が一にも封印が解かれぬようにと。
潜入者を消し去る為に仕掛けたトラップなのだ、これは。
華奈はちらりと深冬を振り返る。
深冬はこちらの様子など視界に入っていないような様子で、精霊だけを見て、ふらりふらりと足を進め続けていた。
封印を解くことが出来るとしたら、あの美しい精霊に呼び掛けられた、彼女しかいない。
彼女が封印を解くまでの間、この魔物を近付けさせないようにしなくては、と。
そう考えを巡らせた瞬間。

一際鋭い咆哮を上げた魔物が、華奈達目掛けて襲い掛かってきた。
魔物はたった数歩の助走で天井近くまで飛び上がり、降下の勢いを付加した剥き出しの鋭い爪を地面へと叩き付ける。
不意打ちのようなその一撃を華奈達は後方へ跳躍することでかわし、叩き付けられた衝撃で巻き起こった風に吹き飛ばされそうになりつつも、何とか着地した。
魔物の足元を見ると、爪と風圧で抉り取られた地面が悲惨な状態になっている。
ぽたりと、何人かの冷や汗が地面へ落ちた。
一撃でも喰らったら命が無いどころか、肉体すら残るかどうか判らない。
魔物はすぐさま次の攻撃に移った。
数メートル斜め前方にいるカイリに向かってその巨体からは考えもつかぬような速さで飛び掛かり、鋭い爪を振り下ろす。
危ない、と、華奈は思ったが、カイリは鮮やかに身体を旋回させて空気をも切り裂く一撃をかわし、魔物の脇腹に重い拳をめり込ませた。
ボギリと嫌な音が聞こえ、魔物は三つある口全てから泡の混じった唾液を撒き散らして苦痛の咆吼を上げる。
すぐさま後方へ跳躍したカイリを魔物はぎろりと睨め付け追撃しようとするが、それよりも早く、反対側の脇腹をフラットの一閃が切り裂いた。
赤紫の血飛沫が飛び散り、魔物は叫びよろめきながらも今度は殺意の矛先をフラットへ向ける。
しかし、正面に飛び込んできた漆黒が追撃を許さなかった。
パルスの、もはや残像すら見えぬほどの鋭い剣閃。
閃きは一番右側に生えていた蛇の頭を胴体から切り離し、吹き飛ばす。
思わず息をのみながら、華奈と環はその光景を見ていた。
書物でしか見たことのない伝説上の存在だった筈の魔物が、たっ

た三人の騎士に一瞬にして致命傷を負わされ、取り囲まれることしか出来なくなっている。
彼らの連携は精練されており、そして、美しかった。
流石だとしか言いようが無かったが、共に戦うことを決意した以上、自分達もこのように在りたいと。瞳に更なる決意を宿す。

取り囲まれ、得物を突きつけられ。
身動きの取れなくなった魔物の、焦燥と興奮と殺意が増していった。
首と脇腹からぼたぼたと赤紫を滴らせた魔物は、低く唸りながらぐるりと辺りを一瞥し……ある一点で、視線を止める。
今や四つになってしまった、血走った目が捉えたのは。
封じられた精霊の前に静かに佇む、小さな後ろ姿だった。

今までで一番大きな咆吼が、空間を振動させる。
華奈達が身構えると、大きく開かれた魔物の両の口から灼熱の炎が吐き出された。
「うっわ火ぃ吹いちゃったよこのひと！」
場にそぐわぬ台詞を吐きながら、華奈は魔物の首の動きに合わせて広がってゆく炎の海を素早く避ける。
全員がそうして炎を避けながら接近する隙を伺っていると、灼熱の炎の息が突然止まった。
代わりに、二つの口の中が鋭く輝き出す。
本能的に、全員が後方へ飛んだ次の瞬間。
魔物の口から光と炎の固まりのようなものが吐き出され、先程まで彼らがいた辺りの地面と衝突していた。
爆弾でも破裂したかのような凄まじい轟音が響く。
巻き起こる爆風と炎。
視界を奪う土煙。
それらから目を守りつつ魔物を警戒していると、華奈と環の間を、

凄まじい勢いで何かが駆け抜けた。
何、と、考えかけ、瞬時に悟る。
駆け抜けていった巨大な影は、魔物。
駆けていった先にあるものは、封印された精霊と。
……深冬だ。

2―5　水の支配者、その御名

ヴァレンティーネへ向かっている間、ずっとずっと語り掛けられ続けていた。

『他の力も違わぬ。だが水が枯渇するということは、全ての生命が枯渇するということ』

知っている。

『世界の根源の一柱でありながら情けないことだが、今はお前に頼る他ないのだ』

知っている。

『見よ、雄大で美しかった筈のセオフィラスの今の姿を。このままでは、世界そのものがこれと同じ姿になる命運を辿るだろう』

知っている。

『お願いだ、ミフユ……助けてくれ』

……聞こえている。

だから彼女は迷いなく前にだけ進み、声の主を捜し出すことが出来た。

悲しげな表情のまま泉の中心に封じられた声の主に……精霊に、深冬はゆっくりと近づいていく。

薄青い地面が終わり泉に差し掛かっても、深冬は歩を進めることを止めなかった。

だが彼女がいくら歩を進めても、泉に沈むことはない。

まるでそこに地面があるかのように、泉から拳ひとつ分くらい上の中空を歩いてゆくのだ。

そうして阻むものの無い道を歩み終え、彼女は精霊の目の前へと辿り着いた。

天井近くまでそびえる、水晶のような、透明の巨大な石。
そっと右手を差し出して、世界の力を封じているそれに触れてみる。
『……よくぞ、来てくれた』
触れると、頭の中に直接声が響いてきた。
ずっとずっと聞こえていたものと同じ音色。
ふと、深冬は精霊を見上げる。
変わらず悲しげに瞳を伏せたままだったが、はっきりと、この存在が発したものだということが判った。
『何も知らぬ世界で暮らしてゆければ幸せであったろうに。世界まで跨いでかような場所へ呼び付けてしまったこと、申し訳なく思っている』
ううん、と、深冬は首を横に振る。
自分達にも全く関係のない話では無かったし、何も知らず、何もせずにいるよりはましだと深冬は思っていた。
それよりも。
「どうすれば、封印は解けるの？」
精霊の表情は動かない。
だが深冬は、美しいその存在が微笑んだように見えた。
『私の名を呼べばよい。お前が私を呼び私を求めれば、かような封印を破るなど容易いことだ』
「なま、え……？」
深冬は微かに首を傾げる。
この精霊に名前を教えて貰ったことなど無いのだから、当然のことだった。
『ミフユ、お前は私の名を知っている筈だ』
はっきりと、精霊は告げる。
深冬は精霊を見上げたまま目を伏せ、考えてみた。
いや。
考えるではなく、思い出すと言ったほうが正しい。

そう、深冬は、初めからこの精霊の名前を知っていた。
加護を得た時から。
……生まれた時から。
その名は、しっかりと深冬の中に刻まれている。
深冬は目を開き、笑みを湛え、精霊の名前を力強く紡いだ。

大きな影が深冬の方へと駆けていくのが見えて、パルス達は舌打ちする。
爆炎から逃れる為に後方へ飛んだ訳だが、彼らの位置からでは、深冬の元へ辿り着くのが魔物より遅れてしまうだろう。
だが、彼らが行動を起こすのより早く。
ふたつの小さな影が、まさに深冬に鋭い爪を突き立てようとしていた魔物に追いついていた。
それが誰かなど、考える必要もない。

泉の縁に差し掛かる辺りで魔物からほぼ一瞬遅れで大きく跳躍した華奈と環は、深冬と精霊の数メートル手前で前足を振り上げた魔物に追いついた。
両脇から飛び出してきた小さな存在に魔物は気付くが、気付いた時にはもう、遅い。
環の勢いを付けた鉄球が、華奈の見事な回し蹴りが、百獣の王の首の鼻っ柱に叩き込まれていた。
咆吼を上げながら、魔物は縁の方へと吹っ飛ばされる。
そして、その時。
「スプライト！！」
深冬が、力強く精霊の御名を紡いだ。

水晶の中の精霊が、カッと目を見開く。
水晶は一瞬にして命を絶たれた時の魔物のように光の粒となって霧散し、解放された精霊は、魔物の方へ向き直った深冬を背後から抱き込むようにして寄り添い、不敵な笑みを湛えた。
同じように微笑んだ深冬が、右腕を薙ぐ。
軽いその動きとはうらはらに。
空間全体に冷気が駆け抜け、絶対零度の鋭い氷柱が泉の縁に激突しようとしていた魔物を飲み込んで……
次の瞬間には、魔物ごと粉々に砕け散った。
泉と天井からの光をきらきらと反射しながら、数多の氷の粒が降り注ぐ。
それに混じって空中へと還りゆく、キマイラと呼ばれた魔物の魔力の光。
見たこともないその美しい光景を、パルス達は陸から、華奈と環は泉に落下しながら、恍然と見つめていた。

－＊－＊－＊－＊－＊－

血臭漂う空間の中心にいた男が、傍目では判らぬほど微かに目を見開いて、壁のある一点を見る。
男の視界には壁しか映されていなかったが、男が見据えているのは壁などではなく、そのずっとずっと先にある光景だった。
すうっと、男は切れ長の目を細める。
強大な魔物を守りに据えた筈の一柱の精霊の封印が、解かれた。
第三世界の人間にそれが出来るとは思えない。
……ならば。
男はふわりと外套を翻し、血臭漂うその空間を後にした。

－＊－＊－＊－＊－＊－

泉に、ふたつほど水飛沫が上がる。
静かだった水面が大きく揺れ波紋が広がり、飛沫の上がったところから華奈と環が顔を出した。
二人は息を継ぐと、水面から顔を出したまま空中を見上げる。
そこには未だ、氷の粒と魔力の粒子の共演が広がっていた。
共演が終わりを告げ、華奈と環はゆるりと顔を見合わせ……静かに笑い出す。
自分達が水中にいることも忘れて見とれていたことが可笑しかった。
「あぁぁ、ふたりともずぶ濡れだ……大丈夫？」
笑い声ではっとした深冬が、おろおろと二人の様子を伺う。
二人が深冬を見上げると、精霊を背中にひっつけた彼女は水面から少し上の空中に浮いているようだった。
「深冬浮いてるし……卑怯者」
「えぇ……そんなぁ」
「精霊さんの加護の力、かな？」
三人のやり取りを見て微笑んでいる精霊を見る。
美しいが少しあどけない顔立ちをした精霊は、しかし、世界の力の一柱たることを感じさせるだけの存在感と威圧感があった。
精霊には、色々と聞きたいことがある。
が、水中からでは何であるし、陸の方からフラットとカイリが心配そうに呼び掛けているので、華奈達はとりあえず泉から出ることにした。

『まずは、礼を言わねばならぬな』
華奈と環の服を乾かす為にと火を起こし囲んだところで、精霊が言った。
今度は頭に直接響くものではなく、精霊の口から音として紡がれている。
華奈達とそう変わらないように見える外見のあどけなさに合う高めのものだが、威厳と凛々しさを備えた声だった。
『……それに、だ。空間をも超えかような場所へ足を運ばせるばかりか、世の命運をも背負わせることになってしまったこと……
我々全員が、申し訳なく思っている』
何人かが、首を横に振る。
今この場所にいることを悔いている者などいなかった。
全員の目を見て、そこに宿る意志を見て。
精霊は微笑む。
『お前達の御心、感謝する』
全員が、笑みでその言葉に応えた。
「乗りかかった船だし気にすんなってお嬢さん」
「精霊は創世の頃からの存在だ。お嬢さんではないだろう」
「ノリで言ったセリフ程度に真剣に突っ込まないで頂けますか」
「まぁまぁふたりとも……」
「それより、幾つかお聞きしたいことがあります」
火花が散りそうな華奈とパルスをカイリが諌める様子に苦笑しつつ、フラットが話を進行する。
『我が必要であると思うことを、まずは伝えよう。他に聞くべきことがあれば、その後にするが良い』
フラットは頷いた。
『デルヴィスからもあった通りだが……お前達には我々精霊全員の封印を解き、ヴィレイス復活の魔方陣が描かれているその場所へと運んで貰わねばならぬ。
だが、我の封印が解かれたことは魔族どもに気付かれた筈。此度

もそうであったように、魔物や罠がお前達の進行を邪魔立てし、危険に晒される可能性が高い。
それゆえ、我々を宿し運んで貰う代償として、我々の力を行使する権限を与えようと思う』
「力……？」
何人かが首を傾げ、だが、すぐに思い至る。
先程深冬が使った、腕のたったひと薙ぎで魔物を一瞬のうちに葬り去った絶対零度の力。
パルス達の世界で最高峰と言われる魔法師達ですら敵うかどうか判らないほどの、凄まじい力だった。
『但し、これは魔法ではなく、魔術と呼ばれる力だ。誤った使い方や無理な使い方だけは決してするな。己の身を滅ぼすことになる』
パルス達は神妙な面持ちで頷く。
華奈達にはその違いが判らなかったが、兎も角便利だからといって使い過ぎると危ないのだな、ということだけは理解できたので、頷いておいた。

魔法というのは言霊や魔方陣などを使って、空中や大地を流れる魔力を行使するもの。
それに対し魔術というのは本来は魔族や魔物のみが使用できる術で、己に内在する魔力を行使するというものである。
魔族や魔物にとって内在する魔力とは生命力に等しいものであるゆえ、無闇に使うということは己の命を脅かすことに繋がるのだ。
精霊の封印を解き精霊をその身に宿すことで、華奈達は“精霊そのもの”という強大な魔力を己の内側に得ることとなる。
だが元よりの加護の力はあれども、その強大過ぎる力を操るということは、それだけ危険が伴うということだ。
「えと……質問。精霊さんを魔方陣まで運ぶっていうのは、このままスプライトが一緒に来てくれるっていうことなの？」

ふと、深冬が己に寄り添う精霊を見て問う。
精霊は穏やかに目を細め、己の加護を受けるその者の頬に手を伸ばして愛おしむように撫でながら答えた。
『そうとも言えるし、そうとも言えぬ。精霊というものは己の守護すべき領域があるゆえ基本的にはその場から動かぬが、ミフユが我を宿すことにより、我はミフユを通して何所へでも発現することが出来るようになる。
そのことを利用し、敵陣の、我々を弾く結界やその内側にあるであろう魔方陣の元へ近付きたいのだ』
なるほど、と、深冬はくすぐったそうに眼を眇めながら納得した様子を見せる。
精霊はゆるりと深冬から手を離すと全員を見渡し、荘厳なる声で告げた。
『人間達がヘザーベアネスと名付けた場所へと向かうが良い。近くまでゆけばまた我の時のように、そこへ封じられた精霊の声を聞くことも出来よう』
ヘザーベアネス。
その名を反芻し、何人かが世界地図を思い浮かべる。
ヴァレンティーネから南西に位置する都市で、カヴェリーラからヴァレンティーネまでの距離とを地図上で比較すると、おおよそ5日程度の行程になるだろう。
「目的地を教えてくれるなんて……デルヴィスより親切なひとだな」
「お前……罰が当たっても知らんぞ」
誰もが思っていても口にしなかったことを思わず言ってしまった華奈に、静かな突っ込みが入った。
そんなもん知るかとばかりに華奈は突っ込みを華麗に無視し、続けて口を開く。
「あと、その……親切ついでに、捕まってる奴らが今どうしてるかなんて判らないかな？」
全員が思わず精霊を見るが、精霊は微かに眉を顰め、微妙な表情

をした。
『先も言った通り敵地には我々を弾く結界が張られており、捕われた者達は結界の内部にいるゆえ、その様子を伺うことは出来ぬ。ただ、生命の気配は途絶えておらぬ。我から言えるのはそれだけだ』
精霊は申し訳なさそうに首を振るが、華奈達は満足した様子で笑みを作る。
無事なことが判れば、それだけで充分だった。
フラットが全員に目配せする。
全員が小さく頷いて立ち上がった。
「精霊よ、感謝します」
うむ、と、精霊は頷いて、出立しようとする彼らを見送りながら、その後ろ姿に声を掛ける。
『ヘザーベアネスへと発つ前に、一度セオフィラスへと足を運んで貰いたい』
空間の入り口付近にいた彼らは振り返り、頷くことでその言葉に答えた。
一部手を振りながら己に別れを告げる彼らに精霊は微笑むことで応え、彼らが空間を後にしても、彼らが消えた入り口の方をじっと見据える。
その表情は、今後困難に見舞われるであろう彼らの行く末を案じていた。

－＊－＊－＊－＊－＊－

「深冬、精霊を宿すってどんな感じ？」
いつの間にやらひしめき合っていた魔物達が消え去っている薄青い通路を歩きながら、ぽつりと、華奈が口を開く。
うぅん、と、深冬は難しそうな表情で首をひねった。

「何ていうんだろう……なんかこう、ずばーんっていう感じ？」
意味不明である。
ふーんと、言っている本人より訳の判らなさそうな表情で、華奈は首をひねった。
「そもそも力っていうけど、何ができるようになったの？　さっきみたいに敵を凍らせたりとか？」
「それもあるけど、水の力を使って想像できる範囲で色々なことが出来るみたい。例えば……」
頬に指を当てて思案しながら、深冬は空いている左手を胸元に差し入れ、素早く一閃する。
避ける間も無く、華奈の頬に赤い線が走った。
一同はぎょっとして思わず後ずさる。
にゃーとか姫がご乱心じゃーとかプリンを無断で食べて済みませんでしたーとかいう訳の判らんことを叫んでいる華奈に、まぁまぁと凶器を懐に戻しながら笑みを湛えた深冬が近づいて、己が傷付けた華奈の頬を捕えた。
深冬の小さな掌とそれが翳された華奈の頬の間に薄青い光が溢れ、収束する。
深冬の手が離されると、そこにあった筈の傷は綺麗に消え去っていた。
感嘆の声が上がる。
華奈も己の頬に触れて傷も痛みも無くなっていることに感心した。
「こういうことも出来るけど、でも、あんまり大怪我は治せないから無理はしちゃだめだよ」
全員が頷いてくれたのを見て深冬もうんうんと頷き、更に思案する。
あとはそうだなぁ、と、深冬は両手を広げた。
ぽん、ぽぽんと、空中に氷の花が咲いてゆっくりと地に落ちる。
可愛らしく綺麗なその光景に「おおー」と歓声が上がり、見物人のごとく何人かが拍手した。

更に深冬はきらりと目を光らせて素早く両手で懐のクナイを取り出す。
ぴんと水平に伸ばされた両手のクナイの先と深冬の頭のてっぺんから、絵本に描かれた鯨の潮吹きのように二又に分かれた水がぴよぴよと飛び出した。
水を出しながら、深冬はくるくると回ってみせる。
それを見て華奈は大袈裟にショックを受け、ふらふらとよろめいた。
「こっ……これは、伝説の人間スプリンクラー！！」
ぴっしゃーん、と、華奈の背後に衝撃の雷が落ちる。
どの辺が伝説なんだかよく判らないが、無駄に凄いのかも知れないのでフラットとカイリはとりあえず拍手をしてみた。
楽しそうに拍手しながら歓声を上げる環を他所に、華奈は地に崩れ落ちて拳を地面に叩き付け、心底悔しそうに叫ぶ。
「羨ましすぎる……っ！！」
くそう、あたしはデルヴィスに期待して待つしかないというのか……！　などと言いながら、華奈は嘆いた。
そんなにネタ人間になれないことが悔しいのかとパルス達は思ったが、華奈のあまりにも悔しそうなその様子に、言葉にして突っ込める者はいない。
そもそも、精霊の力をこんな大道芸紛いのことに使っても良いのだろうか。
パルス達が一瞬そう考えた瞬間、可愛らしく笑いながらくるくる回っている深冬の背中から、にゅるりと何かが飛び出した。
吃驚して彼らは後ずさる。
深冬の背中から生えてきたのは何と、先程まで会話していた水の精霊スプライト様だった。
『ミフユ、魔術を使うのはいいが、あまり無駄使いはするな』
「ご、ごめんなさい……気を付けます」
深冬も止まればいいのに回りながら答えるものだから、精霊も一

緒にくるくると回っている。
深冬が水芸を止めて止まると、うむ、気を付けろ、などと言いながら精霊はにゅるりと深冬の中（？）へ戻っていった。
何と言うか、先程まではあれほど威厳と壮大さを感じていたというのに、それらががらがらと音を立てて崩れ去っていく。
「なるほど。深冬ちゃんを通してどこにでも発現できるって、こういうことだったんだね」
ぽん、と手をついて環が言うが、そんなことより、精霊のイメージが崩れ去ったことの方が彼らにとっては重要だった。

2―6　託されゆく想い

薄暗い洞窟を抜け、陽の光の眩しさに華奈達は目を眇める。
最深部は発光する石壁のお陰で随分明るかったが、やはり、大地の全てを照らす本物の光の恩恵には敵わないようだ。
「ん～、やっと光合成できるわ」
「ハルちゃん葉緑体持ってないでしょ」
伸びをしながらノリで言った華奈に、すかさず深冬からの突っ込みが入る。
環は微笑ましそうに繰り広げられるどうでも良いやり取りを見るが、騎士達は彼女らの口から出る言葉の意味が判らないようで、首を傾げた。

そんなどうでも良い会話をしながら足を進め、彼らはセオフィラスの畔へと辿り着く。
洞窟の最奥で見た、縮小図であろうと根拠無く確信した美しい泉とは違い、視界いっぱいに広がる湖は未だ干からびたままだった。
「スプライト……」
眉を顰めて湖を眺めたまま、深冬は呟く。
呼び掛けに応えたのか否か、すうっと、深冬の背後に精霊はその姿を現した。
『もう、大丈夫だ』
精霊は深冬を慰めるように彼女をやんわりと包み込んでから、湖の方へと向かう。
湖の中程まで進んだ精霊は、瞳を閉じてゆるりと両腕を広げた。
湖いっぱいに光が降る。
いや、虹色の輝きのその光は、水の粒だった。

細かな無数の水の粒が、セオフィラスに降り注いでいる。
「綺麗、だね」
「うん」
ぽつりと本心から、環と深冬が呟いた。
洞窟の中での光景も美しかったが、きらきらと輝く光の雨もまた、目を離したくない程に美しいものだ。
精霊がもたらす美しい光景はきっと他にもあるのだろうと、ふいに思う。
それらを取り戻してゆくのもまた重要な旅の理由なのだなと、彼女達は思った。

光の雨が止む。
姿を現したセオフィラスは、本来の姿を取り戻していた。
陽光を反射して輝く静かな水面に、透けるような水質。
全員が根拠無く確信した通りの、美しい姿。
何人かが、思わず感嘆の溜息を漏らす。
精霊はゆるりと振り返って満足そうに微笑んだ。
それから、深冬の元へと戻ってくる。
『深冬、我を人間がヴァレンティーネと呼ぶ街まで運ぶのだ。セオフィラスが戻れば元の姿を取り戻すことが出来るだろうが、様子が気になる』
深冬はパルス達に目配せした。
精霊を解放することが出来たのですぐにでも次の街へ旅立ちたいところだったが、街の様子は確かに気になるうえ精霊の頼みとあっては断る理由もない。
彼らは頷き合うと、ヴァレンティーネへと歩を進めた。

白い石畳に、白と青を基調とした美しい建物の数々。

美観を損ねないようにと整備された街並。
街の至るところに設置された噴水からは常に澄んだ水が溢れ、街に隣接する湖セオフィラスは、神聖ささえ漂わせながら存在している。
……どんなに美しいのだろうと。
足を踏み入れる前に聞いて期待を寄せていた本来の姿を、ヴァレンティーネもまた、取り戻そうとしていた。
セオフィラスに光の粒が降る様子を、街の人々も見ていたのだろうか。
華奈達がセオフィラス側から街へ戻ると、観光スポットなのであろう高台の柵から身を乗り出してまで湖をまじまじと眺める人々の姿が目に入った。
興奮し声を荒げる者、恍然と見つめる者、言葉を失い涙する者……
反応は人それぞれだが、セオフィラスの復活を喜び感動している気持ちは全員が同じのようだ。
喜びはしゃぎ回る子供達が、湖により近付こうと華奈達が戻ってきた道を駆けていく。
すれ違い様、華奈達は思わず表情を綻ばせた。
この子供達の笑顔も、街人達の感動も、自分達が取り戻したのだ。
自然と軽くなった足取りで進むと、至る所に設置された大小様々な噴水から弱々しいながらも水が溢れる様子や、建物の周囲を囲むただの窪みだと思っていた部分に澄んだ水が流れる様子が目に入る。
青と白を基調とした街並は水が無くとも美しく感じることは出来たが、水と共存する姿の方が比ぶるべくもなく格別に美しいものだった。
心なしか薄暗く感じた街の雰囲気も、取り戻されたものたちの影響で明るく見える。
そのような考えを巡らせながら華奈達は歩き、彼らは、自然と街の中心部へと辿り着いていた。
円形の浅い堀に囲まれた、街の中でも一際大きく美しい建物。

その丁度正面に位置する、街の中で一番大きな噴水。
未だ弱々しいながらも元の姿に戻ろうとするそれを見て深冬が感動していると、ふっと、姿を消していた精霊が再び深冬の中から現れた。
精霊の表情も綻んでいる。
自分達と同じ気持ちなのだろうなと深冬は思った。
『少しだけ、手助けを』
そう言って、精霊は噴水に手を翳す。
すると、弱々しかった水が勢い良く吹き出した。
吹き出した水は一度だけ高く上がって花火のように弾けて虹を作り、そして、元の姿に戻る。
無論、直前までの弱々しいものではなく、加護が失われる前の本来の姿に。
澄んだ水を常に力強く溢れさせる噴水。
水飛沫が掛かることなど構わずに、華奈達はその姿を満足そうに見上げた。
噴水のある場所で同じことが起こっているのか、至る所から、街人達の喜びの悲鳴や歓声が聞こえてくる。

その声を聞きながら、水面に映る街並を眺めながら、彼らは感慨に耽った。
華奈達は突如として訳の判らない状況に放り出されて、パルス達は命を失う覚悟で臨んだ空間移動の儀式を越えて、ようやくひとつ、クリアすることが出来たのだ。
だが。
今回の精霊の解放で自分達の存在や足取りを魔族に気付かれたとするなら。
いや……もはや、気付かれたであろうと断定した方が良い。
洞窟の最奥に仕掛けられていた魔物は、自分達に反応して魔方陣により召喚されていた。

己の仕掛けた魔方陣が発動し召喚した存在の生命力が途切れたことは、仕掛けた者自身ならすぐに判ることだ。
ともかく、そのことにより今後魔族側の動きは激化する可能性が高く、安堵して気を緩めている暇など無いだろう。

……などと今後の敵の動きなんかを推測していたパルスが、突然背後から何者かに襲撃された。
思い切り突撃されたためパルスは倒れ込みそうになるが、寸でのところで踏みとどまり、噴水にダイブすることは免れる。
「……おい」
未だ自分に体重を掛け続ける襲撃者の正体が判っていたパルスは、青筋を幾らか浮かべて振り返った。
しかし襲撃者華奈は顔を真っ青にして彼ではない何処かを見て、口をぱくぱくとさせている。
あまつさえ、身を隠したいのかパルスの外套の中に潜り込んできた。
「何をしているんだお前は」
声が出ないのか出せないのか華奈からの返答は無かったが、代わりに外套の隙間から震える手を出して何処かを指差す。
その先にあったものを見て、パルスは思わず得物に手を掛けて何歩か引いた。

陽の光を浴びて一層輝く青白い肌。
限界まで見開かれた、血走る濁った眼。
右手をこちら側に差し出した変なポーズのままガクガクと超振動の如く痙攣するやたらと痩せ細った身体。
見たら絶対呪われると思わざるを得ない様相でそこにいたのは、この場所へ初めて訪れた時に思う存分恐怖を与えてくれた男性神官ホリスだった。

彼はどうやら何かに衝撃を受けてそうなったらしいが、はっきり言ってこちらの方が衝撃である。
しかもよほど急いでいたのか焦っていたのかそれとも性癖なのかは知らないが、人が通れるか通れないか程度に開いた神殿の扉に挟まっているような形で身体が半分だけ出ているものだから尚更だ。
フラットとカイリも思い切り引いており、深冬も手近にいたらしいフラットを盾にして懸命にホリスを視界に入れないようにしていた。
華奈はパルスの外套の中でぶるぶると震えながら「あれ怖い呪われるあれ怖い呪われる」と念仏のように呟いている。
ホリスは声にならない声というかもはや怨霊の呻きにしか聞こえないものを上げながら扉の隙間からずるりと抜けだし、じわじわずるずると華奈達の方へ近づいてきた。
これはもう殺らないと呪われるだけでは済まないかも知れない。
何人かがそんな考えに行き着いたその時、ふわりと微笑みながら環が前へ出た。
「ホリスさん、どうされたんですか？」
声を掛けられたホリスはカッと見開いた目をぐわっと顔ごと環の方へ向ける。
だが環は誰もが裸足で逃げ出しそうなその恐怖映像を目の前にしても平然としているばかりか、可愛らしく首を傾けて返答を促すという偉業までやってのけた。
痙攣のし過ぎで疲れているのかホリスはゼェゼェと今にも本物の怨霊と化しそうな程の息づかいで、それでも何とか口を開く。
「い、今……精霊が……ふ、噴水がっああっあああぁぁぁ」
つい先程深冬の中へ消えてしまった精霊がいた辺りを指差し、ホリスはガクガクと不自然な動きで更に恐怖を振りまいた。
「ええ、街は元に戻ったんです。セオフィラスも、元の美しい姿に戻っていますよ」
環はにっこりと微笑む。

アレを相手にして普通に受け答えしている環の方が怖いかも知れないと、誰かがこっそりと思った。
環と話していて落ち着いてきたのか、ホリスは徐々に普通の様子（それでも立っているだけでホラーだが）に戻っていく。
胸元を押さえ己を落ち着かせてから、彼は口を開いた。
「……精霊とまみえることなど、奇跡のような恩寵を受ける神官の存在無くしては有り得ないこと。
私も長く神殿に仕えてきましたが、シュゼットの儀式に立ち会うことにより数度しかその御姿を拝見したことがありません」
一度息をついて、ホリスは澱んだ目を深冬へと向ける。
「しかしながら、先程貴女へと還っていった存在は、水を守護する精霊そのものとお見受けしました。もう一度聞きます。あなた方は一体何を？
……一体、何者なのですか？」
畏怖と敬意と疑念が入り交じった、澱んだ眼。
じっと見据えられて、深冬は上着の裾を握り締め、戸惑った。
最初にこの場所を出立する時に掛けたものと同じ言葉では、目の前の神官は納得してくれそうにない。
だが自分達が何なのか、何をしているのか答えるということは、精霊が封じられ世界が危機に瀕している事実を　この神官に教えるということでもある。
この神官に際しては魔族に婚約者をさらわれている為、既に世に起こっている不穏な事象に巻き込まれてはいるのだが……それでも、不用意に何も知らぬ者に対して不安を与えることはしたくなかった。
澱んではいるが真っすぐな眼。
何かを返さなければという義務感だけで、どう答えれば良いのかも判らないまま、深冬は口を開きかける。
しかしその時、辺りに声が響いた。
『水の神官よ、聞け』

高めだが、威厳と凛々しさを備えた声。
先程その御姿を見て一目で判った時のように。
神官長の祈りや儀式を補佐してきたホリスには、その声の主が誰なのかなどすぐに判った。
『世界の各地で様々な不穏な事象が起きていることは知っているだろう。だがお前も知る通り我々は直接動くこと　が出来ぬゆえ、彼らに動いて貰っている状態だ。
彼らは我々の使いであり、代行者である』
己が奉る対象であるものの声。
彼がそれを信じない訳にはいかない。
『彼らを阻むな』
彼がそれを受け入れない訳にはいかない。
彼の眼差しから疑念が薄れていく。
だが、代わりに、別の情が強く浮き出てきた。
遺憾、嫉み、悲嘆。
表情を見るだけで判る、そういった類の感情。
ぶつけどころのないそれらの感情を、彼は、必至に己の内側に押し戻そうともがいている。
何処から響くとも知れない声に対して真っすぐに視線を向けて、彼は、一言だけ呟いた。
「……精霊よ、彼らの為す先に、あなたの恩寵を受けた神官長の無事な帰還はあるのでしょうか」
その言葉が、彼の複雑な感情の全てだった。
彼は神官として、街やセオフィラスに起こった事象に対して胸を痛めていただろう。
初めて会った際に、街の置かれている状況について話してくれた時に伝わってきた感情に決して嘘は無かったと、華奈達は感じている。
しかし彼が一人の人間として最も胸を痛めていたのは、己の愛する者の安否だった。

当然だ。
華奈達とて、世界などという大層なものの顛末を常に見据えて動いている訳では、決して無い。
変な事象に巻き込まれた友人を助けたい。
今では他にも様々な想いが芽生えてはいるが、根本としてはたったそれだけの為に、華奈達は動いている。
世界の救済など、その先におまけのようにくっついてくる結果でしかないのだ。
シュゼットが何に巻き込まれ姿を消したのかなどホリスには知る由も無いだろうが、大切な人が精霊の言う“不穏な事象”とやらに巻き込まれているのかも知れないと察知してしまったら、己の手で助けに行きたいと願うのは当然のこと。
けれど、精霊はそれを行う使命を自分に与えてはくれなかった。
そればかりか、突然現れた誰とも知れぬ代行者とやらに疑念を向けた自分に対して、阻むなと、抑圧する言葉しかくれない。
現在神殿を任されているという立場も、街を離れることを許してはくれない。
ならばせめて、シュゼットが無事に戻るという確約が欲しい。
ホリスは返答をくれない虚空から視線を彷徨わせ、深冬の目を捉えた。
普段であれば恐怖で即刻逃走する深冬も、その視線だけは真摯に受け止める。
そうして、彼女は精一杯微笑んだ。

「大丈夫。元に戻ります、きっと」

彼女の言葉と同時に、ふわりと、彼女の背後に精霊が姿を現す。
精霊は真っ直ぐにホリスを見据え、不敵に笑った。
それは一瞬のことで、精霊はすぐに姿を消してしまったけれど。
彼女の言葉こそが答えだということが、ホリスには充分過ぎるほ

どに伝わっていた。
ぶつけどころのない感情は未だ渦巻くが、己の奉る存在の加護をこうまで受ける者の言葉を、己が信じない訳にはいかないだろう。
「精霊の御使いよ、貴女の言葉を信じ待ちましょう。ですから、どうか……」
そこで言葉を切って、ホリスはその場に跪いた。
両膝を折り、片腕を胸元に添えて深く頭を垂れる。
第二世界で祭事に使われる最上級の礼に似ていた。
「あ、あのっ、私達、そんな頭を下げられるほどたいしたものではないのでっ！　やめてくださいっ！」
なんだかかえって申し訳なくなって、深冬は焦ってわたわたと手を振る。
ホリスはゆらぁりと顔を上げ、かくんと首を傾けて深冬を凝視した。
深冬はびくりと肩を震わせて冷や汗を浮かべる。
冥界の人にあっちの世界へ引きずり込まれるかのような緊張感が蘇り、視線を逸らした瞬間何かが起こるような気がしたので視線はそのままで深冬はじわじわと後退してみた。
「そうはいきませんんんんん！！！！！」
「ひぃっ！！？」
冥界の人に突如ぐわっと詰め寄られて肩を掴まれ、深冬は本気で涙目になって悲鳴を上げる。
視線を逸らさなくても何かが起こってしまった。
「うっ、うたっ、宴！！　そう、宴だ！！　街を救って頂いたお礼に宴を開かなくては！！」
「けっ…けけけ結構ですから！！　本当にたいしたことしていませんから！！　だっ、誰かぁ、助けてええぇ！！」
「そうはいきませんんんんん！！！！！」
ガクガクと超振動するホリスと一緒に振動する深冬。
助けたいのはやまやまだったが、巻き込まれるのが嫌なので一同

は何歩か引いて見守ることしか出来なかった。
尤も、環だけは「あらあらホリスさん張り切ってるね」などとひとりほのぼのとしていたが。

2―7　増えてゆく、その理由

ホリスの号令で神殿内や街の方からぞわぞわと人が集まり（どうやらホリスは位の高い神官だったらしい）、宴の準備らしきものは瞬く間に整えられた。

街の様子を見たらすぐに旅立つつもりであったのに、断る隙もない。

しかも、ホリスの恐怖と勢いに圧されている間に神官達が現れ深冬を何処かにさらっていってしまったので、逃げるに逃げられないという状況。

夕刻も過ぎ薄暗くなってきてしまったこともあり、華奈達は今晩この街に滞在する覚悟を決めざるを得なかった。

そうと決まれば、華奈の気持ちの切り替えは早い。

華奈は神殿を中心に立食パーティー会場のような感じに装いを変えた街の通りを、皿とマイ箸（第三世界に箸が無いので旅の途中で作った）を手に一人ふらふらしていた。

正確には、視界に捉えられる範囲内に、さらわれた深冬以外の者……環も騎士達もいる。

彼らも各々興味のあるものを見たり、街人達と話しがてら情報収集をしたりしているので、華奈は華奈でこうして食指の動かされるまま、並べられた色とりどりの食べ物を物色しているという訳だ。

現在、このヴァレンティーネの中心にある大きな通りは、あちらからもこちらからも美味しそうな臭いが漂い、街人達の明るい会話や笑い声がひっきりなしに聞こえてくる。

白と青の街並に取り戻された、澄みきった水の流れ。活気。

良い光景だな、と。華奈は自然と笑顔になって、上機嫌で美味し

い料理探しを再開した。
だが、ふいに、団子の串焼きのようなものに手を掛けたところで何かの気配に気付き、振り返る。
……拝まれていた。
だいぶご年配のおじいさんが、跪いて何事かをぶつぶつと呟きながら華奈を拝んでいる。
先程から街人達に何度か感謝の声は掛けられていたが、拝まれたのは流石に人生初体験だった。
「あの、おじいさん、あたしは通りすがりの女子高生でして神でも仏でもありませんので……」
華奈の言葉の意味が判らなかった老人は首を傾げ、拝むのを止めて立ち上がる。
老人は握手を求めてきたので、華奈は少々照れながら右手を差し出した。
団子を持ったままだったことに気付いて、しまった、と思うも、老人は気にする風も無く団子を持ったままの手を両手で握り、嬉しそうに皺だらけの顔をくしゃくしゃにしてその手を上下に振る。
「いやあ、ありがとうなぁ。こうして催しが出来たのも、あんたらが街を元に戻してくれたお陰だぁ」
「も、催し？」
「んだぁ。降霊祭ってな、こうした精霊様の神殿がある街じゃあ恒例の行事なんだがな。本当は十日前にやる予定だったんだが、街もこんな状態で神官様も行方不明ってんで、祭どころじゃなかったかんなぁ」
なるほど、と、華奈は思った。
突発的な宴にしてはやたらと準備が早いなと思っていたが、中止になっていた催しの準備があらかじめしてあったということなら頷ける。
「ワシの孫も神官様と同じ頃に行方不明になっちまってなぁ。祭を見せてやりたかったが……街が元に戻っただけでも有難い話だかん

なぁ。本当に、ありがとうなぁ」
華奈は一瞬目を見開いたが、すぐに満面の笑みを浮かべ、左手に持っていた皿をずいっと老人に差し出した。
美味しそうな料理が盛られたその皿を、老人は不思議そうに目を瞬かせながら受け取る。
老人の皺だらけの目尻には微かに涙が浮かんでいた。
……老人には、自覚は無いようであったが。
「まあまあ、美味しい料理でも食べて待っててくださいって！　絶対に、孫も帰ってくるから」
「……ああ、本当に、ありがとうなぁ」
老人は受け取った皿を両手でしっかりと握って、更に目元に皺を刻んだ表情で頭を下げる。
華奈は励ますかのように老人の肩を叩いてからその場を去った。
団子を片手に、華奈は何となく周囲を見渡してみる。
環も、騎士達も、皆が同じように街人達に感謝の言葉らしきものを掛けられている様子が視界に入ってきた。
思わず笑みが零れる。
その様子を視界に収めたままふらふらしていると、何か黒いものにぶつかった。
「ぶはっ」
我ながら可愛げの無い声が出たなと思いながら、華奈はぶつかってしまったものを見上げ……思わず顔を顰める。
「何だお前か」
「こっちの台詞ですが」
黒い物体の正体はパルスだった。
彼も華奈を見下ろしながら、同じように顔を顰めている。
これはもう戦闘開始するしかなかった。
「ぶつかってきておいて随分な言い草だな。そのうえ今日二回目か」
「漢なら衝突されたくらいでぐだぐだ言わないで頂けますか。先程も含めてドウモスミマセンデシタ」

「ついでのように謝られても誠意を感じないな。大体団子片手に気味の悪い笑いを浮かべて余所見なんぞしながら歩いてるからぶつかるんだろう」
「団子は関係ないでしょ団子は。しかも気味悪いとは何だね乙女に向かって。折角今後について想いを馳せていたというのに台無しだわ」
「ほう、何を馳せていたって？」
むっとして華奈は何事か言い返してやろうと構えるが、嬉しそうな街人達と対話をしている環達が視界に入り、再び、笑みを零す。
「何ていうかさ、本当に、旅をする理由が増えていくな……って、思っていた訳ですよ」
ふふっ、と嬉しそうに笑う華奈を見て、パルスは戦闘態勢を解いた。
彼は傍目では判らない程度に微かに表情を緩めて、華奈の頭にぽすんと手を置く。
華奈は怪訝そうに首を傾げ、パルスを見上げた。

その時。
神殿の方向から、ざわめきが広がってきた。
一体何事かと、華奈達はそちらを見る。
「おっ、深冬だ」
ちょっとばかり跳躍して神殿の方を見ると、ざわめきの中心にいるのが深冬だということが確認できた。
本日の宴の主役登場といったところか。
ひとまずアノ神官に冥府へ連れて行かれたとかでは無くて良かったと、華奈は思う。
華奈は団子を持った手を振りながら、環の方へ駆けていった。
「タマちゃん、深冬が出てきた！　なんか変な服着てたかも」
「へえ、面白そうだね。前に行ってみようか」
「うん」

華奈と環は人だかりの出来始めた神殿の方へと向かっていく。
騎士達も華奈達や街人達の流れに従い、そちらへと進んでいった。

人の波に多少揉まれながらも、華奈達はだいぶ前の方に出る。
深冬の表情がようやく確認出来る程度の距離だった。
神殿の前に仮設置された祭壇の上に立つ深冬の隣では、ホリスが相変わらず訳の判らない動きをしながら此度街を救って頂き精霊の加護を受けた云々などと何事かを熱く語っている。
それは華奈の脳にはホラー映像としてしか認識されなかったが、感動の所為なのか慣れている所為なのか、ホリス　の様相に対して目を逸らしたり引いたりなどの素振りを見せる街人は全く居ない。ある意味凄い光景だなと、華奈は心の中で思った。
そんな中、ホリスの若干後ろに視線を走らせる。
何人かの頭を垂れた神官達に取り囲まれて立つ深冬は。
……やたらと疲弊していた。
その背後に、どんよりとした影を背負っているようにすら見える。
あれだけホリス被害を受けてその後攫われまでしたのだから、仕方の無い事なのかも知れなかった。
攫われた後に何をされたのかは不明だが、その間ずっとホリスと共にいたというのなら、尚更……
気の毒に、と、華奈が団子を持ったままの手を合掌すると、深冬の疲れ切って濁った目をぎろりと向けられる。
目は訴えていた。この野郎後で覚えていやがれと。
いや、あたしだけが深冬を助けられなかった訳じゃない。あたしだけの所為じゃない筈だと華奈は訴え返してみるが、八つ当たり全開の深冬には受け入れて貰えなかった。
彼女がこの後合流した時のことを思い、華奈ががっくりと肩を落とした丁度その頃。ホリスの熱い演説が終わる。
今度こそ体力を使い果たして今にも冥府の住人の仲間入りをしそうなホリスと入れ替わりに、深冬が前へ出た。

流石にあからさまな疲弊の雰囲気を取り払った深冬は、祭壇の中心で照れながら街人達に礼をすると、すうっと、息を吸い込むようにしてゆっくりと両手を広げる。
すると、神殿前の大きな噴水の水、神殿を囲む堀を満たす水……街を巡る全ての水が飛沫となって舞い上がり、中空を踊った。
頭上をゆっくりと飛び交う水飛沫は光源の判らない街灯や照明達に照らされ、光の中にいるような錯覚を覚える。
深冬が恩寵を受ける存在であることを疑いようも無い光景。
街に精霊の護りが戻ったことを疑いようも無い、美しい光景。
街人達の歓喜の声が聞こえる中、華奈達は見入った。
踊っていた水達はやがて元の場所へと静かに還っていく。
幻想的な光景は終わりを告げ、街は普段の姿を取り戻す……筈が。
周囲が突然静まり返った。
不思議に思い華奈は周囲を見渡して、ぎょっとする。
華奈達以外、街人達のほぼ全てが、深冬に向かって跪いていた。
深冬はというと、驚きの余りなのか、微動だにせず呆然とその光景を見つめている。
「なんだか深冬ちゃんが神様みたいな扱いだねぇ」
「そ、そうだね……」
謝意は充分伝わるが、こうまでされると流石に……
(引くわ)
環のほのぼのとした言葉を聞きながら、何人かが心の中で呟いた。

ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー

何度足を運んでも慣れぬ臭い。
開けた空間に出る際に、臭いの所為で歪んでいた表情を元の艶麗なものに戻すと、ライラはヒールの音を高く響かせながら中心へと

向かい、その場所に厳存する者へ言った。
「シュノヴァ。精霊の封印がひとつ解かれたわ」
「……判っている」
「判っているのなら何をそんなに悠長にしているの」
「そろそろお前が来る頃だろうと、思っていた」
ライラの方を見もせずに、シュノヴァは告げる。
彼の視線の先、魔方陣の中程には、赤黒い翼を持つ人型の魔物がいた。
銀の剣を構えた魔物は、腕に何かを抱えている。
ゆるやかに波打つ長いプラチナブロンドの髪に、白磁の肌、伏せられた瞳。
気を失ってはいるようだったが、それは絶世のと言っても過言ではない程の、美しい人間の女性だった。
魔物はその場所へと跪くと、立てた己の片膝の上に女性を横たえ、彼女の白い首筋に銀の剣を走らせる。
無惨に切り裂かれた首筋からは赤い血が溢れ、傷口に宛がわれたままの剣を伝って忌まわしき床の上へと落ちていった。
女性の血を受けて床が鈍く光る。
血はまるで意志を持つかのように蠢き、何かの紋様を描きながら広がっていった。
広い空間の床を埋め尽くす巨大な円陣。
均等に六つの区画に分けられたそれは、各区画全てに複雑な紋様が描かれているが、そのどれもが完成していない。
そのうちの一つ。青黒く鈍い光を放つ区画の二割程度を描いたところで、血の蠢きは止まった。
あとほんの僅かで、青黒い区画が完成する。
そのことを確認して目を細めると、シュノヴァはゆっくりと右腕を薙いだ。
魔物が女性の首筋から剣を遠ざける。
シュノヴァが女性の首筋の傷に沿うようにして指を這わせると、

彼の指の動きに合わせ痛々しい首筋の傷は塞がっていったが……
先程までは暖かみのあった女性の顔色は、完全に血の気を失い青白くなっていた。
「先日の不審な空間越え。あれは恐らく、魔の精霊の仕業だ。封印の間際に軽微な魔力を切り離し何をするかと思えば、封印を解除し得る程の力を持つ者を召喚したらしい」
「では、封印を解除したのはその……」
「第二の世界の者か、第一の世界の者か。どちらであろうと知ったことではないが、相当の加護を得ている存在であることは確かだ」
そう言って初めて、シュノヴァはライラを振り返る。
だがその心は、彼女を見てはいなかった。
「水の都市より未だ遠くは無い。捜し出して阻止し、その血を得る」
暗に“行け”という意の含まれた言葉。
ライラは返事もせずに勢い良く振り返り、出口へ向かう。
その背に向けて、シュノヴァは言った。
「同時に空間越えをした者達を、彼の者と同じ場所へ捕えてあるのだったな」
「……ええ、そうよ」
足を止め、ライラは答える。
背中で、彼女はシュノヴァが微かに笑ったのを感じた。
「後程、挨拶にでも伺うことにしよう」
ひくりとライラの眉が動く。
それ以上の変化は見せずに、彼女は再び歩き出した。
「どうぞ、お好きなように」
言いながら、彼女は空間を後にする。
血生臭い場所を出て薄暗い通路に差し掛かると、彼女は思いきり顔を歪め、唇を噛んだ。

－＊－＊－＊－＊－＊－

宴の翌日、未だ朝靄の掛かる早朝。
華奈達はヴァレンティーネを後にした。
出立をこのような早朝にしたのは、皆が起き出してくる頃だと昨夜の勢いのまま大勢でお見送りなんぞをされかねないと危惧した為である。
ホリスは是非そのようにしたかったようだが、朝っぱらから精神疲弊するのは避けたかったゆえ、強引に押し切った。
それでも、ホリスを始め神殿の神官総出で、かつ起床の早い年配の方々数名がおまけについてきていたのだが。

次の目的地、ヘザーベアネス。
何人かが頭に叩き込んだ地図を思い描き、場所を反芻する。
どうあっても地図を覚えることなど不可能な華奈は、道案内は他の人達に任せることを即決し、隣を歩く深冬を見た。
昨日に引き続き、先程のこともよほど衝撃的だったのか、彼女は未だぼんやりとどこか遠くを見ている。
見送りの際。
その場に来た者全員が、昨夜同様、深冬に対し跪いていたのだ。
そのうえ、彼女が軽く手を挙げれば立ち上がり、下げれば再び跪くという隷従っぷりである。
お陰で危惧していた八つ当たりは来なかったが、流石に心配になって、華奈は深冬の顔の前でぴらぴらと手を振ってみた。
「おーい、深冬〜？」
「……ハルちゃん」
視線は遠くを見たままだが、反応が返ってきたことで華奈はほっとする。
しかしそれも束の間。

「民草をひれ伏させるのって……こんなに気持ちの良いことだったんだね……」

くすり。

微かだが確かに響く、そこはかとなく黒い笑い声。

華奈は思わず真顔で目を瞬いた。

更に耳だけでなく目がおかしくなっているのか、深冬の表情が若干恍惚としているようにすら見える。

まさか目覚めてしまったというのか、女王様的な何かに。

「あっ、何でもないよ、気にしないでね！」

数瞬後、深冬は慌てて可愛らしく訂正するが、華奈と先程のやり取りが聞こえてしまっていたその他数名の心の中に植え付けられた恐怖を振り払うことは出来なかった。

3―1　娯楽、追加入ります

「ユーグベルさん。茅斗先輩を好きにして構わないので娯楽の追加を要求します」
愛花の言葉を受けて微かに眉を動かし、ユーグベルは端整なその顔を興味深げに牢屋の中へ向けた。
視線を受けた一点がびくりと跳ねる。
彼から見て、天蓋付きの大きなベッドの裏側。
彼の獲物がいつも隠れているその場所。
ユーグベルは妖艶に笑んで、今度は鉄格子に手を掛けて彼を見る目の前の少女に視線を移した。
「娯楽なら、本棚をひとつ用意してやった筈だが？」
「育ち盛り本大好き少年少女が本棚一個分の書籍で満足できる訳がないじゃないですか。こんな場所にいつまで閉じ込めておく気なのかは知りませんが、書籍なら今までの倍以上に増やして貰うか、定期的に中身を入れ替えて貰うか……あと何か他の娯楽は無いんですか」
「他の娯楽、ね」
ユーグベルは寄り掛かっている机を右手の人差し指でかつかつと鳴らしながら、伏し目がちになり、逡巡する。
その所作すら美しい。
これでホモでさえなければな、と、綾瀬は思った。
前にそのことについて悶々と考えていたら「貴女達の世界でいうバイセクシュアルというやつですよ」とシャスタが教えてくれたが、綾瀬には何のことやらさっぱりである。
愛花に聞いたら「何でも喰えるということです」という答えが返ってきたが、やはり綾瀬にはさっぱりだった。
ホモは好き嫌いが無いということだろうか。
好き嫌いが無いのはまぁ、良いことだけれど。

綾瀬がそんなことを考えていると、何かを思いついたのかユーグベルは机を鳴らすのを止めた。
切れ長の目が、愛花に向けられる。
「お前達にとって朗報とは言い難いがな。お前達の仲間の居所を突き止めた」
「！！」
途端に険しくなる、牢屋内の者達の表情。
ユーグベルは面白そうに笑んで言葉を続けた。
「私達にとっては嘆かわしいことだが、お前達の仲間は精霊に施された封印をひとつ破り、次の封印箇所に向かっている。機を見て私達はそれを阻み、お前達の仲間には魔方陣の糧となって貰う予定だ」
敵意を剥き出しにした鋭い視線が刺さる。
それすら面白そうに、ユーグベルはクツクツと笑った。
「まあ、それは恐らくしばし先の話だろうからどうでも良い。私が言いたいのは、機を見る為にお前達の仲間に監視役を付けているということだ」
「監視ですって？　この変態」
愛花は速攻で切り返すが、ユーグベルは面白そうな笑みを深める。
「そんな言い方をして良いのか？　私が望めば、この場に監視役の見ている映像を映し出すことが可能だというのに」
ぴたり。
牢屋内から彼に向けられる敵意が消えた。
「それが私の提案する他の娯楽ということになるが？」
盗撮だろうが何だろうが、友人達の安否を映像で確認できるなんて、愛花達にとっては最上級に魅力的な言葉である。
目の前の魔族が何を考えてそのような提案をするのかなど知ったことではない。見せてくれるというのなら、見せて貰わない手は無い。
それに何だか……面白そうでもあるし。
愛花は先程の暴言など存じませんとばかりに綺麗に掌を返した。

「流石に色男は話が判るようですね。盗撮万歳。ささ、早く映像をお願いします」
「わー、ハルちゃん達どうしてるかなぁ。楽しみ～」
「絶対暴れてるに違いないとは思うけどな」
「きっとお元気な筈ですよ」
わいわいぞろぞろと鉄格子越しにユーグベルの方へと集まる一同。
茅斗も枕を盾にしてユーグベルと視線を合わせぬよう尽力しながらカニ歩きでじわじわと近づいてくる。
くすりと笑って、ユーグベルは懐から半球型の透明な石を取り出し、己の寄り掛かる机の上に置いた。
彼は気だるそうな所作で石に手を翳し、長い指で中空に何かを描く。
すると、透明な石は一瞬淡く光り、弥鷹達の正面の白い壁に何かを映し出した。
上空からであろうアングルで素早く流れていく木々。
監視役というのは空を飛べるモノなのか。
まあ、この世界には空を飛ぶ魔物も存在するようであるし、実際に目にしたこともあるし、不思議な話でもないか。
そんな事を弥鷹達が考えていると、木々の流れが途切れ、開けた道に出る。
映像はどんどん上空から地面の方へと近付いていった。
その時ふと、ある程度整備されたその道に動く影が幾つか映し出されていることに気付く。
影は六つ。
弥鷹達が、シャスタが、それぞれ見覚えのある人物達。
気付かれないよう遠くから監視している所為で内容は殆ど聞き取れなかったが、彼らが元気に会話をしながら歩いているということだけは判る。
変わらぬその姿を見て、弥鷹達はまず安堵した。
茅斗もユーグベルがすぐ近くにいるというのに枕で視線を遮断す

ることなど忘れ、弥鷹達と一緒に目の前の映像に見入る。
「ハルちゃん達、元気そうで良かったぁ」
「まあ、華奈達なら何処に放り出されても平気だろ、順応性高いだろうし」
「俺達も人のこと言えないけどな」
あはは、と、弥鷹達は顔を見合わせて笑った。
彼らのその姿を見て、シャスタも嬉しそうに笑う。
だが普段は悠然と振る舞うシャスタこそが、内心では一番深く安堵していた。

特に精霊の影響を強く受けるこの世界において、シャスタは精霊の目を通して世の物事の全てを識り、精霊達の助力さえ得られれば、精霊全ての力を操ることすら出来る。
しかしそれは、精霊の力が正常に世を満たしていればの話。
気を失った状態で第三世界へと連れて来られ、すぐさま精霊の力の流れを遮断する結界の張られたこの場所へと捕えられ。
シャスタは、只々精霊達が封印されていく気配を感じることしか出来なかった。
魔方陣の贄となる為に人々が攫われていることを知っても、パルス達が第三世界へ渡ったことを知っても……何も出来ない。
……絶望的な無力感。
一体何の為の力だと、不毛と知りつつも己を責めた。
更に、デルヴィスが切り離した魔力が生きている間はパルス達の存在を感じることも出来たが、それすら消え去り。
弥鷹達がこの場所に連れて来られてからは、警戒の為か牢屋に張られた結界も更に強化され、精霊が一柱解放されたことすら察知できぬ状態となってしまった。
弥鷹達が来てくれなかったなら、たった一人でこの絶望に耐えられたかどうか判らない。
己の親衛隊であり、親友でもある騎士達。

彼らの力を信じてはいたが、こうして実際に無事な姿を確認したことで得られる安心感は何ものにも替え難かった。

（……よくぞ、今まで無事でいてくれた）

押し寄せてくる感慨に耐えるように、シャスタは唇を引き結ぶ。

と、誰かがさり気なくシャスタの背を叩いてきた。

彼の心情を正確に察して励ましてくれているかのような、その行為。

シャスタは微かに目を見開いて己の背に添えられた手の主を探す。

静かに彼を見遣るその手の主は、愛花だった。

顔や気配に内面の揺らぎを出しているつもりは無かったが、判る者には判ってしまうということか……それとも愛花が特別そうした能力に長けているのか。

どちらにせよ案じてくれたことを有り難く思い、シャスタは穏やかな笑みを愛花に向ける。

微かに微笑み返し、愛花は目の前の映像に視線を戻した。

「この人達がシャスタ様の親衛隊の人？」

知らず目元を濡らしていたものを拭いながら綾瀬が問うと、シャスタも映像に意識を戻す。

「ええ。私の親衛隊であり、友人達です」

「やっぱり、シャスタ様のご友人だけあって格好良い人たちですねっ！」

予想通りっ、と何故か得意げに言いながら、綾瀬は胸元で手を握って瞳を輝かせた。

予想ではなく妄想だろうと心の中で密かに突っ込みつつ、弥鷹達はため息を吐く。

だが確かに整った顔の連中だと、同性の弥鷹も茅斗も思ってはいた。

類は友を呼ぶというのはこのことか。

などと弥鷹が考えていると、映像の中の六人の足が止まった。
何事かと思えば、華奈とシャスタの友人その一の黒い男が、何やら向き合って口論をしている。
それをシャスタの友人その二の眼鏡の男が適当にたしなめ、その三の優男風の男と深冬と環は面白そうに二人の様子を観察していた。
「ほほう」
愛花の目がきらりと光り、彼女は興味深そうに映像を見る。
シャスタも物珍しそうに黒い男を見た。
何を言っているのかは聞こえないが映像の中の二人は白熱しているようで、鼻が触れそうな程に顔を近付けてガンをくれ合いながら口論を続けている。

弥鷹は、己でも知らぬ間に眉を顰めていた。
「タカ君……」
横から声が掛かる。
はっとして弥鷹が声の方を見ると、綾瀬と茅斗から向けられた生温かい視線と遭遇した。
「タカ君」
「何だよ」
「ハルちゃん、凄く楽しそうだよ」
「良い事だろ」
「タカ君以外の人とあんなに楽しそうに喧嘩してるんだよ？」
「だから何だよ」
そっけなく言うと、二人の生温かい視線が強められる。
んもう、素直じゃないんだから。
言葉にされなくとも判る。恋愛話大好きな乙女全開とばかりにきらきらと輝いた綾瀬の目は、はっきりと弥鷹に向かってそう告げていた。
弥鷹の背中に嫌な汗が滲む。
「パルスがあんな風に誰かと喧嘩などしているのを見るのは初めて

です」
その時ぽつりと、目を細めながらシャスタが言った。
愛花と綾瀬はその話に喰らい付く。
「パルスって、華奈先輩と戯れているご友人の名前ですか」
「ええ」
「普段はどういう人なんですか？」
「そうですね……凛然として厳しい男です。近しい者の前以外で……いえ、近しい者の前ですらその態度を崩すことは殆どありません」
親衛隊として。第二世界最強と言われ諸国から畏れられる存在として。
彼が周囲の者に対して向けていた峻厳な態度を思い出しながら、シャスタは言う。
それでも立場が同じで近しいフラットやカイリには態度を崩すことも多かったが、同じく幼少から共に育ったというのに、立場と父王に対する恩義を重んじてか自分にはあまり気軽に接してはくれなかった。
それが彼の性格だとシャスタは知っていたから、少し残念に思いつつも苦痛に感じることは無かったが。
「へえ、そんな人が」
「ハルちゃんと、あんな風に……」
弥鷹に向けられる生温かい視線の数が増えた。
彼の背を伝う嫌な汗の量もどばっと増える。
「だからお前らさっきから何が言いた……」
「タカ君、ハルちゃんのこと好きだもんねぇ。微妙な心境なんじゃない？」
ぶはっ。
弥鷹の言を遮るようにして投下された綾瀬の爆弾発言に、弥鷹は思わず全力で吹いた。
口の中に何か入っていたら現場は実に凄惨な状況となっていただろう。

「な、何言って……！」
「気付いてないの華奈先輩くらいですよ、弥鷹先輩」
弥鷹はげほごほとむせながら慌てて言い返すが、愛花にびしりと切り返されて轟沈した。
何でだ。誰にも言ってない筈なのに何で判ったんだ。
本気でそんなことを考えながら、弥鷹は頭を抱えてその場に蹲る。
だが愛花達からしてみれば、ばれていないと思っている方が不思議でならなかった。
普段から快活で喧嘩を売ってくる相手以外には人当たりも良い弥鷹だが、華奈とつるんでいる時だけ微妙に生き生きしているうえ、時折何でもない時に優しげに目を細めて彼女を見ていることもあるのだ。
そんな面白い光景を特に綾瀬が見逃す訳もなく、又、付き合いの長い者達が気付かない訳も無い。
尤も、華奈にそれに気付く気配も何かが芽生える気配も全く無いというのも周知の事実だったが。
……それでも、華奈がおいおいそういった感情を抱くとしたら弥鷹しか考えられないというのが、愛花達の認識であったというのに。
（意外なところで意外に好敵手の登場……だったら面白いな）
映像を見ただけでは華奈が黒い人にそういった感情を抱いている気配など全く感じないが、シャスタの話を聞く限り黒い人の方は定かではないことであるし。
弥鷹には悪いがこれは最上級の娯楽だと。
愛花は提供してくれたユーグベルに心の中でこっそり拍手を送りつつ、生き生きと口論する華奈が映し出される白い壁を見た。

3―2　望まれぬ支配者

ヴァレンティーネを発ってから、ちょうど5日。
乾いた砂塵の舞う華奈達の視界の先に、ようやく建物らしきものが見え始めた。
発ってからしばらくは風景を楽しめる程度の自然の姿を見ることが出来たが、ここ2日間は整備された道も途切れ、見渡す限りが地の色とも言えぬ安っぽい黄土色の大地と砂ばかり。
砂漠でも広がっているのかと何人かは思ったがそうではなく、どちらかと言うと、乾燥し草木すら枯れた荒野という雰囲気だった。
「おっ、街発見」
楽しむべく風景も無くそろそろ暇の境地であった華奈は、砂で霞む建物の集合を発見して気分を盛り上げる。
暑くはないが乾燥が酷い気候にげんなりしていた深冬も顔を上げて表情を明るくした。
「歩いた距離を考えると、あれがヘザーベアネスなのかなぁ」
「そのようですね」
誰にとも言えぬ深冬の問いに、カイリが迷いなく答える。
真っすぐにどこか一点を見ながら答えるその様子は、ヴァレンティーネの時の深冬と雰囲気が似ていた。
彼に加護を与える精霊が封じられているのであろうことを、全員が確信する。

華奈達は街の目の前へと辿り着いた。
木製のアーチ状の大きな看板に、ヘザーベアネスの名が記されている。
遠目で見た限りヴァレンティーネの倍以上はありそうな大きなこ

の街の、入り口ということなのだろう。
……が。
「何か、寂れてるね」
ぐるりと街を見渡しながら、華奈がぽつりと漏らす。
しかし正直、全員が同意見であった。
ヴァレンティーネも精霊を解放する前は何となくどんよりしていて活気が無かったが、未だ街の入り口とはいえ、一人として人間の姿が確認できない。
不振に思いながらも、華奈達はどことなく西部劇を思わせる雰囲気の街の中へと足を踏み入れた。
「カイリ、何か感じるか？」
「いえ……微かに、精霊の気配らしきものは感じますが、弱くて判り辛いですね」
「こうも人が居ないと、情報収集しようにもどうしようもないな」
歩きながら、どうしたものかと一同は首を捻る。
正確には人の気配がないのでは無く、気配はあるが建物の中から出てこようとしないのだ。
中にはこちらの様子を伺うようなものもある。
それに加え、街全体の空気が張り詰めているような雰囲気で、不快だった。
情報収集ねぇ、と、華奈は口の中で呟き、とある看板を発見してぽんと手を打ち鳴らす。
「展開としてはベタですが、あそこなら何かしら聞けるんじゃないですかね皆さん」
華奈が首で示唆した方向を全員が見ると、酒場と書かれた建物があった。
確かに静かだが中から人の気配もするし、何かしらの情報は聞けるかも知れない。
「食事も出来るかも知れないね」
「そういえば、お腹空いたね」

そろそろ昼食の時間であることに気付いた環が言うと、深冬が可愛らしく俯いてお腹を押さえた。
朝はパンに乾燥肉や果物を挟んだ簡単なものをつまんだだけであるし、確かに食事も取っておきたい。
「おし、お昼ごはんがてら情報収集で決定だ！」
「情報収集の方が重要だがな」
「細かいこと気にしてるとハゲますよ、黒い人」
いつもの言い合いを聞きながら一同は酒場へと近付き、先頭であった華奈が腰から胸の高さ辺りまでの木製の観音開き戸を勢いよく開いた。

静かだった店内に蝶番の軋む音が酷く響く。
まるで隠れるかのように静かに酒を煽っていた数名の客達は、突然現れた賑やかなものにぎょっとして入り口の方を見るが、すぐさま視線を逸らして手元のグラスの中身を煽ることに集中し始めた。
……いや。
グラスを煽る振りをして、彼らは華奈達を気にしている。
歓迎されていないのか、やはり漂ってくる張り詰めた空気。
そんな異様な雰囲気に気付きながらも、華奈達は周囲の空気など完全無視を決め込んでずかずかとカウンターの方へ近付いていった。
「い……いらっしゃいませ」
6人で並んでカウンター席に座ると、少々戸惑いを含んだ声が掛けられる。
カウンターの内側に立っていたウエイトレス風の若い女性だった。
「こんにちは。ここは食事は出来ますか」
「は、はい」
「では、適当にお勧めのものを6名分頼みます」
「畏まりました……」
フラットが頼むと、女性はすぐ近くに立っていた店主らしき厳つい中年男性へ目配せする。

特に言葉を交わすことなく、店主は料理の準備に取り掛かり始めた。
店主が料理をする音だけが響く中、華奈達は視線で店内の様子を探る。
一部が二階建てになっている店内は広く、一階にも二階にもちらほらと人の姿があった。
華奈達と店主達を除いて十名程度か。
ただ、昼間からそれなりに人が居るというのに、その誰もが薄暗い雰囲気を纏い口を閉ざしているというのが本当に異様だった。
ひとつのテーブルに向かい合い座っている者達でさえ言葉を交わす兆候すら無い。
まるで意図的に物音を立てないようにしているかのような……
そんな考えに行き着いた頃、ことりと控えめな音を立てて華奈達の前に水の入ったグラスが置かれる。
どうも、と華奈が小さく礼を言うと、グラスを運んでくれたウエイトレスは微かに微笑み返してくれた。
「ねえ、お姉さん」
カウンターの内側へ戻ろうとする女性を、華奈は呼び止める。
「あたし達、見ての通り旅の者なんですけどね。精霊に縁のある場所を転々と歩いてるんだ。で、この辺にそれらしき場所があるって聞いたんだけど、何か知ってる？」
「精霊、ですか……」
女性は両手でトレイを握り締め、何事かを逡巡した。
読み切れないが、華奈の突発的な質問自体に困っているのではなく、どう答えればいいかを迷っているという雰囲気。
「何でまた、そんな旅をしてるんだ」
女性の様子を伺っていると、カウンターの内側から声が掛けられる。
声の主は店主で、筋骨隆々の厳つい出で立ちによく似合う低くて渋いものだった。

「ど、道楽で」
華奈はとっさにそう答える。
ふたつ隣に座る黒い人が呆れたように小さくため息を吐いた。
道楽ねぇ、と口の中で呟きながら、店主は小気味の良い音を立てる手元のフライパンに視線を落とす。
「確かにこの街は精霊の守護を受ける街として賑わっていた。縁と言うかどうかは知らんが、守人なんてのも居てな。潤沢な恵みを与えてくれるこの土地を統治し、守ってくれていたさ」
「潤沢な恵み……？」
思わず、フラットは聞き返した。
ここは方角を見失う程のだだっ広い荒野のような大地に囲まれた街だ。
街の中は少しはましなのかと思いきや、周囲と変わらぬ枯れた土地の上にただ建物が建っているような状態である。
失礼ながら“潤沢”や“恵み”などといった単語と縁があるようには思えなかった。
精霊が封じられた影響ということか。
「……ここに来るまでに少しは街ん中を歩いただろう。今はこんな状態だ。悪いこた言わねえから、飯食ったらさっさと街を出て別んとこに行くことをお勧めするよ」
「さっさと街を出なきゃならない理由でもあるんですかね？」
フラットの問いには答えることなく言い放たれた店主の言葉に、華奈が切り込んだ。
店主は答えない。
だが、ウエイトレスの女性やこちらの話が聞こえていたであろう客達がぎくりとしたのを、華奈達は見逃さなかった。
……荒廃以外にも何か良くないことが、この街に起こっているのだ。
じっと店主を見据えるが、店主は淡々と料理をこなすだけ。
店内の別の者に答えを求めたところで、どうも返答を期待出来な

さそうなご様子だ。
余所者に介入して欲しく無いのか、それとも厄介事に巻き込みたく無いと思ってくれているのか……
後者で、かつ精霊が絡んでいるのであれば華奈達が介入し手助けをする余地もあるが、前者であれば全くの余所者である華奈達が関わるべきではない。
今のところ判断がつかないうえに問題の内容が判らないので、どう出たら良いものか判断がつかなかった。
とは言え、店主の言葉通りすぐにこの街を去ることなど出来はしない。
一同が各々の考えを巡らせていると、カウンターから逞しい腕が伸びてきた。
店主のものである炭鉱夫を思わせる厳ついその腕は、華奈達の目の前に料理の載った皿を置く。
大きな皿に山盛りにされた美味しそうなパスタ料理は、店主が作ったとは思えないほど見た目も美しかった。
一瞬、店主と目が合うが、店主はすぐに腕を引っ込めて次の料理に取り掛かってしまう。
「ひとまず、腹ごしらえしましょう？」
全員が難しい顔をする中、ふわりと微笑みながら環が言った。
確かに幾ら考え込んだところで事態は発展しない。
ふっと、全員が肩の力を抜き、環の意見に賛成することにした。

その時だ。
店内の人間全員が、異常に気付いて一点を見た。
店の外、そう遠くない場所から聞こえてくる怒声と悲鳴。
街の問題というやつなのか、それとも単に突発的な諍い事か。
探る為に、パルスは店内を見渡した。
店内の者達は明らかにその異常に気付いている筈であるのに、一向に何か行動を起こす気配を見せない。

無関心ということか、厄介事には関わらない主義なのか。

……いや。

異常を憂苦する客達の表情、トレイを握り締め今にも泣き出しそうなウエイトレス、握る力を込めすぎて血管が浮き出ている店主の震える拳。

これは、行動を起こさない者達ではない。

何かに抑圧され、起こせない者達だ。

だが。

街の者達がどうであれ、自分達は余所者。

街人達を抑圧する何かなど知ったことではない。

6人は顔を見合わせると、店主が制止する声を掛ける隙すらない速度で店を飛び出した。

腹を押さえ乾いた地面に蹲る(うずくま)初老の男性。

男性を見下ろす厭わしい視線と、小さく響く下卑た笑い声。

脂汗を浮かべ苦しそうに呻く男性に更に容赦の無い蹴りが見舞われそうになり、直前、若い女性が男性を庇うようにして蹴りの前へ躍り出た。

がたがたと震え今にも涙が溢れそうな若い女性は、蹴りが寸前で止められるとその場にくず折れ、地面を這ってすぐ後ろにいた男性を隠すように覆い被さる。

下卑た笑いを深める5名ほどの集団。中心にいる厭わしい視線と蹴りの主である中年の男は、やれやれとわざとらしく肩を竦めた。

「何のつもりだ、娘」

「ちっ……父は、身体があまり丈夫ではなく……これ以上は命に、関わります……ど、どうか、お止めください……！」

恐怖に震えながら、必死で、搾り出すような声で、女性は請う。
「だが、お前の父はこの地を統治する私に対する感謝を忘れ、先週から上納を怠っている。それ以外のもので誠意を見せて貰うには……まあ、命を差し出せとまでは言わんが、それなりの処罰は必要だろう？」
「どうか……どうかお許しを……」
「そうだなぁ」
逐一演技がかった所作で、頭の薄い中年男は悩む素振りを見せ……にんまりと笑った。
「私も鬼ではないしな。他に何かしらの形で誠意を見せるというのなら、お前の父のことは不問としよう」
「でっ、ですが、家には他に払えるものなど」
「娘、お前がしばらくの間我が屋敷に仕えれば良い」
びくりと、女性は震え、殊更青ざめる。
女性に庇われ声すら出せず蹲る父親も、痛みの所為ではないものに震えた。
こうしてこの中年男……ロドリグに連れて行かれる女性の行く末を、街人達は知っている。
建物の中に身を潜め親子の顛末を見守る街人達は、皆一様に眉を顰め、悲しみや苦しみや怒りに耐えた。

ロドリグの横暴な振る舞いにひたすら耐え、真の統治者を待つ。
例え誰がどのような目に遭おうとも、己の身を守ることを優先する。

一月ほど前、誰もに慕われていた統治者が忽然と姿を消し、ロドリグがこのような振る舞いをするようになってから、街を守る為に人々が交わした協定だった。
街人達とて、初めからただ黙って見ていた訳ではない。
理不尽を訴え、結集し、何を言おうと横暴な振る舞いを止めない

ロドリグを街から排除しようと動いた。
だが、ロドリグに対抗した者達は悉く力により淘汰され、再起不能に陥った者すら存在する。
本来、街を正しく導く者のみに持つことを許された力。
人を傷付け、私欲を満たす為に与えられたものでは決して無い筈の力。
何故このような者が力を持ってしまったのか。
呪ったところで事態が好転することなど無く、対抗する術を持たぬ街人達には、真の統治者の帰還を信じてただ耐えることしか選択肢が残されていなかった。
……抗する力さえあれば、このような理不尽を許しはしないのに。
誰が何度そう思ったか知れない。
けれども顛末を見守る人々は、心の中でその言葉を何度も何度も繰り返す。

祈りのようなその言葉が、通じたか。
女性が己を諦め静かに涙を流したその時、疾風のような何かが、ロドリグ達に向かって突っ込んできた。

３―３　喧嘩に途中下車は許されない

突如吹き抜けた一陣の風に、乾いた砂が巻き上げられる。
突風かと思いロドリグが風の吹いてきた方向を見ると、明らかに風ではない何かが風よりも速く彼に向かって突っ込んできた。
何であるのかを認識する間も無く彼の目の前まで迫ってきたそれは、彼の顔面に直撃する寸前でぴたりと止まる。
ぶわりと、その衝撃で巻き起こった風が彼の薄い髪を華麗に靡かせた。
得体の知れぬ恐怖と困惑による脂汗を流しながら、ロドリグはようやく、目の前に突きつけられたものが何なのかを認識する。
視界を塞ぐそれは、足だった。
第三世界の言葉で２４．５ｃｍと記された、踵のさほど高くないブーツの裏。
硬直していた身体を叱咤してじりじりと後退すると、少しずつ、視界が開けていく。
彼の目に映ったのは、彼の半分程の年端も無いであろう少女だった。
明らかに街の者ではない、長めの黒髪を変わった形の髪留めで一つに束ねたその少女は、回し蹴りの格好を崩さず足を突き付けたまま、威嚇するかのように下から彼を睨み付けている。
疾風の速さの、万が一当たっていたら昏倒などでは済まされないであろう鋭い蹴りを繰り出したのが、まさか、この少女だとでも言うのか。
ロドリグが殊更混乱していると、件の少女がゆっくりと口を開いた。
「何してやがるんですかハゲ様」
ぶつり。
ハゲ……もといロドリグの何かが切れる音が聞こえた。

彼は顔を真っ赤にして少女の足を振り払おうと腕を振る。
しかし、いとも容易くかわされたその腕は虚しく宙を切った。
更なる屈辱による怒りに震えながら、ロドリグは勢いよく後ろを振り返り叫ぶ。
「この女を捕らえろ！」
同行していた四人の取り巻き達は、命を受けてすぐさま動き出す……筈だった。
動ける訳など無い。
少女の仲間達に抗う隙すらなく武器を突き付けられ、動きを封じられていたのだから。
先程親子に対して向けていた悪辣な態度は何処へやら、取り巻き達は突き付けられたものに恐怖し青ざめ、情けない声を上げる者すらいた。
所詮は強者に諂うことしか脳のない役立たず共に舌打ちし、少女の仲間達の射抜くような視線を受けながら、ロドリグは少女に……華奈に向き直る。
真っ直ぐに向けられた敵意の目。
先程の蹴りのような、強い力の込められた視線。
ロドリグの表情が険しさを増した。
気に入らない。
どうせ更なる力を見せつけられれば、街人共のように黙って平伏すしか無くなるというのに。
彼が不遜な考えを抱いていると、いつの間に移動したのか、華奈の後ろで地に蹲ったままの親子に小柄な少女が駆け寄ってきていた。
「大丈夫ですか？」
深冬が跪いて声を掛けると、思わぬ展開に半ば放心していた女性がはっとして父を見る。
「わっ、私は平気ですが、ち、父が……！」
蹲った父親は脂汗を浮かべ、腹を押さえたまま顔を上げることすら出来ずにいた。

医学的な知識など深冬には無いが、内臓の方にまでダメージが行っている可能性が高いと一目で判る。
深冬はロドリグを一瞥し、顔を顰めた。
そうして視線を女性の父親へと戻し、彼が手で押さえる部分にそっと手を翳す。
ほの青い光が深冬の手のひらから溢れた。
女性は光を唖然と見つめる。
女性だけではない。ロドリグや、密やかに彼らの様子を伺っていた街人達さえも、暖かなその光から視線を外せなくなった。
当然のことかも知れない。それは街人達にとって、精霊の加護を得る者にしか許されぬ奇跡の力であったのだから。
数秒、優しく灯っていた光が収まると、女性の父親は苦痛できつく閉じていた目を開き身体を起こす。
一体我が身に何が起こったのかと、父親はおもむろに両手で己の腹を探った。
立ち上がれぬほどに己を蝕んでいた痛みの殆どが消えている。
神でも見るかのような畏敬の視線を向けてくる親子に対して、ただの少女の笑みをふわりと浮かべると、深冬は立ち上がって華奈と共に暴君へと相対した。
二人の少女の視線を正面から受け、放心し掛けていたロドリグは意識を取り戻す。
同時に思考や感情も彼は取り戻した。
多少の奇跡の力を使える者など世界にはごまんと存在するが、己以上の力の使い手などそうはいまい、と、彼は考える。
少女の青い光は珍しい力だが、痛みを消すだけでは己の力になど遠く及ばぬだろう。
この街を支配しているのは、未だ、自分だ。
昏い自信と共に、少女達への敵愾心（てきがいしん）が涌いてくる。
支配者である自分を無視して勝手に獲物に手を出した者達。力の差を見せ付け、排除せねばなるまい。

ロドリグは口の端を歪に吊り上げる。
華奈のこめかみが不快そうにひくりと動いた。
「いやらしさ全開ですねハゲ様」
ぶつり。
先程よりも明らかに大きな音を立ててロドリグの何かが切れた。
多少はあったらしい冷静さなど一瞬で吹き飛び、彼は頭の先まで真っ赤にしていきり立つ。
「黙れ部外者めが！　礼節も弁えぬ若造の分際で、この街の政治に口を挟むな！」
政治だと？　と、何人かが微かに唇から漏らした。
華奈達は一瞬で街の問題を理解する。

このハゲ様が癌だ。以上。

すうっと、取り巻きの一人を拘束するカイリの目が細められた。
「何が政治ですか、馬鹿馬鹿しい。こういうのは支配というのですよ。もう少し言葉の意味を学んでから使った方が恥をかかなくていいと思いますけどね」
「それにわたし達、口は挟んでいないですよ？　足は出しましたけどね」
「全くですよ、お前が黙れハゲ。モロに三下的な台詞吐きやがって。だからハゲるんじゃないの？　大体何よこの行いは。アンタ何様？　あぁ～神様か！　頭が輝いていらっしゃいますものねぇ」
今まで温厚な面しか見せなかったカイリの口から飛び出た意外な暴言に便乗し、環と華奈もロドリグを好き勝手煽りまくる。
と、流石に酷いと思ったのか、心優しい深冬は嬉々として更なる罵詈雑言を吐き出そうとしていた華奈の言を慌てて遮った。
「はっ、ハルちゃん！　よく見てあげて。あの人、サイドの髪を流して頭皮を隠そうとしているでしょ？　バーコードにすらなってないけど、きっと本人は必死なんだよ！？　その努力を認めないでハ

ゲ扱いしちゃったら哀れすぎるよ……」
フォローかと思いきや、それは止めの言葉だった。
その証拠に、哀れな人・ロドリグは言葉すら失うほどに激昂してわなわなと震えている。
確かに彼は頭頂部から徐々に毛が薄くなっていくタイプらしく特に頂上から半径７ｃｍゾーンは深刻で、それを隠蔽する為にサイドの毛を流すといういわゆるそういう頭だ。
更に華奈の蹴りの風圧の所為でセットは乱れ、かなり可哀想なことになっている。
などと敵の頭髪について分析している場合などではなく。
「……あのさ、深冬の言葉の攻撃力の方が明らかに高いと思うんですけど」
何テンポか遅れたが、華奈は一応突っ込んでみた。
同意した何人かが真顔で頷く。
フラット辺りはツボに入ったらしく笑いを堪えるのに必死だった。
深冬は何故突っ込まれたか判りませんとばかりに可愛らしく首を傾げる。
その時、ざり、と。
思わず和みかけていた雰囲気を妨げる音が介入した。
思い出したかのように華奈達が音の方を見ると、地面を強く踏み鳴らしていたロドリグが、多少は熱が下がってきたらしい表情でこちらを見ている。
いや……怒りの臨界点を越えて逆に落ち着いたのか。激しく叩き付けられる敵意だけが増していた。
あれだけ煽れば当然か、と華奈は思った。尤も、それでこちらが臆することなど有り得ないのだが。
「この街には統治者が必要だ」
ロドリグは唐突に語り始める。意外にも平静な声だった。
「ヘザーベアネスはかつてより、加護の力を持つ者により統治されてきた。力を持つ者だけが乾いた地を豊かにし、この地に住む者の

生を守ることが出来る。
以前の統治者が無責任に姿を消したことにより、豊かだった土地はここまで荒れた。だが、そんな時……精霊の導きにより、私が加護を得た。私にこの地を支配せよとの仰せに他ならない」
先程のように、彼は口の端を吊り上げる。
「その支配者である私が、私の恩恵を受け生かされている者共をどう扱おうとお前達余所者の知ったことでは無いだろう？」
それが、思いあがりであることになど気付かずに。
悪びれもせず当然のことのように言い切る様に、虫唾が走った。
熱が下がってきたという見解は間違いのようだ。光悦と支配者になったつもりの己に浸る勘違い野郎は、重度の熱病に侵されているらしい。
もし本当に街人達が彼を支配者として受け入れているならば。この状況を受け入れているならば。人々はもっと様々なことを諦めている筈だ。
仕方が無い、と。諦めている者達は総じてその想いを抱き、意思を殺して虚ろな日々を送るもの。
……けれど、ここの人々は違った。
酒場の店主は怒り、ウエイトレスは嘆き、女性は父の為に己を犠牲にすることを厭わず――
物陰から事象を見守る人々は、ただ耐えて、耐えて、耐えている。
まだ何かを諦めずにいる証拠だった。
きっと、この目の前の勘違いの力に対抗する術を持たないゆえに、耐えることしか出来ずにいるのだろう。
「どうした、黙り込んで？　ようやく力の差を理解出来たか？」
力の差などとうに理解出来ていた。
ロドリグでは華奈達の相手にすらならない。
しかし華奈達は、この野郎を二度と悪い気など起きぬよう叩きのめしてやることを心に決めていた。
「とりあえず、貴方が街の統治者に相応しくないということは理解

できましたよ、お陰様で」
辛うじて意識のあった取り巻きの一人を締め上げて気絶させながら、フラットが吐き捨てる。
ロドリグはあからさまに不快そうに顔を歪めた。
「相応しくないと言い切るからには、貴様等には何かこの荒廃という現実を回復させる決定的な手立てがあるということなのだろうな？」
「ええ、ありますよ」
絶対に肯定は出来まいと吐き出されたロドリグの意地の悪い問い。それに、フラットは締め上げた取り巻きを面倒そうに地面へ放り捨てながらあっさりと答えた。
ならば言ってみろと。ロドリグがそう返す前に、フラットの唇がある言葉の形に動く。
音としては紡がれなかったその言葉を正確に読み取ったロドリグの顔色が明らかに変わった。
自信満々だったその表情に、驚愕と焦りの色が滲み出る。
ちらりと、何を言ったのか見えなかった華奈はフラットの方へと視線を移し……見るんじゃなかったと後悔してロドリグへと視線を戻した。
普段は温厚で優しいお兄様な彼が、腹黒く底意地の悪そうな表情を臆面もなく浮かべている。
……こっちが本性系に違いあるまい。
一瞬視界に入った環も面白そうにくすくすと笑っていたことから見ると、恐らくそのことに気付いたのだろう。
知らぬは深冬ばかりなりか。だがそのままの深冬でいて欲しい……
などと華奈が緊張感のないことを考えていると、焦りを悟られていないと思っているらしいロドリグがようやく反論を仕掛けてきた。
「そこまで言うのなら、貴様等がこの状況を打開してみせるがいい。但し、打開できなかった場合は……貴様等全員、私の下で奴隷として一生を過ごして貰おうか！」

「受けて立ちますよ、ハゲ様」
流石にその発言には二、三十発ぶん殴ってやろうと何人かが思う中、華奈が即答する。
「ふん、もし逃げようものなら街の者共がどうなるかくらい判るな？　その言葉……忘れるな！」
そう言い捨て数歩後退すると、ロドリグは不愉快な笑い声を上げながら蜃気楼のように掻き消えた。
なるほど、街人達が抗えないだけあって、それなりの力は使えるらしい。恐らく今のは空間を移動する魔法の一種なのだろう。
それにしても何てお約束な悪役っぷりなんだと華奈が思っていると、見捨てられて愕然としている取り巻きをさっくりと気絶させ、パルスが近付いてきた。
「受けて立つな、あんなものは」
隣に立つなり、不機嫌そうに彼は言う。
「何で？　別に負けやしないんだし、いざとなったら実力で黙らせればいいじゃん。フラットが何て言ったのかは判らなかったけど、何か考えもあるんでしょ？」
「それはそうだが……」
と、そこで言葉を切り、パルスは振り返った。
華奈達全員が同じ方向を見る。
そこには未だ畏敬の視線を向けてくる親子と、立派な包丁とフライパンを手にした酒場の店主の姿があった。
何事かと思っていると、店主が口を開く。
「お前ら、まだ飯食ってねぇだろ」
付いてきな、と、店主は首の動きで示唆して酒場の方向へと歩き出す。
華奈達は顔を見合わせてから、彼の後へ続いた。

黙々と誘導する店主に続いて華奈達は来た道を戻り、酒場へと足を踏み入れる。
蝶番の軋む音が響くと、ウエイトレスや客達の視線が一斉に入り口の方へと向けられた。
トレイを握り締めたウエイトレスが、心配そうな表情で店主の方へと駆け寄ってくる。表情はそのまま、彼女は華奈達と店主を交互に見た。
だが、店主が何事かを呟くと、彼女は目を見開いて今度はしっかりと華奈達の方を見る。
半ば立ち尽くす彼女を残し、店主はカウンターの内側の調理場へと向かっていった。
店内中の視線が集まってきていることに気付いた華奈は、何となく居心地が悪くなってぽりぽりとこめかみを掻く。
「あ、あの……お姉さん？」
声を掛けた途端、ウエイトレスの表情が歪んだ。
今にも泣き出しそうな。けれど、安堵と喜びの入り混じった、そんな表情に。
華奈達が慌てると、彼女は深々と頭を下げる。
「街の者を助けて頂き……ありがとうございました」
彼女が言うと同時に、先程来た時は音すら殆ど立てなかった店内の客達からも感謝の声が上がり始めた。
途端、静かだった店内には歓声や拍手の音が溢れ、華奈達を讃える雰囲気で満たされる。
なるほど、自分達の行動は吉と出たようだ。
だがそれは喜ばしいことだと思う反面、自分から勝手に首を突っ込んだだけ、という認識であるため、こんな風に賞賛されても困るというのが正直なところだった。
どうしたものかと困惑していると、頭を下げたままのウエイトレスの前にフラットが跪く。
彼は下から覗き込むようにして、やんわりとウエイトレスに顔を

上げさせた。
「街の事情も知らず、私達が勝手にしたことです。そんな風になさらないで下さい」
少し困ったように笑いながら。フラットが言うと、ウエイトレスの頬にさっと朱が差す。
これは落ちたな、と、何人かが思った。
多少クサいけど……と華奈は思うも、流石に騎士で親衛隊を務めるだけあり所作も美しく、様にはなっている。
そのうえ大概の女性が振り向かずにはいられない美麗顔に目の前で笑いかけられたら、落ちるのも無理は無いのかも知れなかった。
「あれって天然かなぁ」
「さあ……職業病？」
「わたしは故意に一票かな」
乙女三人がこっそりと囁き合う。
聞こえてはいたが何のことやらさっぱり不明なパルスとカイリは、不思議そうに首を傾げた。
「おい、いつまで入り口に突っ立ってんだ。料理作り直してやるから座れ！」
華奈達が恋する乙女と化したウエイトレスのお姉さんを生暖かく見守っていると、歓声や拍手の音の中でも一際目立つ店主の厳つい声が飛んでくる。
そういえば腹ごしらえをせずに飛び出してしまったのだということを思い出した途端、急激に空腹感が襲ってきた。

ウエイトレスの先導で元の席へ座ると、作り直してくれたらしい相変わらず美味しそうなパスタ料理が華奈達の目の前に置かれる。
感動しながら華奈が店主を見ると、店主は口の端で微かに笑った。
「俺達の奢りだ。好きなだけ食ってくれ」
「いえ、先程も言ったように私達が勝手にしたことですので、そのような気遣いは」

「良いんだよ。俺達ではどうしようも無かったもんを助けてくれたんだ。感謝の気持ちをどうにかして表したいが、俺達にはこんな事くらいしか出来ねえ。だから、受け取って貰わねえと困る」
フラットの遠慮を制して、ぶっきらぼうに店主は言う。
一時回避しただけで解決したとは言い難い状況なので断るつもりだったが、そう言われては頑なに断る必要もあるまい。フラットは静かに頭を下げ、彼らの厚意を受け取ることにした。
続けて華奈達も謝意を述べると、店主は満足そうに笑って調理を続ける。
暖かいパスタ料理を食べてみると、素朴だがとても美味しかった。
食べ進めながら、華奈達は店内の様子を見る。
そこにはもはや初めて来た時のような張り詰めた空気は無く、客達は時折笑顔を見せながら通称ハゲ様の撤退や縛り上げた後街人達に処遇を任せてきたその部下達について話を弾ませていた。
この雰囲気ならば色々と質問をしても支障が無さそうだと。華奈は、隣に座る深冬が取り分けてくれたパスタの乗った取り皿を受け取りながら、言った。
「ね、親父さん。何であんな奴に好き勝手させておくの？」
ひくりと、店主の目尻が動く。
切り込み過ぎだったかなと思いつつもじっと店主を見据えると、数秒の後、ようやく店主は静かに口を開いた。
「あいつは、力を持っていやがるからな」
「力？」
「この土地には守人がいたって話はしたな。守人は精霊から受ける加護の力を使ってこの土地に恵みを与えてくれる存在だった……が、ひと月ほど前か。突然失踪しちまったんだ」
「失踪……」
思い当たる節が、華奈達にはある。
だが街人達にとっても不安要素でしかないその事実は、この場で口に出す必要の無いことだ。

「それ以来街は急激に枯れちまってこの様だ。だが、あの野郎が……ロドリグの野郎が、枯れた街に再び恵みを与えたんだ」
「……ロドリグ？」
女子3人がきょとんとする。
店主がさっきのハゲ野郎のことだと補足すると、3人はようやく納得したように頷いた。
確かに、幾ら何でも名前までハゲ様である訳が無い。
「でも、恵みを与えたという割には、その……」
言い辛そうに深冬が言うと、店主は微かに眉を顰めて視線を己の手元へ落とした。
「最初はあの野郎の……失踪した守人の住んでいた屋敷の周囲だった。本当に何もかも枯れちまってたってのに、そこだけ何も無かったかのように潤いが蘇った。
俺達は救いの手だと思って喜んださ。あの野郎は元は守人の下で働いてた使用人だったからな。だが……」
「ロドリグは恵みを与えることと引き替えに様々なことを街人達に要求し始めました。基本的には毎月のお金の上納を。それが出来ない者は屋敷へと連れて行かれました」
悔しそうに止まった店主の言葉の先は、ひとりひとりにサラダを配り始めたウエイトレスが続ける。
「金額も要求もどんどん酷くなり、反抗する者は暴力で押さえつけ……今では、恵みを受けている者なんてロドリグに与する一部の者達だけです。連れて行かれた人達も一体どんな目に遭っているか……」
「だから、自衛することに徹したのですね」
フラットが静かに言うと、彼女達は俯いて黙った。
責める為に言った言葉では決して無いが、理不尽に対して何も出来ずにいる自分達をずっともどかしく思っていたのだろう。
華奈達からすればロドリグなど大した障害にならないが、街人達にとっては大きな脅威だ。彼らは抗うことはしたのだろうが、加護

のもたらす力を前に何かを得ることは出来なかった筈。
だとすれば、彼らの取った方法は少ない犠牲で街を守ることの出来る唯一の方法だったと言える。彼らを責めることは出来ないし、彼らが己を責める必要も無い。
華奈達は知っている。この世界では高い加護を得る者が、凡庸に生きる者達と比べどれほど隔絶された存在であるのかを。
尤も、何故あのような者に精霊が加護を与えたのかは……知ったところではないが。
そう、華奈達が考えていると、店主が再び口を開いた。
「……ともかく、街のもんを助けてくれたことは感謝してる。だけどな、お前ら。飯食ったらすぐに街を出た方がいい」
ぴたりと。食べ進めながら話を聞いていた華奈達は食事の手を止める。
そうして静かに店主を見ると、彼もまたこちらを静かに見据えていた。
「あの野郎を追い払っちまうくらいだ、お前らは確かに強いんだろう。だけどな、俺達が手を出せないでいるのは何もあの野郎に敵わないからってだけじゃねぇんだ。
あの野郎は屋敷に見たことも無ぇような化け物まで飼ってやがるし、裏にそういうモンを横流しする奴らが付いてやがる。打開がどうのって言ってたようだが、あの野郎のことだ、化け物を使ってお前らに何かしに来る可能性が高ぇ」
「私達は搾取対象ですからどうにでもなります。でもあなた達は……どうか、ロドリグがあなた達に何かをする前に、逃げてください」
店主に続いて、ウエイトレスもそう言う。
後ろに立つ彼女の祈るような言葉を聞きながら、華奈はじっと店主の目を見た。
最初に似たような言葉を聞いた時は真意が読み切れなかったが、今なら、恩人である華奈達に迷惑を掛けまいと　して本心から言ってくれているであろうことが判る。

だが。

「断る」

きっぱりと、華奈は言い切った。

店主もウエイトレスも目を剥く。店中に響く声だったゆえ、店内中の視線がカウンター席の方へ集まった。

「こ、断るってな、お前……」

「親父さん聞いてたでしょ。ハゲ様はあたしに喧嘩を売って、あたしはそれを買ったの。喧嘩に途中下車は許されない、これ常識。

それに、よりにもよってあたしに向かって逃げろって？　……冗談じゃない」

ぎらりと、華奈の目が鋭く光る。

これには流石に店主達も返す言葉が無かった。

唖然とする店主達を他所に、顛末が判りきっていた深冬と環は苦笑する。

パルスは呆れた風にため息を吐き、フラットとカイリは別の意味での苦笑を浮かべた。……尤も、彼らとて逃げるつもりなどさらさら無いという意志は一緒な訳だが。

「まあ、それも私達が勝手にすることですのでどうかお気になさらずに。それより、宜しければそのロドリグとやらの屋敷の場所を教えて頂けますか？」

フラットが問うが、店主達は未だためらいを見せる。

だがそこで、救世主環様が口を開いた。

「教えて、頂けますね？」

静かな、たった一言。

だというのに、店主達の背筋を流れる冷や汗という冷や汗。

優しげな笑顔の奥から滲み出る言い知れぬ威圧感は、拒否は許されないということを店主達に悟らせるには充分だった。

ついでに華奈達に再度恐怖を植え付けるのにも充分だった。

「……街の中央より北寄りの方だ。そこだけ緑が多いから、行けばすぐに判る」
店主はついに折れて口を開く。
「ふふ。ありがとうございます」
店内中が言い知れぬ恐怖からの脱却に安堵する中、環は満足そうに微笑んで何事も無かったかのように食事を再開した。

3―4　潜入捜査大作戦

陰。
そう、いわば、その存在は陰だった。
光と表裏一体で存在するという世界の真理めいたものなどでは決して無い。
強過ぎる光の存在で霞んでしまう。かき消されてしまう。
そんな、世界にとってはどうでも良いであろうちっぽけで軽い存在だった。
似たような環境で生まれ育ったというのに、片や光を一身に浴び、片や光すら当たらぬ陰。
そのような不公平が許される筈が無い。
光を羨み、嫉み、恨んだとしても、一体誰に文句を言うことが出来ようか。
光を手に入れたいと。
そう望んだとしても、一体誰に文句を言うことが出来ようか。

「私は力を手に入れたのだ」
男は呟く。
彼は、やけに明るいその空間で一際眩しい光を放つそれを見上げた。
黄水晶のような美しく巨大な結晶体の中に閉じ込められた、大地に根差す木のような存在。世界の要のひとつ。今では己のものとなった筈の、その力。
男は右手を明るい場所へと翳す。
男の指には、指輪がふたつはめられていた。
ひとつは、ひと月ほど前に受け取ったもの。もうひとつは、ほんの数日前に受け取ったもの。
「私は、光を手に入れたのだ」

確認するかのように、男はもう一度呟く。
悲愴的なその響きは、広いその空間の天井に届く前に、消えた。

－＊－＊－＊－＊－＊－

行けばすぐに判る、との店主の言葉通り、その場所は荒廃した街の中で明らかに浮いた存在だった。
大きな宮殿のような屋敷を中心に高級そうな建造物が数軒。
それらを囲むかのように、また、荒れた市街とその場所とを区切るかのように、草や木が生い茂っている。
内側には小さなオアシスのような泉まであり、その場所だけ湿度が高い所為もあるのか……遠くから見ると、蜃気楼のように揺らいで見えた。
ヘザーベアネスの現状を如実に表すかのような。市民へ与えられるべき恩恵を無理矢理に掻き集めた、厭わしい土地。
そんな場所で、華奈は。
「ぶはっ」
思い切り吹き出して腹を抱えてしゃがみ込んだ。
よほどツボにはまったのか。ぷるぷると震えてしゃがみ込んだまま一歩も動けなくなった華奈を、訳の判らない面々は戸惑いながら見下ろす。
訳の判ってしまった深冬は苦笑しながら言った。
「ハルちゃん、悪人の宮殿にはたまねぎ付いてるって相場が決まってると思うよ」
「いあ、でも、じっさ、見ると……また攻撃力が」
くっくっと笑いながら、苦しそうに華奈は答える。
どうやら彼女は、ハゲの屋敷らしき豪華な建物の頂上に、アラビアの宮殿の如き金色のたまねぎ型の飾りが付いていたことにウケた

ようだった。
何がそんなに面白いのか判らない、と、パルスは呆れ返り屋敷を見上げる。
屋敷を囲む塀の外側であるその場所から故、良く判らないのかも知れないが。曲がりなりにも現在の街の支配者である者の屋敷であるというのに、人の気配が感じられなかった。
……逆に。
不穏なものの気配が、微かに動く。
店主が言っていた見たこともない化け物、というやつなのかも知れなかった。
「静か過ぎるな」
フラットがパルスに耳打ちしてくる。二人は少しだけ考え込み、申し合わせたかのようにカイリへ目配せした。
彼は心得ているとばかりに小さく頷くと、壁際へと歩み寄り、跳躍して音も無く塀の上へと降り立つ。
それを見て華奈が首を傾げた。
「あれ、正面から殴り込むんじゃないの？」
深冬とフラットが苦笑する。
ハッ、と、嘲笑しながらパルスは言った。
「お前の頭は飾りか」
「何だとこの野郎」
「少しは考えてみろ。明らかに不自然だろう」
「うっさい。お前の黒づくめのほうが金色のたまねぎ並に不自然だわ」
「「まあまあ」」
苦笑していた二人の牽制の声が重なる。
一応は敵陣の敷地内であることを理解していたらしい華奈とパルスは、口論ではなく眼力での勝負へと方法を切り替えた。
「パルスの言うとおり明らかに不自然だからね。一応偵察して、それからどうするか考えたほうが良い」

「偵察へは僕が行ってきますから、待っていてください」
フラットが言うと、塀の上から控えめな声音の声が降ってくる。
華奈達は声の主を見上げた。
「一人で？」
「はい、こういう事は慣れていますから」
「でも何が居るか判らないし、一人では危ないわ」
環に心配そうな表情で見上げられ、カイリの頬に微かに朱が差す。
確かに、彼らはこうした事に慣れているのだろうし、任せた方が良いのだろう。だが、例えばヴァレンティーネの洞窟のような強大な魔物に襲われでもしたら。
そう考えると、彼女達が心配するのも仕方の無いことだ。
華奈は塀上のカイリと環を交互に見る。
そうして、いかにも良い案が浮かびましたとばかりにぽんと手を叩いた。
「偵察はいいけど、皆強いから大丈夫なのも判るけど、前のでっかいライオンのこともあるし乙女としてはやはり心配な訳ですよ。
という訳で大人数がまずいなら二人くらいで行くのはどうなんでしょうね？」
一息で言い切って、華奈はちらりと上目遣いでフラットを見る。
フラットは困り顔で唸るが、華奈はくるりと視線を環へと向けて畳み掛け作戦に出た。
「ね、タマちゃん。心配だよね」
「そうだね。ねえ、わたしも一緒に行っては駄目？」
環は首を傾げ、塀の上のカイリを見上げる。
カイリがその可愛らしい仕草を直視できず真っ赤になって目を泳がせているのを面白そうに見てから、華奈はもう一度フラットを見た。
駄目かな？　と、華奈は目で訴えてくる。
意図を理解したフラットは、困り顔はそのままに小さく息を吐いた。

「タマキ、行くならなるべくカイリの陰に隠れて。慎重にね」
「ふ、フラット……」
カイリは困惑するが、環はいつものように微笑んで、ありがとう、と小さく返す。
「大丈夫、気を付けるわ。それに……」
彼女はもう一度カイリを見上げて、右腕を差し出した。
「いざとなったら、あなた達が守ってくれるでしょう？」
カイリは僅かに目を見開く。
それから、観念したかのように小さく息を吐いて環の手を取った。
引っ張り上げられた環はふわりと塀の上へ着地する。
手を離したというのに未だ熱の収まらぬ己の手を諌めながら、カイリは微笑みを絶やさない熱源から目を逸らした。
「では、行ってきます」
気を引き締め直し、カイリは塀の反対側へと音もなく降りていく。
環も小さく手を振りながらそれに続いた。

塀の内側に降りた二人の気配は、建物に沿うようにして静かに遠ざかっていく。
華奈は仁王立ちで腕を組み、一人で何事かを賞賛するかのようにうんうんと頷いた。
恐らく我ながら良い計らいをしたとでも思っているのであろうと、何人かが分析する。
「おい」
そんな軽く自己陶酔する華奈の頭を、パルスはため息を吐きながら後ろから軽く小突いた。
「痛っ。頭が変形したらどうしてくれるんだ変質者」
「その程度で変形するか。あと変質者でも無い。それより、説教の続きがまだだ」
「はい？　変質者に説教喰らうようなことなんてしてません」
一応小声ながら、華奈はいつもの如く喰って掛かる。

パルスは半ば呆れつつ、彼女をねめつけた。
「奴隷の件を受けて立ったことだ。奴隷になることの意味も深く判らずに安請け合いするな」
「奴隷の意味くらい判りますー。権利・自由を奪われて他人の私財として強制労働させられて時には売買される人のことですー」
「そういう事を言っているんじゃない」
ぐい、と、華奈の腕が強く引かれる。
普段も言い合いをする時はこのくらい近くに顔を寄せることもあるが、その時とは違った真摯な紅い瞳が、彼女の目の前にあった。
「女はもっと悪い。全てを口で言わないと、理解出来ないのか？」
目を逸らさぬまま、華奈は肩を竦める。
数時間前に最初に言われた時から、幾ら華奈でもそんな事は判っていた。
万が一にもそんな事にはなり得ないという確信があるとはいえ、特に深冬と環は女性として貞操の危険に晒される可能性が極めて高いと具体的に理解もしている。
そして彼女的には理解し難いことだが、第一世界でチンピラとやりあっていた時もそうした下心めいた意思を向けられた経験も無い訳ではないし（無論圧勝したが）、自分がそういう対象になり得る可能性がある事も判っているつもりだ。
心配して、言ってくれていることも。
けれど、彼らは言った。
だから、華奈にとっては決して安請け合いなどでは無かったのだ。
「もー、判ってるから離しなさいってば」
華奈はパルスの腕を振り解く。
パルスは彼に背を向けて離れていく華奈を疑惑の視線で追うが、ふと、数歩離れたところで彼女は立ち止まった。
「それに、さっきのタマちゃんじゃないけどさ」
彼女は振り返る。
“俺達が護るから、問題ない”んでしょ？」

挑戦的な笑みを、華奈は浮かべた。
本当に判っているのかどうか。理解し難い目の前のお嬢様の言動に、パルスは第三世界へ来てから何度目とも知れぬため息を吐き出す。
その光景を、深冬とフラットは微笑ましそうに眺めていた。

－＊－＊－＊－＊－＊－

屋敷の外壁に沿うようにして内部の気配を探りながら移動し、カイリと環は、流石は豪華なお屋敷らしい大きな窓から軽々と屋敷内への潜入を果たす。
鍵が掛かっていた筈の窓をカイリが何か道具を使って一瞬で開錠したような気がするが、環はそのような些細なことを気に留めるような性格では無かった。
屋内でも壁に沿うようにして、二人は緊張しながら慎重に進んでいく。
外から大まかに気配を探った通り、大きな屋敷だというのに、廊下にもこれまで調べてきた室内にも使用人の姿は無く、気配すら感じられなかった。
明らかに不審なその状況に、緊張感が高まっていく。
しかし、カイリに関しては別の緊張感も高まりつつあった。
自分に倣(なら)い、息を潜めてぴったりと付いてくる気配。
様子を伺う為に立ち止まる度に、微かに触れる熱源。
触れる度に彼の心臓は飛び出しそうになり、柔らかく揺れる髪の音すら聞こえてきそうな程に、彼の神経は環の存在を捉える。
これでは偵察として失格過ぎる。と、彼は壁の切れ目で立ち止まり、壁の先の様子を伺う前に精神を落ち着かせる為、深呼吸をした。
瞬間。

「精霊の気配は近いの？」
「！？」
耳元で熱源に囁かれ、カイリは思わず声を上げそうになる。
驚いて振り向くと環の顔が思いのほか近くにあり、更に驚いて勢い良く後ずさりしそうになる身体を必死で抑えた。
どうしたの？　とばかりに、環は首を傾げる。
彼女は偵察中であることを重々理解し、なるべく声が漏れないよう気を遣って話し掛けてきただけだ。
それに驚いている自分の修行が足りない。

心頭滅却。精神統一。

そんなことを心の中で幾度も呟き、彼は何とか平静を取り戻す。
「街の中に居た時よりも、気配を強く感じます。恐らくは……この場所の、地下にあたる場所に居るのではないかと」
「地下？　でも……」
「ええ、そうですね」
地下という割に、カイリが覗き込む壁の切れ目の先にあるのは上りの階段だった。
「ひととおり、屋敷の一階を歩いて把握したのですが……下りの階段も、隠し扉らしき場所も、一階にはありませんでした。
ただ、調べた部屋の奥。壁の向こうにぽっかりと部屋の尺度と合わない不審な空間があるんです。恐らく二階より上に、地下へと続く場所があるのではないかと思います」
へぇ、と、環は感心したように囁く。
「そんなことまで判るのね。凄いわ」
敬意の込められた彼女の笑みを向けられ、カイリの身体が再び熱を持った。
また、乱れている。
彼は深呼吸をして心を落ち着け、視界の先にある上り階段を見据

えた。
「人の気配は上にはありませんが……それ以外の、正体の知れない気配が強いです。何があるか判りませんから、気を付けて。僕から離れないでください」
壁の先を見据える、頼もしい発言をしてくれたカイリを環は静かに見上げ、微笑む。
二人は慎重に階段へと近付き、音を立てぬようゆっくりと、階段を上っていった。

無事に階段を上り終えて二階へと辿り着くが、カイリの言通り、相変わらず人の気配は無い。
ざっと見立てた限り、一階より部屋数が少ないようでもある。
手前の部屋から順に調べていくが、別段不審な点は見当たらなかった。
あらかた調べ尽くし、二階で残すは一際大きいと予想される部屋ひとつのみとなる。
部屋の扉の左右に立ち目配せし合うと、殊更慎重に、カイリはその扉を開け放った。
静かに開いていく扉の蝶番の音が響くほどに室内は静寂に満ち、また、予想通り一際大きい。
屋敷内は一階から悉く照明が無く薄暗くはあったが、ちょっとしたホールほどの広さのある室内の窓はカーテンが全て閉め切られており、暗く、一見しただけでは中の様子はよく判らなかった。
だが、慎重ながらも迷いなく、カイリは室内へ足を踏み入れる。
環も彼に倣い、室内へと進んでいった。
窓際で、カイリは外の気配を伺う。
そうして周囲に何の気配も無いことを確認すると、厚く閉じられたカーテンのひとつを、片側だけ開け放った。
広い室内は急速に光を取り込み、その姿を晒す。
そこは、一見書斎のような場所であった。

高級そうな背表紙の本がびっしりと詰まった本棚が壁沿いに幾つも並び、これまた高級そうな机と椅子が一脚ずつ、窓際に立つ彼らから見て左寄りに配置されている。
ただ、ぽっかりと空いた、何も配置されていない室内の半分以上の空間が……あまりにも不自然だった。
豪奢な屋敷は基本的にそうであるのかも知れないが、天井も高く、警戒すべき空間が多いことに尚更不信感を煽られる。
罠があることを前提に、カイリは室内をぐるりと見渡した。
普通に見渡しただけでは、特別気に掛かるものは見当たらない。
しかし、彼は何も無い空間の床の、ちょうど中心の辺りで視線を止めた。
警戒しながらその場所へ近付き、しゃがみ込む。
何もないその場所をじっと見据える彼に、環は首を傾げた。
だが、彼には判る。

この下から、呼ばれている。

ヘザーベアネスに近付くにつれて色濃くなっていったその気配。
深冬は語り掛けられたと言うが、カイリに加護を与える精霊は無口なのか、特別声を掛けてくるということは無かった。だが己の存在を訴えるかのような信号めいた気配は徐々に強くなっていく。
その訴えは、カイリがじっと見据える床の先から、最も酷く響いてくる。
床にはその場所への道を隠すかのように、何かしらの封印が施されていた。
しかし、そんなものは。
加護の力で強く引き合う彼らにとって、開錠することは造作も無いこと。
ふっと、カイリは軽い所作で床に手を翳した。
瞬間、床には複雑な紋様を描く魔法陣の形に金色の光が走り、部

屋全体をその色で照らす。
上から覗き込むようにしていた環が眩しさから目を庇っていると、床であった筈の場所がすうっと掻き消え、光が収まる頃には地下へと続いているであろう階段が姿を現した。
カイリの読みが当たっていたことに彼女は微笑み、カイリも振り返って彼女に笑みを向ける。
が、その時。
不気味な紋様が部屋全体に浮かび上がり、紋様に似つかわしい昏い赤と青の入り混じったような光が、一瞬で広い部屋を照らした。
まずい、と、カイリが思った時には既に遅い。
迂闊であったと、彼は内心舌打ちする。
ヴァレンティーネの洞窟でも、侵入者に反応する似たような召喚術が仕掛けられていたではないか。
今回も同じ者達が絡んでいる筈であるのだから、似たような術が仕掛けられているなどということは容易に予想できた筈。
パルス達を呼んでから封印を解除すべきであったとカイリは後悔し、己の読みの甘さに嫌気が差すが、今更そんなことを考えたところで仕方が無い。
今すべきは、目の前の彼女を護ることだけだ。
「タマキさん、伏せて！！」
怒声に近い声で彼は叫び、環を抱き込むようにして庇いながら床へと伏せる。
その瞬間、一際不気味な光を、部屋全体に散りばめられた紋様が強く放った。

ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー

「カイリ、上手くやってるかなー……」

唐突に、華奈が呟く。
カイリと環が屋敷内部へ潜入してから十数分。
胸ときめく偵察任務を環に譲りはしたものの、身を潜めて待っているだけというのは彼女にとっては相当退屈であった。
現状それを紛らわすには、会話しかない。
但し、状況柄声を潜めることに神経を注がなければならないのが、辛いところではあるが。
「……カイリなら不慣れなタマキが付いていても上手くやるだろう。何かあれば信号を送ってくる手筈になっている」
少しくらい黙っていられないのかとパルスは呆れるも、一応律儀に応えてやる。
だが、華奈は面白くなさそうな顔を彼に向けた。
「もー、そういうことじゃないのに。判ってないな、黒い人」
「何がだ」
「あたしが言ってるのは、カイリがこの二人っきりの状況を上手く活用してタマちゃんにアピールできてるのかな、ってことな訳ですよ」
「……こんな状況で何を考えているんだ」
「こんな時だからこその美学というやつなのだよ」
やれやれ、これだから黒い人は。と、華奈はわざとらしく肩を竦める。
パルスは相当苛付いたが、状況が状況なので何とか突っかかる事は思い留まった。
そんな華奈の様子を見て、深冬が苦笑する。
「ハルちゃん、自分の色恋沙汰には相当鈍いくせに、人の事となると割と首を突っ込みたがるよね」
「自分は無いんだから、鈍いも何も無いと思うんだけど……」
本気で言ってるの？　と、深冬は怪訝な表情を華奈に向ける。
と、どうやら多少興味を持ったらしいフラットが深冬の背後から会話に加わってきた。

「ミフユとしては、何かハルナの色恋で思い当たる節があるっていうこと？」
「えと、多分敵に捕まってる子達の中に、弥鷹っていう男の子がいるんだけど……ハルちゃんとタカ君は地元では有名な最強タッグで、凄く仲が良くて、傍から見てると恋人みたいなの。タカ君も絶対ハルちゃんのこと好きだと思うんだけどなぁ」
そんな訳ないじゃん、と、華奈は一蹴する。
「この通り、ハルちゃんには全く自覚がないみたい」
一瞬でタカ君とやらの気持ちを否定した華奈にフラットは苦笑するが、なかなか面白いネタを仕入れたと内心では思った。
ちらりと、彼はパルスを見る。
パルスにも今の会話は聞こえていた筈だが、彼はじっと屋敷内の気配を探ることに集中しているようだった。
多少わざとらしいことに、フラットはばっちり気付いていたが。
後でからかうネタに使えるだろうとパルスにとっては不吉なことを考え、フラットは気付かない振りをする。
それより、と、彼は深冬にだけ聞こえる程度の小声で言った。
「ミフユにもそういう人、居るの？」
「えっ！？」
自分にとっては不意打ちのような質問に、深冬は思わず赤面する。
「そ、そんなの居ないよ！　私なんて普段は学校と部活以外はスーパーに行ったり、家事とかで遊んでる時間もあんまり無かったしっ」
わたわたと何故か慌てる深冬の可愛らしさに、フラットは目を細めた。
「そっか。ブカツって何？」
「えと、学校で勉強が終わった後に、同じ趣味を持った人達で集まってやる課外活動みたいなものだよ。私も、ハルちゃんも、たまちゃんも……捕まってる子達も、同じ部活に入ってたの」
「へぇ。じゃあ、スーパーは？」
「お店だよ。食品とか、雑貨とか、色んなものが売ってる大きなお

店」
「それは興味あるな。ところでミフユは家事とかするんだ？」
「う、うん。両親が遅くまで仕事だから、妹と弟と手分けして色々。何故か炊事だけはやらせて貰えないけど……」
「家庭的なんだね」
「そ、そうかな」
会話をしているうちに突発的な質問に対する焦りは収まるが、同時に、深冬は頭に何か温かいものが乗せられていることに気付く。
それはフラットの手だった。
優しげな笑みを浮かべる彼の手が、いつの間にか深冬の頭を撫でている。
（わ、私、そんなに撫でやすい頭してるかな……）
何処となく見当違いな考えを浮かべるも、撫でられることに悪い気はしないので、深冬は彼の手を退けなかった。
むしろ。
（……気持ち良い、かも）
うっとりとした表情を、彼女は浮かべる。
長女として常に相応しい態度を求められ、甘やかされることがあまり無かったからなのかも知れない。と、彼女は自分なりに己の心境を分析した。

その時。
屋敷の内部全体が、赤と青の混ざった昏く不気味な光で満たされる。
４人全員が同時に、不気味な光を讃える屋敷を見上げた。
途端に空気が張り詰め、嫌な気配が爆発的に膨れ上がっていく。
光は数秒で収まったが、そうして露になった屋敷の内部は……数秒前までは無かった筈の、魔の気配で満たされていた。
……気配だけではない。
肉眼ではっきりと、屋敷の廊下にひしめく数多い魔物の姿が確認

できる。
環とカイリの気配は二階の、華奈達の居る位置からは恐らく一番遠い場所。
何故か屋敷の外へは出て来ない魔物達は、一心にその場所を目指しているかのようにして蠢く。
それを認識した瞬間に二階の方から響いてくる、窓ガラスの割れるような音と、破壊音。
４人は顔を見合わせることもせず、ほぼ同時に背丈よりも高い塀を越えて、屋敷の中へ突っ込んでいた。

3－5　垣間見える幾つかの真実

高速で広い室内を飛び交う巨体をかわしながら、カイリは武器を嵌めた右の拳を床へと突き立てる。
滑空する巨体には掠りもしないものの、床を割り、本や窓ガラスが吹き飛ぶほどの衝撃を生み出すその一撃は、室内へ無造作に踏み込んできた有象無象の魔物の殆どを吹き飛ばした。
吹き飛んだ魔物は、ゲル状の物体であったり獣の姿をしていたりと様々であったが、吹き飛ばした端から、ぞわぞわと再び廊下の方から同じ量が潜入してくる。
室内だけでなく屋敷全体で魔法陣が発動していたことを察したカイリは、小さく舌打ちして再び魔物達を吹き飛ばす一撃を繰り出した。
直後、彼の頭めがけ、凄まじい勢いを以って何かが真っすぐに飛び込んでくる。
彼が素早く床へと伏せてそれを避けると、殺意を持ったその何かを追うようにして、もうひとつ、何かが彼の頭上を飛び越えていった。
凶器の如き鋭い嘴と鉤爪を有する、ゆうにその背に4・5人の人間を乗せられそうなほどの、巨大な鳥型の魔物。
鷹のような鋭い眼光と峻厳たる佇まいは、カイリの世界にも存在する、グリフォンと呼ばれる魔物を彷彿させる。
赤と青の不気味な光を放つ魔法陣から召喚されたものの中で、その魔物だけが、異様な強さと存在感を放っていた。
その魔物にとって広いとは言えない室内を、魔物は、翼から巻き起こす風や室内の壁、柱などを利用して器用に向きを変え、縦横無尽に飛び回る。
環は武器を携え懸命に魔物の軌道を追うが、繰り出された彼女の

一撃は、その風圧で幾らかの有象無象と窓際の壁を破壊しただけだった。
環とて相当の速さで魔物を追っている筈だが……
魔物の動きが速すぎて、追いつけない。当たらない。
いつもの微笑みを消した真摯な表情の環は、窓際から大きく跳躍して室内のほぼ中心に居るカイリの隣へと戻ってきた。
彼女は戻る勢いを加えて横薙ぎに武器を振り抜き、あっという間に室内を侵食しようとする巨体以外の魔物達を、唸りを上げるその風圧で吹き飛ばす。
環は、既に起き上がって巨体を警戒しているカイリに背を預けて構えた。
「ごめんなさい、当たらないわ」
警戒を解かぬまま、カイリは彼女へ微笑む。
「役割を交代しましょう。僕があの魔物の相手をします」
「でも……」
ちらり、と、環はカイリの左肩を見遣った。
彼の左肩は服が裂けており、そこから伺える肩には横一文字に浅くはない傷が刻まれ、相応の血が流れている。
魔法陣が発動した時、環を庇って負った傷だった。
比較的、速力の必要な動きを苦手とする環。彼女が自ら巨大な魔物の相手を選んだのも、それが理由である。
「大したことはありませんから」
彼女の憂いを察して、カイリは更に微笑んだ。
そうしてから、殺意を纏って一直線に飛びかかろうと構える巨大な魔物を、真っすぐに見据える。
「大丈夫。速さで僕に勝てるものは、そう居ません」
カイリが宣言した、直後。
怪鳥が、2人めがけて疾風の如き速さで迫ってきた。
反応が間に合わなかった環を伏せさせながら鉤爪による初撃をかわし、カイリはすぐさま力強く床を蹴って、頭上を通り過ぎた魔物

を追う。
魔物は、方向転換の為に壁へと着地しようとするも――
――その時には既に、カイリの射程に捉えられていた。
肝を冷やした魔物は急いで体の向きを変える。
空を支配するその魔物が、己よりも随分と小さな器しか持たぬ矮小ないきものに戦慄することなど、平常であれば有り得なかっただろう。
だが、鋭い眼光を己へと真っすぐに叩き付けてくる目の前の小さな存在は、捉えられれば終焉を迎えるという確信を魔物に植えつけてくる。
魔物はそれを吹き飛ばし距離を取るため、羽ばたこうとするが……遅かった。
魔物の翼が広がりきるその前に、カイリの拳は魔物の腹の真ん中へとめり込む。
拳が衝突した瞬間、魔物の背後の壁に放射状の鋭い亀裂が走った。
血走る金の目が見開かれ、嘴の端から赤い色の含まれた泡を吐き出しながら、吹き飛んだ魔物は壁へと衝突する。
亀裂の入っていた壁はその衝撃で破壊され、ガラガラと崩れ落ちた。
苦痛に喘ぎながらもその巨体を起こそうとする魔物だが、目の前の小さな人間は、それを待っていてくれるほど生易しい存在などでは無い。
即座に魔物の側面から叩き込まれる蹴り。奇声を上げながら高速で窓際へと吹き飛ぶ魔物をそれ以上の速力で追い、上空から再度蹴りでの追撃。床へ叩き付けられ跳ね上がった魔物に加えられる、拳での渾身の一撃。
窓を破壊しながら屋敷の外へと飛び出す魔物を、カイリは追わなかった。
追う必要のないことが、判っていた故に。

環は、窓から見える景色を光の粒で染めていくものを、静かに見ていた。
彼女では決して追いつくことの叶わなかった疾風の如き魔物。それが、カイリに捉えられてから決着が着くまで、ほんの数瞬の出来事だ。
騎士達がカイリに偵察を任せたのは、恐らくそこに理由があるのだろうと、理解する。
なにものも、彼に追いつくことは出来ない。
……逃れることも、出来はしない。
そんな風に、考えさせられる。

そうして、ふと、周囲を見回した。
室内を埋め尽くさんばかりにぞわぞわと湧いてきていた、有象無象の魔物達の追撃が無くなっている。
屋敷全体で発動した気配があったため、屋敷の規模から察するに、まだ残っていてもおかしくはなさそうなものだが……それについては心当たりがあったため、さしたる問題でもないと認識し、環は小さく息をつくカイリの傍らへと駆け寄った。
「お疲れさま」
いつもの微笑みに戻った彼女はそう言って、カイリをその場へ座るよう促す。
カイリは有象無象の魔物について警戒を見せるが、環と同じ結論へと至ったようで、大人しく腰を降ろした。
と、ほぼ同時に、白く清潔感のある布が彼の左肩へと巻かれる。
カイリの傍らで膝立ちになった環は、愛用の手巾に血が滲むことも厭わず、手早く応急処置を終えた。
「本当は、深冬ちゃんみたいに治せたら良かったのだけれど。庇ってくれて、ありがとう」
ぼっ、と、カイリの顔に一気に熱が上る。
彼はしどろもどろになりながらも、気にしないで欲しい旨を伝え

ることに何とか成功した。
先程までの凛とした姿など何処へやらである。
「親衛隊のお仕事は、大変だったの？」
カイリが改めて状況に狼狽えていると、ふいに、環が言った。
こうした怪我をするような状況が幾らもあったのかと。そういう意味合いだろうかと、彼は受け取る。
「あまり、大変だと思ったことはありません。恩人の力になることは、僕達の悲願でしたから」
「恩人？」
環が首を傾げて問うと、カイリは眼鏡の奥で、懐かしむように目を細めた。
「僕達の国は、度々戦が起こります。人の手で起こされるものも勿論ありますが、比率的には魔物の手によるものが大半。僕達は、そうして被害に遭い、残された……いわば戦災孤児だったんです」
よくある話です、と、彼は笑う。
「そうした子供達の為の施設などもありますが、僕達は国王自らが参戦した討伐戦の生き残りでもあった為か、国王に直接保護され、彼の子息と共に育てて頂きました。
そのうえ、王の子息を護る親衛隊の役目までいただいて……これ以上ない光栄なんですよ」
ただ、静かに。彼の話を聞いていた環は、柔らかく微笑んで、彼の頭に手を添えた。
よしよし。良い子良い子。
そんな声が聞こえんばかりの雰囲気で、彼女はカイリの頭を撫でる。
柔らかい灰色の髪が撫ぜられる感触に、緊張のあまり、カイリは硬直した。
「ところで……」
彼の頭をなでなでしたまま、環は入り口の方へ視線を向ける。
「覗きは犯罪よ？　はるちゃん」

「何であたしだけ名指し！？」
思わず身を乗り出してしまった華奈は、しまったあああぁぁ！！
と、頭を抱えて悶絶した。
それをきっかけに、部屋の入り口扉の後ろから、ぞろぞろと出歯亀達が姿を現す。計４人の出歯亀は、一部はばつが悪そうに、一部はあっけらかんとして、部屋の中へと入ってきた。
２人が有象無象の魔物達についての憂慮を取り払ったのは、既に彼らの気配が屋敷内にあると気付いた故である。環が応急処置を終えた頃には既に部屋の前に居ることにも気付いていたが、何やらこそこそしていたので、あえて放置していたのだ。
尤も、カイリは緊張のあまり、隠れていることにまでは気付いていない様子であったが。
「こそこそと隠れて何をしていたの？」
「い、いや～、良い雰囲気だったのでお邪魔しちゃ悪いかと」
あらあら、と、環は特に咎める様子もなく立ち上がった。
「それより、深冬ちゃん。彼、怪我をしてしまったの。見てあげてもらえる？」
「えっ、あ、うんっ」
ばつが悪そうにしていた深冬は、硬直したままのカイリの傍へ慌てて駆け寄る。手巾を外してみると、浅くはないものの、何とかなりそうな傷だった。
深冬が早速治療を開始する中、部屋の中央付近まで足を進めたフラットとパルスが、ある一点で視線を止める。
床にぽっかりと空いた、四角い穴。
下へ下へと続くであろう、長い階段。
不穏な気配と、神聖な気配。
「さっきの魔物達は、この階段の封印を解いたことで現れたのか」
独り言のように呟かれたフラットの言葉に、ええ、と、環が短く答えた。
この先に、精霊と……恐らくロドリグも居るのだろう。

しかし、何故。
魔族が封印を施した筈の精霊の傍らに、人間であるロドリグが居るのか。
空間移動の魔法など、高度な魔法を使っていたことから察するに、多少は力のある者のようだが……彼が魔族の仲間であるとは到底思えない。
むしろ、ある程度の加護の力を得る者なら、ヴィレイス復活の魔方陣の糧として連れ去られていてもおかしくない筈なのだが……

フラットがそのような考えを巡らせていると、華奈と、治療を終えた深冬も階段の周囲に集まってきた。
「うっわあ、凄い長い階段。落ちたらどうなるかな」
四角の中を覗き込みながら、華奈が言う。
確かに。底が見えないほどに、階段は長く続いているようだった。
「そこの黒い人。試しに落ちてみますか？　人類のために」
「お前が落ちろ」
「こんなか弱い乙女が落ちたら怪我しちゃうでしょ。アナタヒドイヒトネ」
「ハッ」
「うっわなんですか今の嘲笑。普通に返されるより腹立つわ。ツラ貸せや」
「望むところだ」
怪我と言えば、と。
華奈とパルスのいつものやり取りは放置し、フラットは、四角い穴をまじまじと覗き込んでいる深冬を見る。
「そういえば、カイリは」
「あっ、怪我は治せたから大丈夫なんだけど、その……」
深冬は言葉を濁し、ゆっくりと振り向いた。
フラットが彼女の視線を追うと、そこには、床へ腰を降ろしたま

ま硬直するカイリの姿が。
「全然動いてくれなくて。ど、どうしよう」
深冬は困惑した表情でオロオロと狼狽える。
（……頭を撫でられたのが、そんなに衝撃的だったのか）
フラットは心の中で苦笑し、深冬に対して大丈夫大丈夫、と言いながらカイリの傍へと歩み寄った。
「こういう時は、こうすればいいよ」
にこやかな表情でそう言って、彼は己の得物……ハルバートを構える。
照準はカイリの頭。

ゴッ

容赦なく振り下ろされたハルバートの柄の部分が、カイリの頭に命中した。
なかなか良い音がしたな、と、驚いて口論を中断した華奈は思う。
カイリはというと、流石に正気には戻ったものの、鋭いのか鈍いのかよく判らない痛みに、両手で頭を押さえて蹲っていた。
「そろそろ行くぞ」
「……！！　……！！？」
フラットが言うと、声にならない声を上げながら、カイリはようやく立ち上がる。無論、頭は押さえたままだ。
「……フラットっていつもこんなん？」
華奈はこっそりとパルスに耳打ちする。
「何がだ」
「いや、今日はよく彼の黒い部分を目にする日だなぁ、と」
「……今頃気付いたのか」
それは、彼の黒さにということですか、と。
華奈は小さく小さくひとりごち、合流するフラットとカイリを目で追った。

－＊－＊－＊－＊－＊－

長く、長い階段をひたすら下りる。
通路に照明は無く、狭い。人間2人が並ぶのがやっとの幅であったため、6人は一列になって歩いた。
ランプを持つフラットを先頭に、カイリ、華奈達と続き、最後尾にはパルスが就く。
ランプの灯りに照らされる壁は、屋敷内と同じ（趣味の悪い）壁紙の貼られた人工的な壁が続いたが、しばらく下ってゆくとむき出しの岩肌になった。
その頃になっても、階段の終わりは見えない。
そうして、周囲の気配に気を配りながら無言で下り続けるという状況に、何人かが辟易し始めた頃。彼らはようやく、視界の先に微かな光源を捉えた。

階段を下りきると、ランプの炎を消し、やけに明るい空間へと彼らは足を踏み入れる。
その場所は、巨大な空洞だった。
水の精霊が封じられていた場所と、そう変わらない広さ。ただ、地面の色は土色で、階段と同様のむき出しの岩肌のような壁も同じ色。そして、高い天井にびっしりと散りばめられた、この空間の光源である石英のような石は、ほんのりと黄色（こうしょく）の含まれた光を放っていた。
売ったら幾らになるだろうかと。セオフィラス湖畔の洞窟で華奈が気にしていたものと同種のその石は、あらゆる場所で採掘されるもので、第三世界の人々の夜間の一般的な光源として使われている。要するに、さして高価なものでは無いらしい。

と、今はそのようなことはどうでも良く。
彼らの正面、入り口から最も遠い場所。
そこには黄色(こうしょく)に彩られるようにして、世界の力のひとつが存在していた。

デルヴィスやスプライト同様、人間の女性に近い姿。
肌は褐色で、顔を含め全身に、一段濃い色で複雑な紋様が刻まれている。
ゆるやかにたゆたう長い髪は深緑の色で、その御姿は、壮麗とそびえる一本の木を連想させた。
同様の封印なのであろう、地面からそびえる巨大な水晶の中に閉じ込められた精霊。
伏せられた瞳。その顔立ちは幼いが、鳥肌が立つことを禁じ得ない。

騎士達は最敬礼をし、ふと。顔を上げたところで、別の存在があることに気付いた。
精霊が在る場所の、すぐ手前。
跪き、何かを求めるかのように。縋るように、精霊へと手を翳しているのは……望まれぬ暴君、ロドリグだった。
華奈達が厳しい瞳でロドリグを見据え、足音を立てながら前進し始めたところで、彼はようやく侵入者の存在に気付いて勢い良く振り返る。
「それ以上近付くなっ！！」
そう叫んで、牽制の為か振り払うように腕を振った彼は、酷く狼狽しているように見えた。
何かに怯えているようにも見える。
だが、華奈達にとって、彼の心情など関係のないこと。知ったことかとばかりに、6人はロドリグの言葉を華麗に無視し、空間を奥へ奥へと進んでいく。

すると、彼らが空間の中央付近へと差し掛かった辺りで、ロドリグは表情を更に歪め、両手を広げる構えを取った。
不穏な気配を感じ取った華奈達は、ぴたりと足を止める。
彼の表情は悲愴的なものから怒気を孕んだものへと変わり、彼を取り巻く空気も変わった。
いや、空気と言うよりは。
……魔力だ。
うっすらと、しかし不気味に輝く魔力の渦が、彼の周囲を取り巻いている。
「ようやく、手に入れたのだ」
静かな口調で、彼は語り出した。
「不公平な光を持って生まれたあの男の所為で手に入れることを諦めていた、眩しかった地位。確かなる力。ようやく手に入れたそれを、貴様らは理不尽に奪おうというのか！！」
静かであったのは、語り出しのみ。彼の言葉には、徐々に、表情からも感じ取れる激しい怒気が含まれていく。
あの男とは誰を指すのか。
理不尽とは、誰に相応しい言葉なのか。
ロドリグは元々、この街の統治者の使用人であったと。酒場の店主の言葉を思い出す。
あの男というのが統治者を指しているというのなら。
統治者の元で働きながら、彼はずっとその立場を羨んでいたとでも言うのだろうか。同じ力を欲していたとでも言うのだろうか。
ならば、何故。
ようやく手に入れたというその力で、街人達をねじ伏せる道を選んだのか。
街人達から認められていたことを感じさせられる、行方不明の統治者。彼は少なくとも、ロドリグと同じ統制を布いてはいなかった筈だ。
力を振り翳(かざ)せば、力により淘汰(とうた)される。

それは結集した街人達の手によるかも知れないし、更なる力を持つ何者かの手によるかも知れない。
どちらにせよそれが世の理であるというのが、華奈達の認識だった。
「よく考えてみてください。貴方はほんとうに、この街の人たちから受け入れられているのかどうかを」
静かに、静かに。小さな子供に言い聞かせるかのように、環が言う。
うるさい、と、ロドリグは目を怒らせ、口の中で呟くだけであった。
「仮にもお前が支配者であることが出来たのは、他者を押さえ付ける力を持ってしまったから。それだけだ」
「そんなの、街の人達がいつまでも受け入れてくれる筈がないよ」
「真に従うべき存在の姿を、在り方を、街人達は知っている。彼らはいずれ本来の姿に回帰する」
パルス、深冬、フラットが続く。

うるさい、うるさい、うるさい……
初めは曖昧な発音でしか無かった彼の呟きは、徐々にはっきりと言葉として聞き取れるものへと変わっていった。
彼らの言葉は、今のロドリグには届かない。
街で初めて対峙した時は、話は通じないものの、まだ会話が出来ていた。
だが、今は違う。
彼の様子は、どこかおかしい。
華奈達と対峙しているというのに、彼女達を見ていない。目の前の彼女達ではない、別の何かに怯えているかのような……
……何より、彼を取り巻く不気味な魔力が不可解に過ぎる。
人間が持ち得る“魔法”と呼ばれる類の力では無いと。そんな予感がするのだ。

「あなたが、支配を止めないというのなら」
「……あたし達が、あんたを押さえ付けるだけだ」
カイリの言葉を引き継いで、華奈が締め括った。
話が通じない相手に取れる手段は、実力行使しかない。
街人達にそれが出来ぬというのなら、更なる力を持つ者……華奈達の手で、淘汰するのみだ。

「うるさい、うるさい、うるさあああああぁぁぁあああぁぁぁい！！！！！」
遂に、ロドリグは咆哮した。
同時に、彼の両手と背後の空間に、不気味な赤の輝きを湛える大小様々な魔法陣が複数展開される。
華奈達が各々瞬時に動き出せる態勢を整えると、ゆらりと、同じ不気味な赤に支配された彼の目が、彼女達へ向けられた。

3－6　ふたつの贈り物

不気味な赤の魔法陣達が、一斉に輝く。
華奈達は、その効力を経験から察した。水の精霊の洞窟や統治者の屋敷内で見たものと雰囲気の酷似したそれは、恐らく、召喚魔法の類だと。
推測通り、魔法陣からは次々と異形のイキモノ達が姿を現した。
それは、体毛の黒い痩せた犬の群れ。
但し、爪や牙は一般的に犬と呼ばれるものとは比べようもない程に鋭く、獰猛な目は血走り、首の数は1つから9つまでと多様。……紛うことなき、魔物である。
束の間のうちに、既に数十もの数に及んだその魔犬の群れは、四方から華奈達めがけて襲い掛かってきた。

地を這うようにして、冷気が奔(はし)る。
冷気は猛進する魔犬達の四肢に纏わりつき、群れの殺意が華奈達に到達する前に、地面ごと凍結させて進軍を封じた。
あちらこちらで、氷の拘束を受けて地に縛り付けられた魔犬達の悲鳴、咆哮、抵抗の鳴き声が上がる。
だがあらゆる声の振動が空間へと伝わりきるその前に、声を発した主達は悉く光の粒子となって空気へと溶けていった。
冷気を放った深冬を中心とし、傍らには環。
2人の四方を護るようにして前へ出た、華奈、パルス、フラット、カイリ。
魔犬達が凍結した瞬間に、各々の得物による一撃で数十の群れを葬り去った4人は、次の攻撃に向けて構えを取る。
何せ、瞬きの間に、次から次から魔犬達が召喚され続けてゆくのだ。
一体一体は彼らにとってさしたる脅威ではないが、気を抜けるよ

うな状況でもない。
深冬は出来得る限り魔犬達の足止めを続け、騎士達は彼女が足止めしたものを確実に葬りながら、拘束が間に合わなかったもの達をも可能な限り捌く。街までの行程で、カイリに師事することで動きが飛躍的に向上した華奈も彼らに倣い、環は範囲的な攻撃が比較的苦手な華奈の補助をしながら、４人が取りこぼしてしまった何体かを相手取った。
申し合わせたかのようなその動きで、魔犬達の全ては召喚された傍から魔力へと還ってゆく。
だが、あまりの猛攻に、本体であるロドリグには近付くことも出来ないという状況だった。
「ちょっと！　あのハゲ、雑魚キャラの筈なのになんか強くないですか！？」
「そこはかとなく中ボスくらいの配置じゃないかしら」
「でも、確かにおかしいね。あの魔力や魔法の質……あれではまるで」
「魔術、に近いな」
不気味な赤の魔力はロドリグ自身から放出されているように見える。
魔法の質の違いなど判らないながらも、華奈達が肌で感じていた違和感。騎士達の見解を聞いて、予感だったものは確信へと変わる。
「でも、私達みたいな特例でもない限り、人間に魔術って使えないんだよね？」
「ええ、ですが、例えば彼が魔族達の仲間であるという可能性も……」
「「「小物のくせに？」」」
カイリの例え話に、第一世界女性陣の台詞が見事に重なった。
彼女達の持つロドリグへの印象は、なかなかに悪辣なようである。環さんまで……とカイリは半ばショックを受けたが、それも仕方あるまいと思い込むことで、騎士達は精神的なダメージを軽減した。

けれど、確かに。
「仲間、というよりは、操られているか利用されている可能性の方が高いかも知れないね」
フラットがそう言ったので、華奈達は魔犬の弾幕の隙間から、ロドリグの様子を伺ってみる。
彼の身体から放出される魔力のうねりに合わせて、頭頂部隠蔽用に選り分けられた薄い髪が揺らめいて彼の本来の姿を露に……ではなく。
不気味な赤と同じ色に染まった彼の目は瞳孔が忙しなく動き、戦闘相手である華奈達を見ていないばかりか、何を映しているのかさえ判断がつかなかった。
もはや様子がおかしい、のレベルではなく、明らかなる異常。
このまま力を使い続ければ彼自身も危ないのではないかと、容易に想像させられる。
「小物のくせに無茶するから……」
華奈は顔を顰め、小さく呟いた。
「ねえ、一発ぶん殴ったら正気に戻らないかな！」
「戻るかも知れんが、まず奴に近付く方法を考えるのが先だ」
「カイリ、精霊は何か言っていないのか？」
「それが……彼が力を使い始めてからも何度も呼び掛けを試みているんですが、何も応えないんです」
「深冬ちゃんの魔術はあそこまで届かない？」
「多分届くと思うけど、ワンちゃん達の足止めが少しの間できなくなっちゃうかも」
「足止めなしでこの数を相手取るのは厳しいが……やってみるか？」
「……それしか無いか。ミフユ、俺が合図をしたら彼を狙って。……パルス、カイリ、頼むぞ」
はい、と、フラットの言葉に深冬は短く返事をし、パルスとカイリは小さく頷くことで応える。

だが、フラットの合図が送られることは無かった。
魔犬の弾幕が突然止んだのだ。
残りの数体を片付けてから、彼らはドロリグを見る。
ロドリグは両手を広げた体勢のまま、痙攣していた。
目は相変わらず不気味な赤を湛えているが、彼から放出されていた魔力のうねりと展開されていた魔法陣は消滅しかけている。
それらが完全に消滅すると同時に……彼の右手の甲で何かが弾け、弾けたものは絶命した魔物達と同じように、光の粒子となって空気へと溶けていった。
何故、彼は突然攻撃の手を止めたのか。弾けたものが何であったのか。気掛かりではあるが、今、最優先すべきはそんな事ではなく。

ぶん殴って正気を取り戻させるなら、今しかない。

そう思った瞬間、華奈はロドリグの方へと真っすぐに突っ込んでいた。
2人の間は五十メートルほど離れていたが、今の華奈なら、たった数度の跳躍でその距離を詰めることが出来る。
ゆえに、それは……そのたった数瞬の間に起きた出来事であった。

「予想以上だったわね」
突然、空間に第三者の声が介入する。
声を認識するのとほぼ同時。上空からの冷え冷えとする敵意の気配を全員が感じ取った。
戦慄する背筋。
まずい。
脳では理解したものの、もはやロドリグへと到達する為の最後の跳躍を終えていた華奈が方向転換するには、身体の反応が追いつかない。
すぐ頭上まで敵意の気配が迫り来るのを感じた華奈の身体は、し

かし、意に反して斜め後方へと方向転換していた。
……否。方向転換というよりは、何かに抱えられて地面すれすれの位置を飛ぶように移動している。
だが飛んでいると感じたのはほんの刹那の間。飛翔する為の翼など持ち合わせていない、華奈を抱えた何かは、小さく舌打ちをすると彼女の頭をきつく抱え、己の肩口を犠牲にして地面へと突っ込んだ。

何度も何度も回転してから、華奈とそれはようやく止まる。
一体何が……と、ほんの僅かの間逡巡した華奈は、己の頭を押さえつけていた力が緩まったのを感じてがばりと上半身を起こした。
この感覚には、覚えがある。
予想通りの人物が自分の下に居るのを確認し、華奈は顔を歪めた。
「パルス、あんた……何してんの！！」
思わず声を上げ、華奈は下敷きにしていたパルスの胸倉を掴んで彼の上半身を引っ張り起こした。
パルスは微かに顔を顰める。凄まじい勢いで地面と衝突したうえ、その後も華奈を庇い続けていたのだから、何処か痛めていて当然だった。
「……お前、命の恩人に対して流石にそれは無いだろう」
まさか胸倉を掴まれるとは思っていなかった彼は、ため息を吐き、呆れ気味に言う。
言われて、華奈はロドリグの居る辺りをゆるりと見た。

それは、巨大な7本の剣（つるぎ）。
刀身も柄も、血の色を吸ったかのような、深い、深い紅（あか）。

ロドリグの少し手前、まさに先程まで華奈が居た位置を含むその場所に、牢獄の格子の如く等間隔で、それは突き立てられている。
華奈は口を引き結び、ただ驚愕した。

頭上から迫ってくるのを感じていた敵意の気配の正体は、人の背丈の五倍はあろうかというその剣だったのだ。まともに喰らっていたら、命が無いどころの話では無かったかも知れない。
華奈は改めてパルスを見た。
あちこちが土埃に汚れ、左肩の辺りが派手に擦り切れている彼の衣服。露になった精悍な左肩には、これまた派手な擦(す)り傷。折角整っている顔にも細かい傷が沢山ある。華奈には掠り傷ひとつ無いというのに。
弾丸かと思うような速さで、彼は突っ込んできた。急速に方向を変えたことも、肩から着地したことも、相当な無茶をしたに違いあるまいと華奈は思う。怪我だって、表面的なものだけでは無いかも知れない。
「馬鹿者！　カイリと同じとこなんて怪我して！　お前らは仲良しかっ！！」
「なん……」
パルスは言い返そうとして、止めた。
先程よりも更に表情を歪めた華奈が、決してそんなことは無いのだろうと判っていても……泣き出しそうに見えた故に。
彼女は深く息を吐き出してから、パルスの胸倉を掴んだままの己の手に額を預けた。
そうして、呟く。
「ありがとう……ごめん」
パルスは、今度は呆れの含まれていないため息を小さく吐いた。
「ああ。威勢が良いのはいいが、無茶はするな」
「無茶したのはお前だ、黒いの」
「そうだな」
そんなやり取りをしていると、他の４人が彼らの元へと駆けつけてくる。パルスはそちらを見遣り、華奈も気付いて顔を上げた。
「はるちゃん！　パルスさん！　大丈夫！？」
「あたしは平気！　黒いのを見てやって！」

「お前……せめて名称で呼んだらどうなんだ」
駆け寄ってきた深冬がパルスの傷を診始めたので、華奈は胸倉の手を放して彼を深冬に預け、立ち上がる。
他3名にも「心配かけてごめん」と声を掛けてから、華奈は再び紅き剣の場所を見た。
倣うようにして、他の者達もそちらを見る。

すると、時を図ったかのように、上空から誰かが降りてきた。
重力に従順ではない、ゆったりとした下降速度。
女性を強調する艶やかな身体のライン。品を損なわない程度にそのラインを魅せる装い。気の強そうな釣り目気味の容貌だが、造形は美しい。
だが、長細く尖った耳は、彼女が人間という存在ではないことを誇示していた。
彼女は殆ど音を立てずに、紅き剣を挟んでロドリグの前へと降り立つ。上空へ靡いていたガーネット色の長い髪が、ふわりと元の位置へ帰還した。

魔族、と。
女の容貌を見て、誰かが呟く。
彼女はいつの間にか膝を折っていたロドリグを紅き剣越しに見下ろし、柳眉を顰めた。
“予想以上”とは、“予想以上に使えない”という意味合いの言葉であったのだと。華奈達は彼女の蔑むかのような表情から理解する。
そうしているうちに深冬がパルスの怪我の治療を終え、2人とも立ち上がって改めて女を見据えた。
魔力の塊で造られた紅き剣。それが粒子となって消えゆく幻想的な背景に彩られながら、女は振り返り、6人に撫でるような視線を送る。
「初めまして？」

女は胸元で腕を組み、妖艶な笑みを作って首を傾けた。
「ご丁寧にどうも。初めまして」
華奈が警戒した表情のままそう返す。
「不意打ちしたつもりだったのに、私の剣を避けるとはたいしたものね。流石、精霊を一匹解放しただけのことはあるわ」
少々嫌味の色が込められた口調でそう言った女の言葉で、華奈達は彼女が敵方の魔族の一味の者であることを確信した。
「お褒めに預かり光栄ですよ」
「けど、殺すつもりは無かったんだから避けずに大人しくしていてくれても良かったのに。私、ちょっとあんた達の血が欲しいだけなのよ？」
やはり、存在が割れてしまった今、真っ先に血を狙われている。
華奈達は警戒を強めていつでも動き出せるよう身構えた。
「あんたらに提供するくらいなら献血でもするっての。オバサン」
「んなっ！？」
急に攻撃性を増した華奈の言葉……主に“オバサン”の部分に反応して、女は憤慨する。先程までの妖艶で余裕のある様子はどこへやら。目を吊り上げて顔を真っ赤にし、キイイィー！　と奇声を上げた。
そんな声を本当に上げる人など初めて見たので、華奈達女性３人はこっそり感動する。
「あんた達、さては第一世界人ね！？　似たり寄ったりな煽り方しか出来ないその低脳さ！」
その低脳な言葉に煽られまくったのはどこの誰だと思いつつ、華奈達は女の言葉に喰い付いた。
「その低脳な台詞、一体何処の誰に言われたのかしら？」
環がそう言うと、女ははっとしてばつが悪そうな表情を作る。
怒りに任せて要らぬことを言ってしまった故であろう。妖艶で高圧的な印象を受けていたが、この怒りっぽく少々間の抜けている方が、この魔族の女の本質なのかも知れなかった。

「ふん、あんた達と似たような年頃の失礼極まりない女達よ。自分の立場を弁えていないところもそっくりね」
言ってしまったからには仕方がないと、女は開き直った様子である。
彼女は華奈達をねめつけて嫌味たっぷりの口調でそう言ってくるが、それを聞いて、華奈達は笑った。
捕まっている立場であるというのにそんな事を言ってしまうとすれば、明らかに愛花だろう。
いや、綾瀬も意外と図太い神経をしているので、判らない。
そんな風に想像させられて、嬉しくなったのだ。
「何を笑っているのかしら。気持ち悪いわね」
更に嫌味で反撃してやろうと考えていた魔族の女だったが、毒気を抜かれ、片眉の端を上げて肩を竦める。だが、絆(ほだ)されている場合などではなかった。
「兎に角。あんた達は拘束させて貰うし、精霊の復活もさせない。いいわね」
「そう言われて、はいそうですかって言うことを聞くわけがないよね」
「魔族とはいえ、この人数をまともに相手取れるのかな？」
「出来るものならば、やってみるがいい」
「……私をそこら辺にいる魔族と一緒にするんじゃないわよ」
深冬、フラット、パルスがそう返すと、名も判らぬ魔族の女を取り巻く雰囲気が変わる。
かつて世界を掌握するなどという馬鹿げたことを実行しようとした魔族の部下だ。幾ら間が抜けていようと、沸点が低かろうと、一筋縄ではいかぬ相手であることは流石に判る。
６人は更に警戒を深めるが……動き出したのは、女ではなかった。
「あ、ああ、アあぁああヴぁあああぁぁァ！！！！」
立ち上がり、意味の無い咆哮を上げたのは、ロドリグ。

華奈達は驚いて彼を見るが、魔族の女も驚愕して振り返り、後方へ跳躍して彼との距離を取る。
ロドリグは相変わらず焦点の定まらぬ目をしていたが、特筆すべきはその色。先程までは赤だと認識できる魔力の色に染まっていたが……今は、訳の判らぬ醜悪な色に染め上げられていた。
距離を取って構えた魔族の女は、彼の右手を見て驚愕する。

ひと月ほど前であったか。
冷徹なる魔族の男シュノヴァと共に、彼女……ライラがこの街に精霊を封印し、魔法陣の糧とする為に街の統治者を攫った日のことだ。
統治者の元で働いていたこの男は突然の侵入者達に怯えながらも、目の前で攫われようとする統治者を助けようともせず、ただ嗤(わら)った。
目障りなものが消えてくれると。そう言わんばかりの表情で。
その野心が使えるものか試してみようかとシュノヴァは言い、魔物と、指輪と、言葉を男に与えた。
“今から、精霊の力はお前のものだ”
たった一言。
そう言って指輪を渡すと、何の力も持たぬ男はその言葉を妄信したのだ。
封印を施した精霊の守りの一環として、利用されようとしていることなど知らずに。

指輪には、魔族にのみ精製法が伝わる石が嵌め込まれている。
魔族が己の魔力を練成することによって精製されるもので、通常の人間にとっては脅威となる魔力が内在していることは確かだ。
だがそれは、内在する力を使い切れば崩壊する仮初(かりそめ)の力。世界を支える精霊の力になど及びもしない、紛い物。
先程、その時に渡した指輪の石は砕け、消失した。
要は燃料切れ。故にロドリグは、その身で扱うには強大過ぎる魔

力を無思慮に使い続けた代償として、一時的に肉体が制御不能な状態へと陥っていたのだ。
しばしの間、身動きなど取りようもない。
……その筈であったというのに。
ロドリグは再び両手を広げ、己の周囲に魔法陣を展開させ始めた。
彼にそうする為の力を与えているのは、彼の右手にある存在。魔石が失われた装身具の隣の指に嵌められている、もうひとつの指輪に他ならない。
その指輪に嵌め込まれた石は、大気中の何かを吸収しながら明滅していた。
まるで、警告を告げるシグナルのように。

ライラはその指輪の正体を知っていた。
力を持たぬ者がそれを使えば、どうなるのかも。
それをただの人間である彼に渡したのが、誰であるのかも。

耳障りとすら思える咆哮を上げ続けながら、ロドリグは召喚魔法を展開し続けた。
今度は魔犬だけではない。
地を這う雷光、錯乱する炎、人の足よりも太い茨の蔦。有機的なものばかりでない、あらゆるものが呼び出されては襲い掛かってくる。
魔物もより凶悪で、醜悪なものばかり。
先程の魔犬のように、何の形状をしているのか認識できるようなものは、もはや存在しなかった。
異常なうえに暴走していることは明らか。
何より華奈達にそれを確信させるのは……姿形が違うとはいえ、同じ魔の眷属である筈の魔族の女にまで、魔物達が襲い掛かっているという事実だった。
魔族の女は焦燥感の漂う表情を見せながらも、魔力の壁で雷や炎

を遮断し、四方から襲い来る魔物達は多様な大きさの紅い剣の乱舞で的確に屠っていく。
剣と共に舞う、鮮やかな赤。
流麗で情熱的な身のこなしは、落ち着いた場面でさえあれば、思わず目を奪われていたに違いなかった。
そんな風に彼女の動きに関心を寄せながらも、華奈達は華奈達で先程と似た陣形を組み、激しくなってゆく魔のもの達の猛攻から身を守る。
だが、状況は戦闘開始時と変わらない。前進も後退も出来ぬという、何とも焦れたものであった。
そんな折、途切れない猛攻に遂に何かが切れたのか。魔族の女は目を怒らせながら、華奈達に向けて叫ぶ。
「ちょっとあんた達、精霊の使い走りなんでしょう！？　あの役立たず何とかしなさいよ！！」
正直、八つ当たりにしか聞こえなかった。
華奈達も魔のもの達を捌きながら、器用に応酬する。
「使いっ走り言うな！　せめて強制労働者と言えっ！」
「ハルちゃん、それって余計に悲しくない……？」
「まあ、俺達はともかく、ミフユ達は確かに強制労働に近い、かな？」
「そもそも貴様等があの男の飼い主ではないのか。飼い主なら手綱くらい握っていろ」
「うるさいわねっ！　……こんなの、想定は出来たとしても、予定外だわ」
女は、悔しげに奥歯を噛み締めながらそう言った。彼女は更に何かを言いかけたので、華奈達はその声に耳を傾けてみる。
「あの役立たずの右手にある指輪を見なさい。あれは、周囲にある魔力的な存在を集め、装備者の魔力へと変換する役割を果たすものよ。収集対象は、より高純度で強大な魔力。……何が言いいたいか、判るわね？」

魔の召喚物の嵐の中、華奈達は魔法陣を繰り出し続ける彼の右手を見た。確かにそこには指輪が嵌められ、周囲の何かを吸収しながら明滅している。
指輪に近付くにつれて、より強く視認できるようになってゆく魔力の帯。その軌道の先は……微かに、封印された偉大なる存在の方向へと延びているように見えた。
「精霊の力を、利用しているって言うんですか……？」
「精霊がカイリの呼びかけに応えなかったのは、もしかして、それが原因？」
「そんな事までは知らないわ。けど、封印から漏れ出る微かな力を利用しているとはいえ、これは精霊の力の暴走に等しい。このままでは、私も、あんた達も、あの男も、危険だということだけは確かね」
殺意。焦燥。羨望。執着。
ロドリグというフィルターを通した“精霊の力”とやらからは、そんな負の激情しか伝わっては来ない。
尊き力は、そんな風に利用されて良いものでは無い筈だった。
「精霊の力は、あんなのじゃないよ」
その身に精霊の力を宿しているからこそ、より不快に思ったのだろう。深冬が眉間に皺を寄せ、ぽつりとそう呟く。
「あんな風に使ったら、ダメだよ」
深冬は更にそう続けた。
その小さな言葉をどう受け取ったのか。魔族の女は、微かに深冬の言葉へと向けていた意識をロドリグへ戻し、目を細くする。
「暴走を止めるには指輪の石を破壊するしかないわ。けど、あの石は物理的な力で壊しても止まらない。あの石で処理出来ないほどの魔力を一気に流し込んで、機能ごと破壊するしかないの。
……この状況で、それが出来るのならね」
「やるもん」
可愛らしい顔に、精一杯の真摯な表情を浮かべて。深冬が言った。

今この場でそれが出来るのは、彼女しか居ないのだ。
だが、深冬が全力をもって力を発揮するには、それなりに集中する為の環境が必要不可欠。次から次へと襲い来る魔物達に集中を削がれるような現状では、無理がある。
状況を打開する為には、互いの力が必要。
そう判断した華奈達と魔族の女は、その環境を手にする為の作戦を立て始めた。

ライラは、敢えて口には出さない。
その間、微かに脳裏を過ぎったこと。
指輪を破壊へと導く為の、もうひとつの方法を。
何か負の理由や意図があってのことでは無い。このまま暴走する男を放っておけば、勝手にその方法が適用されるからだ。
指輪は、周囲の力を装備者の魔力へと変換する。
通常その指輪は、魔族達が強力な魔術を使役する際に補助的な役割として活用するものだ。故に、魔族のように、自身で魔力を生成し内在させられるような身体の構造をしていない限り、正常には扱えないように出来ている。
現在ロドリグの身体は、無理矢理に魔力を経由させ、使役している状態。
魔術を発現させるフィルターとして、人間の身体では構造的に無理があるのだ。フィルターに不具合が生じれば、魔力は発現されなくなる。
魔力という名の異物が排出されることなく、体内へ詰まってゆく。
そうして、内部と外部の両側から魔力による圧力を受けた指輪の石は、破壊されるのだ。
装備者の身体と、共に。

華奈達が、何とか深冬が集中する時間を捻出する算段をつけ終えた頃。

ロドリグが繰り出し続けていた魔法陣が、不自然に明滅し始める。
彼女達の作戦会議も、深冬の決意も虚しく、“その時”は意外にも早くやって来てしまった。

3―7　届けられた声

最初の指輪が壊れた時と似たような現象。
魔のもの達の弾幕が突然止む。
ロドリグは両手を広げた態勢のまま痙攣し、展開されていた魔法陣も消滅していった。
……だが、決定的に違うのは、彼の表情。肉体へのダメージ。痙攣を続ける彼の顔に、もはや生気は無い。
「何でっ！！」
彼を狂わせる指輪へと。正に魔力を送り込む直前であった深冬は、殆ど絶叫した。
今にも涙が浮かんできそうなほどに、彼女はその表情を歪ませる。
あんなどうしようもないような者でも、救えなかったことが悔しいとでも言うのだろうか。
召喚の手の止まった魔物達の残りを紅き剣で貫き、魔族の女は、限界を迎えてくず折れる寸前のロドリグを静かに見据えた。
「元々、何の力も持たない人間だもの。身体の限界のほうが、先に来たってことよ」
淡々と、そう告げる。
限界、という言葉に反応したかのように、ロドリグの身体はゆらりと傾き……華奈と環は、倒れかける彼へと向かって全力で駆け出した。
一瞬遅れて、深冬も2人の後を追う。
「待て！　危険だ！」
フラットが思わず声を荒げて制止するも、彼女達は受け入れなかった。
華奈は重力のままに背中から地へ衝突する寸前であったロドリグの身体を受け止めてそっと横たえ、環も即座に傍らへと跪き、彼の瞳孔と脈を確認する。

力なく濁った瞳が何を映しているのかは判らなかったが、脈はあった。
「まだ生きてる」
その言葉を聞くや否や、一瞬遅れて到着した深冬が、彼の胸元に両手を当てて力を込め始める。
彼女の手のひらとロドリグの身体の境目から溢れる、柔らかな光。癒しの青。
騎士達は彼女達の元へと駆け寄りながら、魔族の女はその場から動かぬままで、その光景を見た。
「……理解できないわ」
心の中で呟いたつもりの言葉は、女の口から微かな音として漏れる。尤も、だいぶ離れた位置に居る華奈達には、その音は届いてなどいないであろうが。
理解できない。
女は再度確認するかのように、今度は心の中で呟いた。
自分達を妨害しようとした敵方の相手。生かしておけば、この街の者達にとっては脅威となる思考の持ち主。
彼はようやく消えようとしているのだ。
彼を利用していた女でさえ、手間が省けたとすら思っていたというのに。助けようとする意味が判らない。
騎士達も、どちらかと言えば魔族の女寄りの考えだった。
力を失った今、ロドリグに何が出来るとも思えないが、街人達にとっては望まれぬ存在であることは確か。
そもそも、外傷は殆ど無いとはいえ、魔力の駐留によって内部に様々な損傷を負った彼の身体が、幾ら深冬の回復術でも癒せるとは思えなかった。
けれども、彼は目を開く。
偶然にもその場所は精霊の御許。微かに生の光の戻った彼の目は、眩いばかりのその存在を捕える。
殆ど力の入らない、震える右手を、ロドリグは精霊へ向けて差し

出した。
「……ようやく、手に入れた……私のものだ……あいつなどには……」
弱々しいしい言葉は途切れ途切れで、何を伝えたいのかはっきりと理解は出来ない。それでも判るのは、未だ執着が途切れていないという事実。
片方は石が失われ、もう片方は石の輝きが殆ど消えかけている、彼の“力”。
華奈は、精霊に向けて差し出された彼の右手に手を伸ばし……ふたつの指輪を、彼の指からむしり取った。
力ないながらもロドリグは驚愕し、その表情を悲しげに歪める。
目を据わらせた華奈は、彼の表情を見て青筋を浮かべ、無情にも指輪をその辺に放り投げた。
「か、返せ……私の……」

「黙れ小物がーーーッ！！」

ゴッ！！
一喝と共に、鈍い音が響く。
明らかに弱りきっているロドリグの広い額に、華奈が容赦のない手刀を喰らわせた音だった。
騎士達も魔族の女も、流石に驚愕して目を剥く。
立ち上がった華奈は片手を己の腰に当て、もう片方の手で、びしりと人差し指をロドリグへ突きつけた。
「人から与えられたもので偉そうにすんな！　たかが押さえつけただけで、全てを得た気になるな！
理不尽とか何とか言って、お前は何か少しでも努力したのか！？
そりゃあ生まれついてのものは無理かもしれないけどなー、だからと言って悲観して自分には無理だって諦めて、力が無いからって選べるものまで無いって決め付けて、結局自分で自分をちっさい枠

の中に閉じ込めてたんじゃないのか！
そもそも理不尽なことされて嫌な思いしたんなら、街の人達にも同じ事すんな！　自分がやられて嫌なことは人様にもしちゃいけないって教わらなかったのかっ！
そんなだからハゲるんだよ！　毛根の育成からやり直せっ！！」
一息でそう言って、華奈はやり遂げた表情で額の汗を拭う。
「あー、すっきりした」
「ハルちゃん、多分もう聞こえてないと思うよ」
突っ込みを入れた深冬は、しかし、笑っていた。
恐らく手刀による一撃が原因でロドリグは気を失っていたが、息はある。３人ともが笑っている彼女達は、それだけで満足しているご様子。
黒い騎士は呆れ返り、息を吐いた。
「死にかけの相手に何をしているんだ」
「安心したまえ、峰打ちだ」
「手刀には峰しかないから、安心だね」
「……」
話が通じないらしい華奈と環に、パルスは頭を抱えるしかない。
その様子に苦笑を漏らしてから、フラットは深冬へ問い掛けた。
「どうして、助けたの」
「この人は、許されないことをしたから」
意外にも即座に返された答えの意味を理解しかねて彼が首を傾げると、深冬は穏やかに笑う。
「例えば――……」
続けようとした深冬の言葉は、不自然に途切れた。
「……またか」
代わりに、フラットが溜め息交じりでそう呟く。
彼らは全員が同じ場所を見ていた。
ロドリグから抜き取られ放り投げられた指輪が着地した辺り。その場所を中心として地に広がる、巨大なる魔法陣を。

その効力は判らない。
けれど、強制的に背筋を走る戦慄によって、危険度だけは認識できる。深冬は即座に空間唯一の出入り口である階段の方へ向けて、全力で冷気を放った。
その場所は一瞬にして凍結し、あらゆるものの侵入を阻む壁となる。
彼女達は空間内へ閉じ込められたが、それ以上に、これが発動した際に発現するものを外へ出すことの方が危険だと、そんな風に感じたのだ。

――そんな時だった。

『ようやく。あなたたちの声が、きこえる』

カイリの頭の中へ直接話し掛けるかのように、声が響いてきた。
高音で、闇夜に響く鈴の音よりも儚げで、幼い少女のような声。
それが誰のものであるのか、彼は一瞬で理解する。

『わたしの、声がきこえる？』
「……ええ、ようやく。貴女の声を聞くことが出来ましたね」

カイリは声の主を、尊き世界の力を、仰ぎ見た。
黄水晶の中へと捕えられた、精霊の姿を。

その声は、未だカイリにしか聞こえていなかった故だろう。
突然何事かを呟いたカイリを、他の5人は怪訝そうに振り返り、見る。
だが彼らは何が起こったのかすぐに察した。やはり、とでも言う

べきか。ロドリグが身に着けていた指輪の力が、精霊とカイリとの対話を邪魔していたのだろう。
彼らが先程まで抱いていた危機感は、何処ぞへと消え去った。
世界の力が解放されるからには、この事態を回避出来ぬ訳が無いのだ。

ヘザーベアネスへと近付くにつれてカイリを導いてきたのは、呼びかけるような気配のみ。
深冬が言っていたように、その声までは聞くことが出来なかった。
封印のうえに、強い、強い妨害の上乗せ。気配を送ることすら、困難だったのかも知れないが……
今では、阻むものなど何も存在しない。
はっきりと彼へと届く、尊き声。
『闇のせかいの門が、ひらかれようとしている。街はうしなわれる』
「回避することは、出来ますか」
『たやすい』
封じられた精霊の幼い顔はひくりとも動かないが、カイリには、精霊が笑ったように見えた。
『あなたがわたしの力をてにすることは、たやすい。わたしをこのばしょから、連れてゆけばよい』
名を呼べば良い。たったそれだけ。
確信にも似たその思考は、カイリの表情にも不敵な笑みを浮かび上がらせる。
「ええ、共に行きましょう。
――クラッド」
静かに紡がれたその名。
目覚めの言葉により、精霊クラッドはゆるりと目を開く。

水晶は光の粒子となって霧散し、眠たげに半分だけ目が開かれた幼い面立ちの精霊は、両手を広げて霧散する光の中を降りてきた。
精霊は愛しむように、カイリの首へとその両手を回して頬を摺り寄せる。それから、正に発動する寸前の魔法陣を視線で撫ぜた。
カイリの肩へ片手を添えたまま伸ばされた、もう片方の褐色の腕。
カイリも精霊に倣うようにして、魔法陣の方向へと片腕を伸ばす。
伸ばされた腕の動きは緩やかであったが、魔法陣を破壊した力は苛烈なものだった。
地鳴りが響き、激しく隆起する大地。
突進する岩の槍。
放射状に広がり行進するそれは、地面ごと魔法陣を破壊してゆく。
大地の力に貫き尽くされ、発動直前の強い輝きを失った魔法陣は、その力を発揮することは無かった。

「可愛い外見してるのにやること派手ですな」
廃墟の一角などよりも凄惨な状況になっている場所を眺めながら、華奈は思わず呟く。
巨大な鉤爪で何度も何度も執拗に引っ掻き回したかのような破壊の痕。地面という殻を破るかのように突出した岩の槍。先程までは、魔法陣が煌々と輝きを放っていた場所だ。
それをやらかした張本人達はというと、気を失ったロドリグの傍らで、改めて容態を確認している環と深冬の近くに立っている。
尤も、立っているのはカイリで、精霊クラッドは彼の肩にちょこんと手を沿え、背後をふよふよと浮いている訳だが。
『むりに、ちからを使った。めざめは遅いかもしれない』
幼い少女のような儚い声で、地の支配者たる精霊クラッドは、淡

々とそう告げた。封印の解かれたその声は、今度は全員に音として伝わる。
「いずれ目覚めることができるなら、それでいいんです」
相変わらず穏やかな笑みを湛えて、環は返した。
命があっただけ奇跡だと、騎士達は思う。
『かのじょも、少しむりをした。少しの休息がひつよう』
彼女？　と、彼らは顔を見合わせた。
その言葉がきっかけであるかのようにして、環の少し後ろへ控えていた深冬が、小さく乾いた笑いを浮かべながらその場へとへたり込む。
彼女のすぐ近くに居たフラットがしゃがみ込み、背を支えながら、心配げにその顔を覗き込んだ。
深冬は顔色が少し青白く、幾筋かの冷や汗が流れている。
『済まぬ』
突然、もうひとつの声が介入した。
高めだが、威厳と凛々しさを備えた、聞き覚えのあるその声。声の主は、深冬の傍らからすうっとその姿を現す。
『封印の近くであること。私の守護する物質の希薄さ。魔装具での妨害。多様な影響が重なり、ミフユは力を上手く引き出すことが出来ず、私も姿を現すこと叶わぬ状況であった。無理をさせて済まぬ』
「あはは、全然大丈夫だよ」
悲しげな面持ちで頬を撫でてくる精霊スプライトに、深冬は精一杯の笑顔でそう返した。尤も、顔色の所為で強がりにしか聞こえなかったが。
『かのじょは、少しやすめばよくなる。だいじない』
目覚めないロドリグの件もあるため一同の心配は深かったが、クラッドの言葉で胸を撫で下ろした。
眠たげなクラッドのその瞳を、凛としたスプライトの瞳が捉える。次瞬には、その瞳は緩やかに細められた。
『息災のようで何よりだ』

『あなたも。ぶじでよかった』
幼い面立ちのクラッドの頬をスプライトが撫でる。
精霊にそのような概念があるのかは判らないが、姉妹のようだと。
深冬はぼんやりと考えた。

「人の存在を無視しないで欲しいわね」
カツン、という高いヒールの小気味良い音と共に降りてきた声で、和やかになりかけていた雰囲気が現実へと引き戻される。
何か仕掛けてくる様子が無かったため放置していた、紅い髪の魔族の女。
敵の、恐らく幹部クラスであろうその者と対峙しているという問題が、まだ華奈達には残されていたのだ。
女は神妙な面持ちで腕を組み、深冬をじっと見つめている。
視線が自分に向けられていることに気付いた深冬は、少したじろいで首を傾げた。
『魔の者よ。敵意が無いのであれば、去るが良い』
スプライトの目付きが厳しくなり、女を牽制する。
女は牽制には動じることをせず、軽く鼻を鳴らした。
「我々の手に一度は落ちた境涯でよく言うわ。まあ、今回は故あって引かせて貰うけど。その前に、そこの女」
組んでいた腕を解き、魔族の女は座り込んだままの深冬へと指先を突きつける。
「先刻、何か言いかけていたわね。最後まで聞かせてみせなさい」
深冬は何のことか瞬時には判らなかったが、フラットからの問い掛けのことかと思い立つ。むしろ、それくらいしか思い浮かばない。
「えっと……例えば、この人が死んでいたら、街の人達はもう嫌な思いをしなくても済むかもしれないし、それで気が晴れる人もたくさんいるよね。それも事実で、現実。一番簡単な方法だと思うよ。
けど、死んでしまった時点で、この人が自分の犯したことの重さに気付く機会は永遠になくなって、償うための機会も無くなっちゃ

う。
死んで終わりにすることより、生きて自分が悪かったことを認めて、嫌な思いをさせた人達に償っていくことの方が、ずっとずっと辛いよ」
「要するにハゲ様にはもっと苦しめと言っている訳ですね、深冬様」
華奈の茶々に、深冬は小さく笑う。
同じこと考えてるくせに、と、小さく呟いてから、彼女は続けた。
「ただ、それは単に私達の希望で、実際にこの人をどうするのかを決めるのは街の人達。街の人達が生きているこの人を見てどうするかは判らないけど、できれば、一番近くで生きてきた人達の手で。この人に、気付かせてあげて欲しいかな」
神妙な面持ちのまま静かに言葉を聞いていた女は、微かに唇を噛む。
そのような微かな変化になど誰もが気付かないまま、女は再び軽く鼻を鳴らし、深冬達から顔を逸らした。
「まあ、そんな予想以上の役立たず、私の知ったことではないし。好きにすればいいわ」
それだけ言い捨てて女が地を蹴ると、次の瞬間には女の姿が視界から掻き消える。
不思議な女だったと。女が消えた辺りを睨みながら、華奈は思った。
ふたつめの指輪の時の反応もそうであったが、敵にしては、行動にも言動にも謎が多い。

「ひあぁぁっ！？」
元々そういった細かい思考が苦手な華奈は、少々間の抜けた悲鳴らしきもので現実へと引き戻された。
悲鳴の先を見ると、顔を真っ赤にした深冬がフラットに抱え上げられ、足をじたばたさせてもがいている。
「いいっ、いいから、お、降ろしてぇっ！」

「降ろしたって一人じゃ歩けないだろ。小脇に抱えられるのとどっちがいいの？」
「う、ぅ……」
要するに姫抱っこという羞恥プレイに抵抗を試みていた深冬だったが、現状まともに歩けないのは事実なので、葛藤の末にフラットの厚意を受け入れることにしたようだった。
そんなふたりの様子を温かい眼差しで見守る環や精霊達と共に、青春しておるのう、などというじじくさいことを考えながら、華奈も生温かく見守る。
パルスはあくまで傍観を決め込み、やれやれといった風のため息を吐きながら、気を失ったロドリグを荷物の如く肩へと担いだ。
と同時に、深冬を見守っていた筈の華奈の視線が自分へと向けられていることに気付く。
何だ、と問う前に、華奈が真顔で言った。
「お姫様抱っこしてあげないの？」
「お前の頭はやはり湧いているようだな。そもそも両手が塞がるだろうが」
「そんな効率を求めた言葉を望んでいるんじゃないのだよ。大衆が求めるのは浪漫のみよ」
「何の浪漫があるのか理解しかねるな」
「判ってないなぁ。絵面的に面白すぎてあたしの笑いが取れるだろうが！！」
「取りたくもないがな。そんなに抱えたければ貴様が抱えろ」
「そんな掴みどころのない髪形の人なんて抱えたくありませんー」
「俺だって御免だ」
パルスがいつロドリグを放り投げるものかとはらはらしながらも、止めようのないものは放置することにして、カイリが話の方向転換を試みる。
「と、とりあえず、ロドリグの件もミフユさんの件もありますし、次の目的地等の話は戻って状況が落ち着いてからということにしま

せんか」
「そうね。構わないかしら？」
環が問うと、相変わらずカイリの肩にちょこんと手を添えてたゆたう幼い面立ちの精霊は、小さく縦に首を降った。
だが、戻るべき場所へと視線を移した目下夫婦漫才中以外の４名の視線の先には、更なる問題が立ちはだかる。
指輪の魔法陣が発動する際に、危機を感じた深冬が造り出した、上へと繋がる階段への扉を塞ぐ分厚い氷の壁。
深冬は疲労困憊。
溶かすための熱源になるようなものも無く、クラッドの力では階段ごと崩してしまいかねない。
割ってみるしかないか、と、カイリが歩み出ようとした、その時。
非常に輝かしい笑顔を湛えた環様が、愛用の巨大鈍器を構えて彼の前に立ち塞がった。

その笑顔に反逆できる者など存在する筈も無く。
数瞬後。空間内に、大気の唸り声ともの凄まじい轟音が響き渡った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9737w/

A.G.O.

2011年12月4日00時52分発行